The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	北宋五子哲學 : 附朱子晩年定論辯證
Author(s)	松山, 直藏
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90230
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

文學博士松山直藏著

北宋五子哲學

附朱子晚年定論辯證

故懷德堂教授松山直藏先生、夙に心を宋學の研鑽に潛め、遍く伊洛の源委を討ねて博搜遺す所なし。乃ち昭和二年三月、北宋五子哲學を著して文學博士の學位を受けらる。篇帙甚大ならずと雖、先生の學此に見るべし。先生懷德堂重建の際、任に教授に就き、爾來十餘年、孜々よく力め循々よく誘ひ、及門の士景慕鑽仰す。顧みれば先生の道山に歸せられしより、倏忽已に五星霜、歲月彌久しうして、德化愈遠きを知る。乃ち相議して茲に此書を刊し、普く先生の知友門下に頒ち、一は以てその學を後世に傳へ、一は以てその德を永遠に紀すと云爾。

昭和六年三月

懷德堂教授　財津愛象謹識

一、本書原文片假字を用ひて、引用句讀を附せず、今便宜上平假字に改めて句讀を施せり、もし誤謬あらば校訂者の責なり。

一、本書印刷校正の事務は、之を助教授吉田鋭雄氏、堂友會幹事酒井全太郎氏に委囑せり。記してその勞を謝す。

財津愛象又識

北宋五子哲學目次

序論

第一篇　周惇頤の哲學

第一章　自然哲學

第二章　道德哲學

第一節　道德論

第二節　爲學論

第三章　太極圖考

第一節　太極圖授受考

第二節　太極圖淵源考

第四章　太極圖說考

第五章　餘論

第二篇　邵雍の哲學

第一章　自然哲學
第二章　道德哲學
第一節　性理論
第二節　爲學論
第三章　餘論
第三篇　程顥の哲學
第一章　本體論
第二章　道德哲學
第一節　人性論
第二節　爲學論
第三章　定性書考
第四章　餘論
第四篇　程頤の哲學
第一章　本體論

第二章　道德哲學
第一節　性情論
第二節　爲學論
第三章　顏子所好何學論考
第四章　餘論
第五篇　張載の哲學
第一章　本體論
第二章　道德哲學
第一節　性情論
第二節　爲學論
第三章　自然論
第四章　餘論
約結

北宋五子哲學

文學博士　松山直藏著

序論

支那上下寥々數千歲を通じて、思想絢爛の美、學術蔚興の盛を極めたるもの、先づ首に上古周代を推さゞるを得ず。降りて秦漢より隋唐に至るの間、佛道二敎の發達隆興するあり、經學文學各特異の相を呈して、一代の偉觀を極むるものありと雖も、思想史上未だ一大時期を劃するに至らざりき。近古宋に至るに及びて、新哲學の勃興するあり、茲に古來の學術其面目を一新せり。而して之が先路を開き、之が規模を定めしものを周邵程張五子となす。熟ら宋學勃興の事情と其特質とを考ふるに、其來由するところ蓋一朝一夕に非ず、遠く前代より開け來りたる機運の宋に及びて熟するありて、茲に新學の發現を見るに至りしなり。斯かる機運を醞成せし事由一にして足らずと雖も、就中其主なるものは學術の反動是れなり。今宋以前に於ける學術の發達變遷を考ふるに、三代以上文獻の徵すべきなし。周末に及びて、諸子百家競ひ起りて、恰も百華爛漫の觀を呈せしも、各一端を執りて自ら是とし、互に相駁非せしかば、道術之が爲めに分裂し、是非

之が爲めに殺亂し、學問道德其指歸を失ひ、統一するところなきに至れり。漢孝武、董仲舒の言を用ひ、六經を表章し、百家を罷黜し、士を用ふる皆儒學を以てす。是より官學儒の一道に定まり、學問經の一途に歸す。秦燔書坑儒の事あり、漢興りて孝惠挾書の禁を除き、秦朝の博士舊學稍く其藏匿するところの經書を出して、以て其徒に授けてより、各經專家の學あり、朝廷亦各經專門の博士を置きて、其勢益々長ず。是に於てか經學師承を尙び、家法を重んず。凡そ言語文字、古今の變あるは理の常なり、殊に秦漢の際字體の變あり、孝武の世古文出でゝより、學今古の分あり、解詁の事自から經學に於ける一大喫緊事たりしかば、學者注經の事業漸く盛にして、兩漢を通じて經義訓詁の學其風を成せり。魏晉南北朝を經て唐初に至るまで、師承を尙び家法を重んずるの風未だ失はれず、經學南北を分ち、各經注家を異にするに從ふて、其義指相同からず、是を以て學者適從するところを知らず。唐太宗孔穎達等に命じて五經正義を撰せしめ、尋で四經の註疏あり、是より經義一定するところありしも、學者是より唯だ正義を治むることを知りて、復た博く群義を究むるものなし。是に於て正義註疏以外の異義遂に亡びて、經學正義註疏の學となる。唐を經て宋に及びて、這の固定沈滯の勢を破りて、經義の上に一新生面を開かんとし、正統の舊說を排棄して、新異義を樹つるもの相繼いで輩出す。斯かる機運は已に唐代に於て萌芽を發し、啖助、趙匡、陸淳、施士丐の三傳を掊擊するに端を發せり。宋に入るに及びて、孫復の尊王發微、歐陽脩の易童子問、詩本義、王安石の三經新義、劉敞の七經小傳の如き、吳棫の尙書古文に疑を挾むが如き、皆舊義の樊籠を脫して、自由の天地に翺翔

を試みるものなり。此れ漢唐一千有餘年間の經學を支配せし師承專門訓詁の學に對する反動に外ならず。唐代士を取るに最も詞賦を重んぜしかば、上の好むところ下自から之に化し、上下を通じて文藝を尙び經義を輕んずるの風を成し、其弊や輕薄浮靡に流る、宋太祖國を建つるに及び、專ら忠厚の風を重んじ、學校を興し遺書を求め、節義を旌はし德行孝弟を擧ぐ、始祖の仁意自から有宋一代の國風を成し、其化の及ぶところ、天下の人心をして、文藝の浮靡を去りて道德踐履の實學に嚮はしめき。又六朝以來隋唐を經て隆盛を極めたる佛道二敎の思想は、深く儒紳の間に浸潤し、殊に禪宗盛行、高僧大德輩出して、偉大なる感化を及ぼすあり、是等の事情は經學に於ける反動と相結合して、茲に濂洛の新哲學を現出せしむるに至りしなり。道德の實學に嚮へる傾向と訓詁學の反動と相合して、經義訓詁の舊套を脫却して儒理を闡明し、先聖の眞意を發揮せんことを試みたる、此れ宋學の意義一なり。佛道二敎の影響刺激と訓詁學の反動と相合して、二敎の哲學的思想を拉し來りて儒理を闡明し、宇宙の開發を說き、本體を論じ、儒敎に哲學的根據を與へんことを試みたる、此れ宋學の意義二なり。此れを宋學勃興の事情なりとす。故に宋學は漢唐正統經義の羈絆より離脫して、三敎の思想より鎔鑄せられたる自家の哲學に立脚して儒經を解釋し、其道德的意義を發揮せるものなり。其濃厚なる哲學的道德的色彩を帶ぶるところ、此れ宋學の特質にして、思想史上一大時期を劃する所以なり。今以下五子の哲學を列叙し、其同異並に相互關聯するところを明かにせんと欲す。

第一篇　周惇頤の哲學

第一章　自然哲學

周子の自然哲學に關する說は、其太極圖及圖說に具す。

彼は謂へらく、天地萬物の本源は無極なり、無極より太極を生ず、太極は其中に動靜の機を本具す。是に於て太極動いて陽を生じ、動くこと極まりて靜なり、靜にして陰を生ず、靜なること極まりて復た動く、一動一靜互に其根となり、陰に分れ陽に分れて、天地の兩儀立つ、天地開けて陽變じ陰合して氣化行はれ、水火木金土の五行を生ず、五行の氣順布して四時行はる。されば萬物の形質を成すところの五行は、一陰陽に外ならず、陰陽は一太極に外ならず、太極は本と無極なり、而して既に五行の生ずるや、各一性を本具す、無極の眞と二五の氣の精と妙合して凝る、其凝るや乾道は男性を成し、坤道は女性を成す、男女兩性の氣交感して形化行はれ萬物を化生す、萬物生生して變化窮なし、人は其氣の秀を得て最靈なるものなり（太極圖說）

彼は無極を以て宇宙の本源となし、天地萬有皆這の絕對無限なる實體より開展し來るものとなせり。彼は陳摶より傳はり來れる先天太極圖を採り、支那に於ける古來の自然哲學的思想を集めて、一家の說を構成したるものにして、其太極圖說を經緯するものは、儒釋道三家の思想なり。其無極と云ひ根と云ふは老

莊に原き、太極兩儀を言ふは易大傳に原き、無欲主靜を說くは釋道二家に原く。

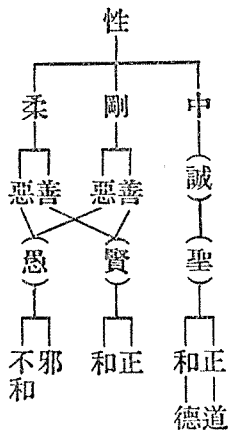
第二章　道德哲學

第一節　道德論

周子の道德哲學に關する說は、其太極圖說及通書に具す。

彼謂へらく、人は五氣の秀を得て、萬物中最靈なるものなり。(イ)五行各一性を具有すれば、人は之を稟けて生れながらに五性を具す、人の氣を稟くるや自から厚薄淸濁の同からざるあり、故に(ロ)其性剛善剛惡柔善柔惡中の五等あり、(ハ)唯聖人は中性を得て、性のまゝに安んずるものなり、故に其行正しく且つ和して節に中る。(ニ)形既に生じ神發して知るに及びては、本具せる五性物に感じて動く。其動くや、動いて正きあり邪なるあり、節に中るあり中らざるあり、是に於てか善惡分れ萬事出づ。聖人之を定むるに中正仁義を以てし、靜を主として道德の準則を立つ。凡そ(ホ)動いて正きを道と曰ふ、(ヘ)天下の至尊なるものなり。(ホ)用ひて和するを德と曰ふ、(ヘ)天下の至貴なるものなり。(ト)愛の德を仁と曰ひ、宜の德を義と曰ひ、理の德を禮と曰ひ、通の德を智と曰ひ、守の德を信と曰ふ、五常是れなり。五常は五性の動いて正く、用ひて和するものなり、(ホ)動いて仁義禮智信ならざるものは皆邪動なり。故に人は動を愼まざるべからず。動いて道德に

合ふものは聖人なり、而して(チ)聖人の本は誠なり、此れ無極の眞なり。誠は純粹至善(ヌ)无妄なるものなり、又(リ)寂然不動無爲なるものなり、而して五常百行の本原なり、聖人の道は仁義中正のみ、今上說を約して之を圖示すれば左の如し。



(イ) 五行之生也、各一其性。(太極圖說)

(ロ) 性者剛柔善惡中而已矣。(通書師第七)

(ハ) 惟中也者、和也、中節也、天下之達道也、聖人之事也。(同上)

(ハ) 性焉安焉、之謂聖。(同誠幾德第三)

(ニ) 形既生矣、神發知矣。五性感動、而善惡分、萬事出矣。聖人定之、以中正仁義、而主靜、立人極焉。(太極圖說)

(ホ) 動而正曰道、用而和曰德。匪仁匪義匪禮匪智匪信、悉邪也。(通書愼動第五)

(ヘ) 天地間至尊者道、至貴者德而已矣。（同師友第二十四）

(ト) 德愛曰仁、宜曰義、理曰禮、通曰智、守曰信。（通書誠幾德第三）

(チ) 誠者聖人之本。大哉乾元、萬物資始、誠之源也。乾道變化、各正性命、誠斯立焉、純粹至善者也。（同誠上第一）

(リ) 寂然不動者誠也。（同聖第四）

(ヌ) 无妄則誠矣。（同家人睽復无妄第三十二）

第二節　爲學論

人皆无極の眞を本具す、此れ誠にして聖人の本なり。唯聖人は性のまゝに安んずるも、衆人は其動を愼まずして妄に流る。(イ)妄は不善の動なり、不善の動を復するときは无妄なり。无妄なれば則ち誠にして、聖人の本に復るなり。(ロ)復りて執る之を賢と曰ふ。學は聖人を學び、聖人の本に復るの道に外ならず。聖人を學ぶの道二あり。一は內面的にして、之を己に求むるものなり。一は外面的にして、之を人に求むるものなり。內面的方法二あり。(ハ)一は一なるを要とするものなり。一とは無欲なり、無欲なれば靜なるときは虛にして、動くときは直なり。靜なるとき虛なれば明なり、明なれば通ず。動くとき直なれば公なり、公なれば溥なり。明通公溥は聖に庶し。衆人は直ちに無欲なること能はず、無欲ならんと欲せば、己に

克ちて禮に復らざるべからず、己に克ちて禮に復るの道は、(ニ)常に懲忿窒慾遷善改過の工夫を積むにあり。二は(ホ)思なり。思は聖功の本なり、思へば微に通ず、微に通ずれば通せざるところなきに至る、通せざるなきは聖人なり。されど思ふて通ずるは用にして、思ふなきを本となす、思ふことなくして通せざるなきを聖人となす。外面的方法は(ヘ)之を師友に求むるものなり、(ト)先覺者明者を師友として、自ら其惡を易へて中に至るにあり。上説を約して之を圖示すれば左の如し。

- 學(學聖人)
  - 內面的方法
    - 一—無欲
      - 懲忿窒慾
      - 遷善改過
    - 思—無思
  - 外面的方法—師友

(克己復禮)

(イ) 誠心、復其不善之動而已矣。不善之動妄也。妄復則无妄矣、无妄則誠矣。(通書家人睽復无妄第三十二)

(ロ) 復焉執焉、之謂賢。(同誠幾德第三)

(ハ) 聖可學乎。曰、可。曰、有要乎。曰、有。請問焉。曰、一爲要。一者無欲也。無欲則靜虛動直、靜虛則明、明則通、動直則公。公則溥、明通公溥庶矣乎。(同聖學第二十)

(ニ) 君子乾乾、不息於誠。然必懲忿窒慾、遷善改過、而後至、乾之用莫善是。(同乾損益動第三十一)

(ホ) 無思本也。思通用也。幾動於彼、誠動於此、無思而無不通、爲聖人。不思則不能通微、不容則不能無不通、是則無不通、生於通微、通微生於思。故思者聖功之本。(同思第九)

(ヘ) 人而至難得者、道德有於身而已矣。求人至難得者、有於身。非師友、則不可得已(同師友第二十四)

(ト) 故聖人立教、俾人自易其惡、自至其中而止矣。故先覺覺後覺。闇者求於明、而師道立矣。(同師第七)

周子の說の易に根柢を有せることは、其の大哉易也、性命之源乎(通書誠上第一)と曰ひ、又太極圖說の結語に、大哉易也、斯其至矣と曰へるを見るも、之を察すべく、其友潘興嗣の周子墓誌銘には、尤善談名理、深於易學と曰へるにて明かなり。更に太極圖說及通書を觀れば、易說多く、且つ其學の易に根柢を有するを知ることを得べし。而して其誠を以て道德の根源とせるは、中庸に原けること明かなり。斯くの如く周子の學の易と中庸とに其根柢を有すること明かなるが、之と同時に一の看過すべからざることは、梁肅の止觀統例、及李翺の復性書に其淵源を有せることなり。梁肅は沙門元浩に就きて天台止觀の法門を學び、止觀統例を作る。李翺は藥山の惟儼に師事して悟入するところあり、易と中庸とに根本して、復性書を作れるなり。佛を喜びし周子の學の此等二子に淵源を有する、亦異むに足らざるなり。周子が(イ)誠を以て聖人の本とし、(ロ)聖人を以て學ぶべしとし、(ハ)思を以て聖功の本とし、(ニ)無思を以て本となし、(ホ)寂然不動を以て誠となす等の思想は、皆之を復性書中に於て見ることを得るなり。又主靜無欲を以て聖功の本となすの思想は、(ヘ)統例中に於て之を見ることを得べし。

(イ) 是故誠者聖人性之也。(復性書上)

(ロ) 聖人知人之性皆善、可以循之不息、而至於聖也。(同上)

(ハ)(ニ) 或問曰、人之昏也久矣。將復其性、各必有漸也。敢問其方。曰、弗慮弗思、情則不生。情既不生、乃爲正思。正思者無慮無思也。(同中)

(ホ) 知本無有思、動靜皆離。寂然不動者、是至誠也。(同上)

(ヘ) 夫止觀何爲也。導萬法之理、而復於實際者也。實際者何也。性之本也。物之所以不能復者、昏與動使之然也。照昏者謂之明、駐動者謂之靜。明與靜、止觀之體也。在因謂之止觀、在果謂之智定。因謂之行、果謂之成、行者行此者也、成者證此者也。原夫聖人有以見惑足以喪志、動足以失方。於是乎、止而觀之、靜而明之、使其動而能靜、靜而能明。下略(梁肅正觀統例)

第三章　太極圖考

第一節　太極圖授受考

太極圖の淵源授受に關する辯證は、黃宗炎の太極圖說辨、毛奇齡の太極圖說遺議、胡渭の易圖明辨善く之を悉くせり。今此等に本き少しく私見を加へ、太極圖考を作る。

太極圖の淵源授受に關しては異說あり。

第一說　華山の隱士陳摶より傳はれりとするもの。朱震、胡宏等之を前に唱へ、黃宗炎、毛奇齡、胡渭等後

に之に和せり。

濮上陳摶以先天圖傳种放。放傳穆脩、脩傳李之才、之才傳邵雍。放以河圖洛書、傳李溉、溉傳許堅。堅傳范諤昌、諤昌傳劉牧。脩以太極圖、傳周敦頤、敦頤傳程頤、程顥。（朱震進周易表）

推其道學所自、或曰、傳太極圖於穆脩也、傳先天圖於种放、种放傳於陳摶。此殆其學之一師歟、非其至者也。（胡宏通書序略）

第二說　潤州鶴林寺の僧壽涯より傳はれりとするもの、晁說之、胡長孺等是なり。朱子の門人度正も亦其說を叙して之を廢てず。

胡武平、周茂叔同師潤州鶴林寺僧壽涯。（晁公武郡齋讀書志、伊川易傳條下引晁景迂云）

孟子歿後、道瀯統絕。子周子起、然後瀯者復光、絕者復續、河南程子二子、得周子之傳。周子之傳、出于北固竹林寺僧壽涯、而爲理學之首唱。（胡長孺大同論）

或謂、先生與胡文恭公同師潤州鶴林寺僧壽涯。或謂、邵康節之父、避逅文恭於廬山、從隱者老浮圖游、遂同授易書。所謂隱者、疑即壽涯也。中略今以先生嘗請問於此二人者、即謂其學出於此二人、失之遠矣。（度正濂溪先生年譜）

按ずるに、潤州は江蘇省鎭江府にして、隋より宋初に至るの名なり。大淸一統志に據るに、北固は州治丹徒縣の北一里に在る山名なり。鶴林寺は丹徒縣の南三里に在る黃鶴山の下にあり。竹林寺は丹徒縣城南六里に在り。二寺俱に丹徒縣に在り、一に鶴林寺と曰ひ、一に竹林寺と曰ふ、蓋異聞に屬す。

第三說　周子の自作に成れりとなすもの、朱熹、張栻等是なり。

太極圖者、濂溪先生之所作也。（朱熹太極圖解）

蓋先生之學、其妙具於太極一圖。通書之言、皆發此圖之蘊。而程先生兄弟、語及性命之際、亦未嘗不因其說。觀通書之誠動靜理性命等章、及程氏書之李仲通銘、程邵公誌、顏子好學論等篇、則可見矣。故潘清逸誌先生之墓、叙所著書、特以作太極圖爲稱首。然則此圖當爲書首不疑也。（朱熹周子太極通書後序）

按、漢上朱震子發言、陳摶以太極圖傳种放。放傳穆脩、脩傳先生。衡山胡宏仁仲、則以爲种穆之傳。特先生所學之一師、而非其至者。武當祁寬居之。又謂、圖象乃先生指畫、以語二程、而未嘗有所爲書。此蓋皆未見潘誌而言。若胡氏之說、則又未考乎先生之學之奧、始卒不外乎此圖也。（朱熹再定太極通書後序本注）

惟先生生乎千有餘載之後、超然獨得夫大易之傳、所謂太極圖、乃其綱領也。（張栻通書後跋）

按ずるに、毛奇齡太極圖說遺議本注に張南軒を引採して曰く、周濂溪之學、始宗陳希夷、後從穆脩、邵康節游、又嘗學于潤州鶴林寺僧壽涯、故其所本正而取材廣也と。今南軒文集を觀るに之なし。西河の原くところ何なるかを知らず、姑く記して疑を存す。

今此等諸說につきて考ふるに、朱熹、張栻等の周子自作說は、太極圖說を表章して、道學の妙奧此に在りとし、其本くところあるを掩はんがために、其學師傳に由らずして、道體を默契せりとなすものなり。是れ未だ全く信ずべからず。朱震、胡宏等の華山隱士陳摶より傳はれりとの說は、已に遠く易師の間に行はれ

しものにして、必ずや本くところあるべし。程明道の邵堯夫先生墓誌銘に、先生得之於李挺之、挺之得之於穆伯長、推其源流、遠有端緒、と曰へるを觀れば、种放、陳摶に說き及ばずと雖も、朱震の授受說は、已に遠く明道の時に行はれたるものなるを知るべし。彼の進周易表の中に、西洛に遊宦し、遺書を觀ることを獲、問疑請益、徧く師門を訪ふて、而して後粗ぼ一二を窺ふと曰へば、當時諸師の間に傳はれる授受の說を集成せしものなるべし。然れば是說未だ遽かに否定し去るべからず。但穆脩より直ちに周惇頤に傳ふると云ふは信じ難し。何となれば穆脩歿する時、周子年纔に十六の成童にして、（元劉因、其記太極圖後に於て、穆死於明道元年、而周子時年十四矣、と曰へるは誤れり、）未だ學を傳ふるに足らざればなり。是に於てか晁說之、胡長孺等の僧壽涯說を考へざるべからず。周子仁宗景祐四年母を喪ひ、潤州丹徒縣に葬る、時に年二十一。黃鶴山鶴林寺は、丹徒縣の南三里に在り、居相遠からず、僧壽涯と相交る、蓋是時なるべし。又明道は、許渤潤州に在りて范文正、胡宿、周茂叔と游ぶを曰へり。（程氏遺書卷三拾遺）又下の二條は、許渤の爲人を觀るに足る。

許渤初起、問人天氣寒溫、加減衣服。一加減定、即終日不換。（程氏遺書卷三拾遺　明道語）

許渤與其子、隔一窗而寢。乃不聞其子讀書與不讀書。先生謂、此人持敬如此。（曷嘗有如此聖人　程氏遺書卷三伊川語）

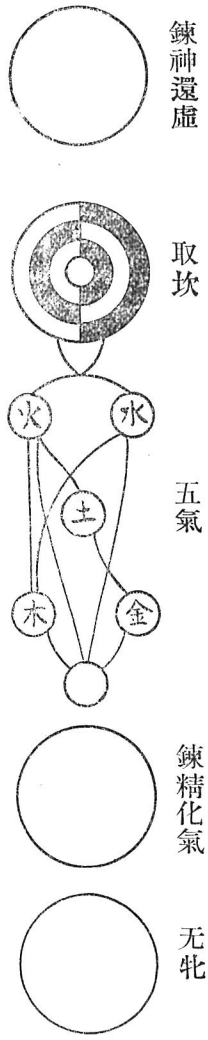
此れ道家の坐忘、釋家の禪定を修むるの徒たり。范文正吳に守たりし日、瑯琊慧覺禪師來謁し、留まること數日、文正言下に歸を知ると云へば、（明朱時恩居士分燈錄卷上）文正も亦佛を修めしものなり。許渤が范胡周三子と游べるより察するに、胡周二子が同じ壽涯を師とせしと云へる晁景迂の言、蓋虛に非るべし。當時儒にして釋

老を修め、釋老にして易を講究するの風頗る行はるれば、壽涯が易を假りて道家の旨を說ける參同契に原ける陳希夷の學を傳ふるは、固より有り得べきの事たり。此等の諸點より考ふれば、周子の太極圖が壽涯より傳れりとの說は、最も事實に近きものと謂ふべし。

第二節　太極圖淵源考

周子太極圖の淵源、之を陳摶の无極圖に歸すること、黃朱毛三家相同きところにして、黃は明かに其圖を示し、朱は圖を畫せざるも之を詳說せり。

陳圖南本圖（自下而上逆則成丹）



煉神還虛　取坎　五氣　煉精化氣　无牝

復歸无極　塡離　朝元　煉氣化神　之門

辨曰。此圖本名无極圖。陳圖南刻于華山石壁。列此名位、掇自河上公。魏伯陽得之、以著參同契。鍾離權得之、以授呂洞賓。洞賓後與圖南同隱華山、因以授陳。陳又受先天圖于麻衣道者、皆以授种放。放以授

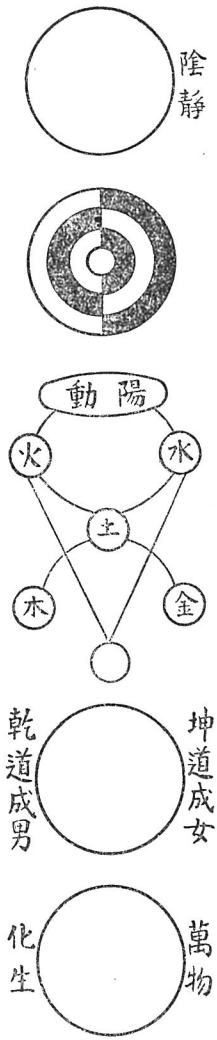
穆脩與僧壽涯。脩以先天圖授李挺之。挺之以授邵天窆、天窆以授子堯夫。脩以无極圖授周茂叔。茂叔又得先天地之偈于壽涯。乃方士修鍊之術。其義自下而上、以明逆則成丹之法、其大校重在水火。下略（黄宗炎易學辨惑太極圖說辨）

按、周子之易通書是也、故又名易通。若夫太極一圖、遠本道書、圖南陳氏從而演之。爲圜者四位五行、其中自下而上。初一曰、玄牝之門。次二曰、鍊精化氣鍊氣化神。次三、五行定位、曰五氣朝元。次四、陰陽配合、曰取坎塡離。最上曰鍊神還虛復歸无極。故謂之无極圖。乃方士修鍊之術耳。當時曾刋於華山石壁。相傳圖南受之呂嵒、嵒受之鍾離權、權得其說於魏伯陽、伯陽聞其旨於河上公。在道家未嘗詡爲千聖不傳之秘也。周子取而轉易之、亦爲圜者四位五行、其中自上而下。最上曰无極而太極。次二、陰陽配合、曰陽動陰靜。次三、五行定位、曰五行各一其性。次四、曰乾道成男、坤道成女。最下曰化生萬物。更名之曰太極圖。仍不沒无極之旨。下略（朱彝尊經義考卷二百八十三周子易）

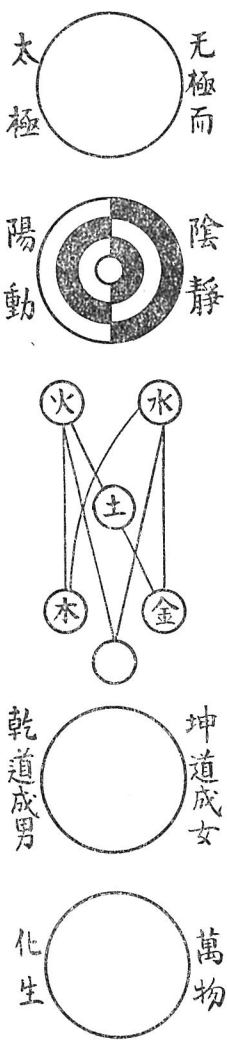
二人言ふところ符節を合するが如し。按ずるに、經義考已に黄氏太極圖說辨を錄し、毛氏の圖說遺議に及ばざるを以て之を觀れば、黄朱毛三家の著、黄氏易學辨惑を以て最先となす。朱氏の說蓋黄氏を襲ひしものなるべし。果して然らば黄氏の說何に原けるか、所謂陳圖南本圖なるもの今傳はらざれば、之を見るに由なし。黄氏は宋乾道間、朱子傳ふるところの周子太極新圖を採りて、陳氏原圖と定め、周子が各位に配する名稱を轉易して、道家成丹の法を示すの名となし、呼びて陳圖南本圖と倣せるものにて、揣摩臆度に過ぎ、武斷に失するものと謂ふべし。何となれば周子の圖假令陳氏に出づと云ふも、周子に至るまで已に數傳を

經たり、其間何等の更變を加ふるなしと斷ずべからざればなり。且假りに毫の改變を加ふることなく本圖を傳へたりとするも、黄氏は何が故に紹興間朱震進つるところの太極原圖を採らずして、朱子の太極新圖を採れるや、定めて原圖謬りて新圖正しと斷ずべからず。

宋紹興間所進周子太極原圖



宋乾道間朱子所傳周子太極新圖



且朱震の進易表に明かに太極圖と曰ふ、是れ傳ふるところあるなり。黄氏の本名无極圖と曰ふ、其本くと

ころを知らず、舊と曾て華山石壁に刻すと云へること、亦未だ遽に信ずべからず。圖書集成方輿彙編山川典華山部に、王圻三才圖會、陝西通志、華陰縣志、華嶽志以下古今の藝文紀事を博採し、陳希夷の古蹟逸事を載するも、一も太極圖刻石の事を言へるものなし。

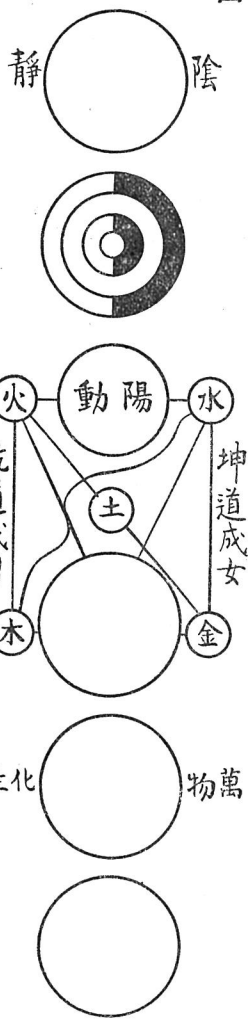
毛奇齡は其太極圖說遺議に於て、或說を擧げて曰く、

或云、其圖在隋唐之間、有道士作眞元品者、先竊其圖入品中、爲太極先天之圖。此即摶之竊之所自始。

且其稱名有無極二字、在唐玄宗序中。

今秘府に藏せる道藏經を檢するに、國字號（洞玄部靈圖類）七に、上方大洞眞元妙經品上方大洞眞元妙經圖あり。品に唐明皇御製序あり、（全唐文卷四十一元宗二十二にも之を載す、）圖五あり、曰、虛無自然之圖、曰、二儀冥有之圖、曰、道妙惚恍之圖、曰、太極先天之圖、曰、氣運之圖、是なり。各圖皆序あり、其太極先天之圖は、紹興間進つるところの太極原圖と全く相同じ。

太極先天之圖



其少しく相異れるを致せるは、蓋鏤刻の際誤りしものなるべし。太極先天之圖の序に曰く、

粤有太易之神、太始之氣、太初之精、太素之形、太極之道、無古無今、無始無終也。故易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦、八卦定吉凶、吉凶生大業。言萬物皆有太極兩儀四象之象、四象八卦具而未動、謂之太極、太極也者、天地之大本耶。天地分太極、萬物分天地。人資天地眞元一氣之中、以生成長養。觀乎人、則天地之體見矣。是故師言氣極則變、既變則通、通猶道耶。況反者道之動。蓋有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可以爲天下母。母者道耶、至矣哉道之大也、無以尙之。夫道者有淸有濁、有動有靜。但凡其人行道也歟、則生神矣。夫或躬齊、大方則屆于其亡、信哉。

虛無自然之圖より氣運之圖に至る五圖は、天地萬物の生成並に氣運を圖示するものにして、其序は之を說けるものなり。畢竟道家の造化論に外ならず、成丹の法を說くものと全く相異なり。若し毛氏擧ぐるところの或說の如くならしめば、周子は陳摶より遞傳せる无極圖を傳へて、之を太極先天之圖に還原したるものにして、其一字一語を差へずして原圖の舊に復することは、偶然暗合せしものとも謂ふべけれども、そは餘りに不可思議と謂はざるべからず。寧ろ先天太極圖を傳へたりとする方、眞に近かるべし。

先天太極圖は、參同契の水火匡廓圖、三五至精圖に原けることは否むべからず。此等兩圖は、孟蜀廣政十年に成れる彭曉の周易參同契分章通眞義三卷、明鏡圖訣一卷の明鏡圖中に在り。隋唐間の道士、五代の世に成れる書を竊み得るの理なし。按ずるに、參同契が漢世魏伯陽の手に成れりとの說は憑信するに足らざるも、

虞翻已に其名を擧げ、葛洪是の說を創むれば、魏晉の際已に其書の存せしを知るべし。されば參同契諸圖、必や彭曉以前に於て遠く其端を發せしものなるべく、隋唐間に於て道士が之を採りて先天太極圖を作るの事は、有り得べきの事たり。斯く考へ來れば、周子の太極圖は黃朱毛三氏の說の如く、所謂陳摶の无極圖を轉易せしものとせんよりは、寧ろ上方大洞眞元玅經圖の先天太極圖を傳へたるものとすべきなり。

第四章　太極圖說考

太極圖說の文字思想、多くは淵源するところあり。毛氏奇齡太極圖說遺議を著し、搜羅剔抉餘すところなきに幾しと雖も、其儒經に出づるものは多くは之を擧げず、且往々譌謬あり。今仍りて之を補正し、太極圖說考を作る。

圖說の首句、宋の國史濂溪傳中載するところの圖說原文には、本と自無極而爲太極とありしを、朱子は無極而太極を以て此說の本語なりとし、自爲の二字を增すを以て、前修の累を爲し、後學の疑を啓くものとし、當さに請ふて之を改むべしとせしこと彼の記に見ゆ。

戊申（淳熙十五年）六月在玉山、邂逅洪景盧內翰、借得所修國史、中有濂溪程張等傳、盡載太極圖說。蓋濂溪於是始得立傳、作史者於此爲有功矣。然此說本語首句、但云無極而太極。今傳所載乃云自無極而爲太極。不知其何所據、而增此自爲二字也。夫以本文之意、親切渾全明白如此。而淺見之士、猶或妄有譏議。若此字

其爲前賢之累、啓後學之疑、益以甚矣、謂當請而改之、而或者以爲不可。昔蘇子容特以爲父辯謗之。故請刊國史所記草頭木脚之語、而神祖猶俯從之、況此乃百世道術淵源之所繫耶。正當援此爲例、則無不可改之理矣。朱子文集卷七十一記濂溪傳

毛氏奇齡辯じて曰く、

圖說在程邵諸儒、未嘗言及、故世亦未見其文。至南渡後、朱子始刻其文于乾道間。而當時見者皆不能信、多起而爭。然在所爭者、亦祇見無極而太極作五字句。及朱子遇洪景盧于玉山、語及原文。知國史于濂溪傳中所載圖說、首句作自無極而爲太極。時景盧爲史官、遂借觀其所藏史本、請去自爲二字不可得。乃指爲史官所增、擬請改去。夫史官無改人成文者、況景盧名邁、即洪容齋也。容齋博覈伉直、定無訛錯與益損二弊。即或非其手筆、係前人史官、然亦何苦爲此。乃後人以爲朱子删去自爲二字、（如韓苑洛輩）則又不可定。（太極圖說遺議）

朱子太極圖解の成りしは乾道四年にして、洪景盧に邂逅して國史を借りしに先つこと二十年なり。其後記の成りしは乾道九年なり。朱子が前に傳ふるところの圖說自爲二字なく、後に觀るところの國史自爲二字ありて、相同からざるは何ぞや。朱子の國史本を觀るの前、圖說を觀しもの蓋朱子一人に止らざるべし。然るに朱子校定するところの無極而太極の五字句に對して、自爲二字を削去せしを爭ふものなきを觀れば、朱子傳ふるところの圖說、本と自爲の二字なきを察すべく、朱子の妄りに删去せしものに非るを知る。又洪邁博覈伉直、定めて訛錯と益損との二弊なきこと、毛氏の說の如くなるべければ、景盧の妄增にも非るべ

し。蓋兩樣の異傳ありしものなるべし。但余は圖說の內容上より考へて、自無極而爲太極の七字句を採るものなり。其理由は後章に於て之を說かんと欲す。

自無極而爲太極。

天下之物、生於有、有生於無。（老子反者道之動章）

夫有形生於無形、乾坤安從生。天地本無形、而得有形、則有形生於無形矣。故繫辭曰、形而上者謂之道。夫乾坤者、法天地之象質。然則有天地、則有乾坤。將明天地之由、故先設問乾坤安從生也。故曰、有太易、有太初、有太始、有太素也。太易者未見氣也。以其寂然無物、故名之爲太易。太初者、氣之始也。元氣之所本始太易、既自寂然無物矣、焉能生此太初哉。則太初者、亦忽然而自生。太始者、形之始也。形見此天象、形見之所本始也。太素者、質之始也。地質之所本始也。形質具而未離、故曰渾淪。雖含此三始、而猶未有分判。老子曰、有物渾成、先天地生。渾淪者、言萬物相渾成、而未相離。言萬物莫不資此三者也。視之不見、聽之不聞、循之故曰易也。易无形畔。此明太易無形之時、虛豁寂寞、不可以視聽尋。繫辭曰、易無體、此之謂也。太易始著太極成、太極成乾坤行。太易天地未分、乾坤不形也。太易無也、太極有也。太易從無入有。聖人知太易有理未形、故曰太易。（易緯乾坤鑿度乾鑿度）

太初而後有太始、太始而後有太素。有形始於弗形、有法始於弗法。太易氣未分、太初氣始見、太始物有形、太素萬物素質由淳在。（同上）

疏、周易云、下二引周易等者、文中亦二先引文後斷義。今初即繫辭也。中略 注云、夫有必始於無、故太極生兩儀也。太極者無稱之稱、不可得而名、取其有之所極、況之太極者也。孔云、太極天地未分之前、混而爲一、即是太初太一也。老子云、道生一、即此太極之謂。混元既分、即有天地、故云太極生兩儀、即老子一生二也。不言天地者、指其物體、下與四象相對、故云兩儀、謂兩體容儀也。釋曰、若準列子有太易太

初太始太素。太易者、未見氣也。太初者、氣之始也。太始者、形之始也。太素者、質之始也。彼注云、質性也。又釋太易、指周易太極。此則太初非太易、便成太極在初。若準易鈎命訣說、有五運、前四同列子。第五名太極則非初。釋與列子大同、運則運數、易謂改易。元氣始散、謂之太初。氣形之端、謂之太始。形變有質、謂之太素。質形已具、謂之太極。雖小異同、皆是元氣生天地耳。（唐釋澄觀大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔卷第十四）

毛氏奇齡の太極圖說遺議に、唐僧杜順作華嚴疏、其演義有云と曰へり。按するに、華嚴疏並に演義鈔を撰せしは、釋澄觀にして、杜順に非ず、其の杜順となせるもの誤れり。

議曰、空界劫中、是道敎指之云虛無之道。然道體寂照靈通、不是虛無。老氏或迷之、或權設、務絕人欲、故指空界爲道。空界中大風、即彼混沌一氣、故彼云道生一也。金藏雲者、氣形之始、即太極也。（唐釋宗密原人論斥偏淺第二本注）

無極

知白守黑、復歸于無極。（老子知其雄章）

物之終始、初無極已。（列子湯問篇）

無則無極。（同上）

入無窮之門、以游無極之野。（莊子在宥篇）

往來洞無極。（參同契關鍵三寶章）

妙契之致、本乎冥一、物我元會、歸于無極。（肇論通古第十七）

太極圖說遺議本註に曰く、唐清涼國師普賢行願品疏有云、靈鑒虛極、保合太和。而唐僧圭峯註云、虛極者無極、謂虛無太極之道也と。圭峯註は隨疏鈔を指せるものなるが、原文無極の字なし。曰く、靈鑒虛極者、謂英靈鑒達虛無太極之道也。

又曰く、關中王弘撰云、無極之眞、出唐僧華嚴經法界觀と。按ずるに、華嚴法界觀門は、唐釋杜順の撰するところ、釋宗密の註あり。無極之眞の語、此より出づと謂へるは誤れり。法界觀門實に此語なし。

太極

是故易有大極。（周易繫辭上第十一章）

天地未分之前、謂之一氣。于中有太易太初太始太素太極、而爲五運。（易緯鉤命訣）

太極動而生陽。動極而靜。靜而生陰。靜極復動。一動一靜、互爲其根、分陰分陽、兩儀立焉。

陽極變爲陰、陰極變爲陽。（周易繫辭上第一章孔穎達正義）

動必因靜也、靜而得動、亦動靜相須也。（周易繫辭下第三章孔氏正義）

是故易有太極、是生兩儀。（同繫辭上第十一章）

故易六畫而成卦。分陰分陽、迭用柔剛、故易六位而成章。（同說卦）

孔子曰、易始於太極。氣象未分之時、天地之所始也。太極分而爲二。七九八六。故生天地。輕清者、上爲天。重濁者、下爲地。天地有春秋冬夏之節、故生四時。四時各有陰陽剛柔之分、故生八卦。（易緯乾鑿度上）

元牝之門、是謂天地根。（老子谷神不死章）

夫物芸芸、各歸其根。（同致虛極章）

自本自根、未有天地、自古以固存。（莊子大宗師篇）

從五大根生十一根。（釋澄觀華嚴經疏）

毛奇齡は、其太極圖說遺議に於て、朱子の按張忠定嘗從希夷學、而其論公事之有陰陽、頗與圖說意合。竊疑是說之傳、固有端緒。（朱子文集卷七十六再定太極通書後序本注）及朱子の門人度正の觀摶與張忠定語、及公事先後有太極動靜分陰陽之意、（濂溪先生年譜）を引きて、圖說の太極動而生陽より以下、靜極復動に至るまでを、陳摶の語となせり。

按ずるに、邵子皇極經世書觀物內篇之一に、天生于動者也、地生于靜者也、一動一靜交、而天地之道盡之矣、動之始則陽生焉、動之極則陰生焉、一陰一陽交、而天地之道盡之矣、動之始則陽生焉、動之極則陰生焉、一陰一陽交、而天之用盡之矣とあるは、此の一段の意と相合せり。邵氏の先天圖、希夷より傳はれりと云へば、毛氏の說必しも武斷に非るべし。

陽變陰合、而生水火木金土。五氣順布、四時行焉。五行一陰陽也、陰陽一太極也、太極本無極也。

天地之氣、合而爲一、分爲陰陽、判爲四時、列爲五行。（春秋繁露五行相生第五十九）

數者五行佐天地、生物成物之次也。易曰、天一、地二、天三、地四、天五、地六、天七、地八、天九、地十。而五行自水始。火次之、木次之、金次之、土爲後。木生數三、成數八。（禮記月令孟春之月其數八鄭玄注）

天一、生水於北。地二、生火於南。天三、生木於東。地四、生金於西。天五、生土於中。以益五行。生之本。（同上孔氏正義）

天一、生水於北。地二、生火於南。天三、生木於東。地四、生金於西。天五、生土於中。陽無耦、陰無配、未得相成。地六、成水於北、與天一幷。天七、成火於南、與地二幷。地八、成木於東、與天三幷。天九、成金於西、與地四幷。地十、成土於中、與天五幷也。（同上正義引鄭注易繫辭）

鄭玄云、數若止五、則陽無匹偶、陰無配義、故合之而成數也。奇者、陽唱於始、爲制爲度。偶者、陰之本得陽乃成。故天以一始、生水於北方。地以其六而成之、使其流潤也。地以二生火於南方、天以七而成之、使其光曜也。天以三生木於東方、地以其八而成之、使其舒長盛大也。地以四生金於西方、天以九而成之、使其剛利有文章。天以五合氣於中央生土、地以十而成之、以備天地之間所有之物也。合之則地之六爲天一之匹也。天七爲地二偶也。地八爲天三匹也。天九爲地四偶也。地十爲天五匹也。陰陽各有合、然後氣性相得施化行也。故四時之運、成於五行。土總四行、居時之季以成之也。（陰蕭吉五行大義第二論五行及生成數）

五行之生也、各一其性、無極之眞、二五之精、妙合而凝。

一五行。一曰、水。二曰、火。三曰、木。四曰、金。五曰、土。水曰潤下。火曰炎上。木曰曲直。金曰從革。土爰稼穡。（尙書洪範）

王肅曰、水之性、潤萬物而退下。火之性、炎盛而升上。是潤下炎上、言其自然之本性。木可以揉曲直、金

可以改更、此亦言其性也。潤下炎上、曲直從革、即是水火木金、體有本性。其稼穡以人事爲名、非是土之本性、生物是土之本性。（同上正義）

道之爲物、惟恍惟惚、惚兮恍兮、其中有象。恍兮惚兮、其中有物。窈兮冥兮、其中有精。其精甚眞、其中有信（老子孔德之容章）

所宗不同、彼指乾元、此明眞界。（唐釋宗密華嚴經行願品疏鈔卷一）

眞界者、即眞如法界。法界類雖多種、統而示之但唯一眞法界、即諸佛衆生本源清淨心也。（同上）

即彼始自太易、五重轉乃至太極、太極生兩儀。彼說自然大道。如此說眞性、其實但是一念能變見分。彼云元氣、如此一念初動、其實但是境界之相。（唐釋宗密原人論會通本末第四本注）

乾道成男、坤道成女。二氣交感、化生萬物。萬物生、而變化無窮焉。

乾道成男、坤道成女。（周易繫辭上第一章）

天地絪縕、萬物化醇、男女構精、萬物化生。（同繫辭下第四章）

男女陰陽相感、任其自然得一之性。故合其精、則萬物化生也。（同上正義）

夫易者、變化之總名、改換之殊稱。自天地開闢、陰陽運行、寒暑迭來、日月更出、孕萌庶類、亭毒群品、新新不停、生生相續、莫非資變化之力、換代之功。（同孔氏八論第一論易之三名）

云易者、謂生生之德、有易簡之義。不易者、言天地定位、不可相易。變易者、謂生生之道、變而相續。（同上）

惟人也、得其秀而最靈、形既生矣、神發知矣。五性感動、而善惡分、萬事出矣。聖人定之、以中正仁義、而主靜、立人極焉。

孔子曰、八卦之序成立、則五氣變形。故人生而應八卦之體。得五氣以爲五常、仁義禮智信也。（易緯乾鑿度上）

故人者、其天地之德、陰陽之交、鬼神之會、五行之秀氣也。（禮記禮運）

天以覆爲德、地以載爲德、人感覆載而生、是天地之德也。陰陽則天地也。據其氣、謂之陰陽。據其形、謂之天地。獨陽不生、獨陰不成、二氣相交乃生、故云陰陽之交也。鬼謂形體、神謂精靈。祭義云、氣也者神之盛也。魄也者鬼之盛也。必形體精靈相會、然後物生、故云鬼神之會。人感五行秀異之氣、故有仁義禮知信、是五行之秀氣也。（同上正義）

人生而靜、天之性也。感於物而動、性之欲也。物至知知、然後好惡形焉。好惡無節於內、知誘於外、不能反躬、天理滅矣。（禮記樂記）

言垂天眞、以性情者。禮記云、人生而靜、天之性也。感物而動、性之欲也。欲即情欲。若以情情於性、性則妄動爲情。若以性性於情、情則眞靜爲性。今垂無爲之化、令息妄動之欲、情合於天眞之靜性也。（唐釋宗密華嚴經行願品疏鈔卷一）

中正無邪、禮之質也。（禮記樂記）

齊莊中正、足以有敬也。（同中庸）

文明以健、中正而應、君子正也。（周易同人彖傳）

重明以麗乎正、乃化成天下。柔麗乎中正、故亨。（同離彖傳）

受茲介福、以中正也。（同晉六二象傳）

利有攸往、中正有慶。（同益彖傳）

剛遇中正、天下大行也。（同姤彖傳）

寒泉之食、中正也。（同井九五象傳）

剛巽乎中正而志行。（同巽彖傳）

九五之吉、位正中也。（同九五象傳）

說以行險、當位以節、中正以通。（同節彖傳）

故聖人與天地合其德、日月合其明、四時合其序、鬼神合其吉凶。君子修之、吉。小人悖之、凶。故曰、立天之道、曰陰與陽。立地之道、曰柔與剛。立人之道、曰仁與義。又曰、原始返終、故知生死之說。大哉易也、斯其至矣。

夫大人者、與天地合其德、與日月合其明、與四時合其序、與鬼神合其吉凶。（周易乾文言）

昔者聖人之作易也、將以順性命之理。是以立天之道、曰陰與陽。立地之道、曰柔與剛。立人之道、曰仁與義。（同說卦）

易與天地準、故能彌綸天地之道。仰以觀於天文、俯以察於地理、是故知幽明之故。原始反終、故知死生

之說。（同繫辭上第三章）

疏宗趣中、已明言天道者、易繫辭云、易之爲書也、廣大悉備。有天道焉、有人道焉、有地道焉。說卦云、昔者聖人之作易也、將以順性命之理。是以立天之道、曰陰與陽。立地之道、曰柔與剛。立人之道、曰仁與義。兼三才而兩之。故易六畫而成卦。又云、在天成象、在地成形、變化見矣。注曰、象況日月星辰。形況山川草木。又易云、易與天地準、故能彌綸天地之道。仰以觀於天文、俯以察於地理、是故知幽明之故。原始反終、故知死生之說。注云、幽明者、有形無形之象。死生者、始終之數也。疏云、天有懸象、而成天文也。地有山川原隰、各有條理、故云地理。此上皆是已分之相、因釋天道、故便舉之。此對正在未分之前耳。（唐釋澄觀大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔卷第十六）

周子の太極圖說は、列子の宇宙論に原ける易緯鉤命訣の宇宙論と、周易の易有太極、是生兩儀とを結合して、太極を以て天地萬物の本源とし、更に一歩を進めて、太極の本源を老子の無極の語を假り來りて之に歸せしなり。此れ從來見はれたる宇宙論に於て、列子の太易に相當するものたり。然れども周子は單に之を虛無なるものと認めずして、絕對無限なる實體と認めしなり。太極より兩儀を生ずるの過程は、周易正義の陰陽極變、動靜相須の說に原きて、陰陽動靜を以て說明し、朱子其再定太極通書後序本注に、按、張忠定公嘗從希夷學、而其論公事之有陰陽、頗與圖說意合、竊疑是說之傳、固有端緒云云と曰へば、太極動靜分陰陽の說は、已に陳摶に始まりしやも知るべからず。已に兩儀立ちて五行を生じ、四時行はるゝに至るの過程は、漢儒五行生成の說に原きて之を說き、五行一其性の思想は、已に洪範に見ふれば、此より得來りしものなるべし。之を五常

に配當するは、漢儒の五行說に原くものなり。無極の眞、二五の精、妙合して凝るの思想は、周子の獨創的思想とも謂ふべく、而して後來理氣二元論の萠芽は、已に此に成れりと謂ふべし。無極の眞の概念は、佛敎の眞如眞心眞界等より得來れるものなるべし。乾坤二道男女を成し、二氣交感して萬物を化生し變化窮なきは、周易繫辭及孔氏正義より、人也得其秀而最靈は、禮記禮運及孔氏正義より、神發知矣、五性感動、而善惡分、萬事出矣、禮運正義及樂記より得來れるものなり。聖人之を定むるに中正仁義を以てするは、周易說卦の人道仁義に、易の卦德たる中正を加へたるものにして、其中正を仁義の上に置きしは、蓋人間の行爲は性の感動に出づるものなれば、其發するや尤も中正を貴ぶと云へる點よりなるべし。主靜立人極は、樂記と釋宗密の華嚴經行願品疏鈔とより得來れるものにして、其意以爲へらく、物に感じて動くは、性の欲即ち情欲なり。情欲の妄動を息めて、天眞の靜性に合するは、是れ人極に合する所以の道なりと。周子の主靜無欲の說は、蓋此に原づく。故聖人與天地合其德以下は、周易乾文言繫辭說卦を引きて、易の德を歎美せるものなるが、華嚴隨疏演義鈔に易を引きて論せるところと、其引採するところ全く合致せるより觀れば、蓋周子の本くところ、是の演義鈔なるべし。之を要するに、周子の太極圖說は、周易禮記華嚴經隨疏演義鈔の文に本き、易緯鄭注孔疏等の說を博採し、儒道釋の思想を混融して成れるものなり。

第五章　餘　論

太極圖說は、宇宙發展の過程を說ける點より觀れば、宇宙論といふべく、萬物の本體を說ける點より觀れば、本體論といふべし。周子の本體論を考ふるに先だちて、圖說本文の異同を稽査せざるべからず。圖說の首句、朱子の傳ふるところは無極而太極と曰ふ。然るに朱子が當時國史編輯に與りたる洪邁より借り得たる所修國史周惇頤傳中に載するところは、自無極而爲太極と曰へりと云ふ。按ずるに、周易の太極は易緯並に漢儒の解釋するところに據れば、皆一元氣とせり。此れ太極の古義にして、周子の太極觀亦當さに然るべし。朱子は無極而太極と解し、無極は太極を形容するの語と見做せるも、若し果して然りとせば、下の無極之眞の語解すべからず、宜く太極之眞と曰ふべきなり。何となれば眞の體たるものは、無極に非ずして太極なればなり。且つ太極本無極と曰へば、太極の本源は無極なりと考へしこと明かなり。是に由りて之を觀れば、太極即無極は朱子の解釋にして、此れ朱子が周子の太極と程子の理とを合一せんがために、太極を以て具象的氣と解せずして、抽象的理と解せしに由るなるべし。故に余は自無極而爲太極を周子の本意を得るものとして之を採るものなり。周子は一元氣なる太極より更に一歩を進めて、太極の本源を無極に歸せり。無極の語之を老子に原く。而して周子の無極は、老子の所謂道なり。老子の有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名、字之曰道と曰へるもの、即ち是なり。されば周子の本體論は、老子の本體論に原くものと謂ふべきなり。萬象は此の無極なる本體より發展すとなすものにして、周子の本體論は具體一元論なり。然れども周子の一元論は、其の無極之眞、二五之精、妙合

而凝の說に至りて、理氣物心の二元を對立せしむる二元論的思想を含めり。此れ後來朱子をして一元論と二元論との間に彷徨せしむる所以なり。其道德論は先天的道德說にして、道德の本源を性に置けり。其人性說は性善說なるも、性を五等に分てるは、未だ氣質の性を言ひ出ださざるも、明かに之を認むるものなり。其の仁義中正を以て道德の極則となすは易に原けるも、其爲學論に於て、修養の方法を說くに主靜無欲无思の思を以てせるは、樂記の性情動靜の說と、釋氏の性眞情妄の說と、老子の虛靜无爲の說とを混融したるものなり。されば周子の說は、儒に醇なるものに非ずと雖も、其の善く儒釋老三家の思想を混融して、一家の哲學を組織し、宋代哲學の先路を開きしは、是れ周子が支那哲學史上重要なる位置を占むる所以なり。

宋代五子の哲學、皆易に根柢を有せざるはなし。周子に易通、易說あり。潘興嗣周濂溪墓誌銘程子に易傳あり。張子に易說あり。邵子に皇極經世書あり。皆易學に於て優に一家を成せり。此れ五經中易が最も多く哲學的思想を含めるを以て、自から此に力を用ふるを致ししものなるべし。されば古來釋老二家と儒家との思想の相接觸する、常に易に於てせるを見る。王弼の老を以て易を釋する、釋家の多く易を引きて其の敎義を說ける、是なり。佛老に出入せし五子が、其學の根柢を易に置く、亦異むに足らざるなり。

周子易說の詳、今得て知るべからずと雖も、通書中に見ふるものを以て之を觀るに、其の易を說く、象數を以てせずして專ら義理を以てす。宋初以來、周子に先つて易を說くに、象數に拘せず、文義を主とするもの、王昭素、胡瑗、石介ありと雖も、周子も亦程氏易學の先驅たるものと謂ふべし。太極圖は道釋の流より

遞傳せしこと明かなれば、當時に在りては恐くは學者の信を得ざりしなるべし、加之周子は四十五歳虔州に通判たりし時、廬山の勝を愛し、書堂を其麓に築きてより、晩年に亘りて佛印常總等と交遊し、白蓮社に追媲して青松社を結びたるが如し。宋曉瑩雲臥紀譚卷上されば程子は少年の時師として道を聞きし周子を稱して、窮禪客と曰へるを見る。程氏遺書卷六程子が周子に對して慊焉たらざるを察すべし。又周子說くところの主靜無欲は其方法靜的に偏し、釋道二家の敎旨とするところなり。之を救はんには動的の一面を以てせざるべからず。而して無極の語道家に原く。釋道二家は儒家の異端として排斥するところなれば、周子の无極幷に太極圖を去てて本體論を立て、主靜無欲の外に動的方法を說かんことを試むるは、自然の勢なり。此れ周子に次いで二程子の崛起せし所以なり。

周子と時を並べて、同く陳希夷の易學を傳へて、一派の自然哲學を開きしものを邵子となす。

第二篇　邵雍の哲學

第一章　自然哲學

邵雍の哲學は、其著皇極經世の一書に具す。而して其學先天圖に原く。其師承の由る所、程明道は、先生

之學、得之李挺之、挺之得之穆伯長、推其源流、遠有端緒（邵康節先生墓誌銘）と曰ひ、朱漢上は、濮上陳摶以先天圖傳种放、放傳穆脩、脩傳李之才、之才傳邵雍（進周易表）と曰へるを觀れば、其學希夷に原けりとの說は、已に遠くより相傳へたるものにして、本くところあるものゝ如し。

先天圖は、易大傳の易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦、八卦定吉凶、吉凶生大業、（繫辭上傳）天地定位、山澤通氣、雷風相薄、水火不相射、八卦相錯、數往者順、知來者逆、是故易逆數也、（說卦傳）八卦成列、象在其中矣、因而重之、爻在其中矣（繫辭下傳）に原けて、其由るところあるを證するものなれども、黃宗羲の易學象數論、黃宗炎の易學辨惑、胡渭の易圖明辨、皆既に其易と相合はざる諸點を擧げて、微細に之を辨證せり。此等易旨と相合せざる點は、今姑く措いて之を問はず。

邵子は先天圖に原きて、一動一靜之間を以て太極に擬し、動靜を以て兩儀に擬し、陰陽剛柔を以て四象に擬し、日月星辰水火土石を以て八卦に擬して、衍易圖、天地四象圖を作り、其加一倍の法を用ひ、四數を範疇とし、天地始終圖を作りて、天地の運化、陰陽の消長を觀、聲音唱和の圖を作りて、萬物の數と變化とを窮め、數を以て道の運理の會、陰陽の度、萬物の紀（邵伯温系述）なりとし、老子に原きて、道を以て天地萬物の本源本體なりとし、理と數とを以て彼の自然哲學を一貫するの原理とせり。

皇極經世の書、圖と說とより成る。說は內篇（道藏本內篇の目なし）十二卷、外篇二卷より成り、圖旨を說くものなり。圖は自家の哲學によりて、象數を以て物理を明かにするものにして、所謂道を明かにするものなり。

邵子以爲へらく、(イ)天地萬物の生成するは道に由る、一陰一陽之を道と曰ふ。(ロ)道は無形にして見るべからず。惟だ由りて以て道を見るべきは、天地人物に在り。天地人物は道の形體なり。

(イ) 一陰一陽之謂道。道無聲無形、不可得而見者也。故假道路之道爲名。人之有行、必由乎道、一陰一陽、天地之道也。物由是而生、由是而成者也。(觀物外篇上)

(ロ) 天由道而生、地由道而成、物由道而形、人由道而行。天地人物則異也、其于由道一也。夫道也者道也。道無形、行之則見于事矣。如道路之道坦然。使千億萬年行之人知其歸者也。(觀物內篇之九)

道一を生ず、一を太極となす、一二を生ず、二を兩儀となす、二四を生ず、四を四象となす、四八を生ず、八を八卦となす、八卦六十四を生ず、六十四具りて而る後天地萬物の道備る。天地萬物一を以て本とせざるなし、一に原いて之を衍して萬となす、天下の數を窮めて復た一に歸す。一とは何ぞや、天地の心なり、造化の源なり、一動一靜の間なり。

太極既分、兩儀立矣。陽下交於陰、陰上交於陽、四象生矣。陽交於陰、陰交於陽、而生天之四象。剛交於柔、柔交於剛、而生地之四象。於是八卦成矣。八卦相錯、然後萬物生焉、是故一分爲二、二分爲四、四分爲八、八分爲十六、十六分爲三十二、三十二分爲六十四、故曰分陰分陽。迭用柔剛、易六位而成章也。十分爲百、百分爲千、千分爲萬、猶根之有幹、幹之有枝、枝之有葉。愈大則愈小、愈細則愈繁、合之斯爲一、衍之斯爲萬。是故乾以分之、坤以翕之、震以長之、巽以消之、長則分、分則消、消則翕也。(觀物外篇上)

物に類あり體あり、類は生の序なり、體は象の交なり。二儀は天地の類を生じ、四象は天地の體を定め、四象は八卦の類を生じ、八卦は日月の體を定め、八卦は萬物の類を生じ、重卦は萬物の體を定む。

陰陽生而分二儀、二儀交而生四象、四象交而成八卦、八卦交而生萬物。故二儀生天地之類、四象定天地之體、四象生八卦之類、八卦定日月之體、八卦生萬物之類、重卦定萬物之體。類者生之序也、體者象之交也。推類者必本乎生、觀體者必由乎象。生則未來而逆推、象則既成而順觀。是故日月一類也、同出而異處也、異處而同象也、推此以往物曷逃哉。（觀物外篇上）

物の大なるもの、天地に若くはなし。天地の道、陰陽剛柔之を盡せり。動の大なるものを太陽と謂ひ、小なるものを少陽と謂ふ。靜の大なるものを太陰と謂ひ、小なるものを少陰と謂ふ。太陽を日となし、太陰を月となし、少陽を星となし、少陰を辰となす。太柔を水となし、太剛を火となし、少柔を土となし、少剛を石となす。日月星辰交りて天の體を盡し、水火土石交りて天地の體を盡すとなす。日月星辰は暑寒晝夜をなし、水火土石は雨風露雷をなす。暑寒晝夜交りて天の變を盡し、水火土石交りて地の化を盡す。暑は物の性を變じ、寒は物の情を變じ、晝は物の形を變じ、夜は物の體を變じ、雨は物の走を化し、風は物の飛を化し、露は物の草を化し、雷は物の木を化す。性情形體交りて動植の感を盡し、走飛草木交りて動植の應を盡すとなす。（觀物內篇之一）人は萬物の靈にして、目能く萬物の色を收め、耳能く萬物の聲を收め、鼻能く萬物の氣を收め、口能く萬物の味を收む。聲色氣味は萬物の體にして、目耳鼻口は萬人の用なり。體用交りて人物の道

備る。人も亦物なり、一一の物を以て兆物の物に當るものは人なり、一一の人を以て兆人の人に當るものは聖なり。故に聖人は能く一心を以て萬心を觀、一身を以て萬身を觀、一物を以て萬物を觀、一世を以て萬世を觀る、天地萬物一本なるを以てなり。（觀物內篇之二）道は天地の本にして、天地は萬物の本たり。天地を以て萬物を觀れば、萬物は物たり。道を以て天地を觀れば、天地も亦萬物たり。道の道は之を天に盡くし、天の道は之を地に盡くし、天地の道は之を物に盡くし、天地萬物の道之を人に盡くす。人能く天地萬物の道の人に盡くす所以を知りて、然る後能く民を盡くす。天の能く物を盡くす、之を昊天と曰ふ。人の能く民を盡くす、之を聖人と曰ふ。昊天の物を盡くすに四府あり、春夏秋冬之なり。陰陽其間に升降す。聖人の民を盡くすに四府あり、易書詩春秋之なり。禮樂其間に汚隆す。春夏秋冬は生長收藏の府なり、易書詩春秋は民を生長收藏するの府なり。昊天時を以て人に授け、聖人經を以て天に法る。（觀物內篇之三）意言象數を修むるものは、皇帝王伯なり。仁義禮智を修むるものは、虞夏商周なり。性情形體を修むるものは、文武周召なり。聖賢才術を修むるものは、秦穆、晉文、齊桓、楚莊なり。皇帝王伯は易の體なり、虞夏商周は書の體なり、文武周召は詩の體なり、秦晉齊楚は春秋の體なり、意言象數は易の用なり、仁義禮智は書の用なり、性情形體は詩の用なり、聖賢才術は春秋の用なり。三皇は道を以て民を化し、五帝は德を以て民に敎へ、三王は功を以て民を勸め、五伯は力を以て民を率う。意は物の性を盡くす、之を道と謂ふ。言は物の情を盡くす、之を德と謂ふ。象は物の形を盡くす、之を功と謂ふ。數は物の體を盡くす、之を力と謂ふ。仁は人の聖を盡く

す、之を化と謂ふ。禮は人の賢を盡くす、之を教と謂ふ。義は人の才を盡くす、之を勸と謂ふ。智は人の術を盡くす、之を率と謂ふ。道德功力は體に存し、化教勸率は用に存す。（觀物內篇之四）善く天下を化するは、道を盡くすに止まる。善く天下を教ふるは、德を盡くすに止まる。善く天下を率うるは、力を盡くすに止まる。道德功力を以て化をなすを皇と謂ひ、教を爲すを帝と謂ひ、勸を爲すを王と謂ひ、率を爲すを伯と謂ふ。化教勸率を以て道を爲すを易と謂ひ、德を爲すを書と謂ひ、功を爲すを詩と謂ひ、力を爲すを春秋と謂ふ。皇帝王伯は聖人の時なり、易書詩春秋は聖人の經なり。古より天下の君たるもの、其命四あり。一曰正命、二曰受命、三曰改命、四曰攝命。正命は因りて因るものなり、受命は因りて革むるものなり、改命は革めて因るものなり、攝命は革めて革むるものなり。革革は一世の事業なり、革因は十世の事業なり、因革は百世の事業なり、因因は千世の事業なり。以て因るべければ因り、以て革むべければ革むるは、萬世の事業なり。一世の事業は五伯の道なり、十世の事業は三王の道なり、百世の事業は五帝の道なり、千世の事業は三皇の道なり、萬世の事業は仲尼の道なり。仲尼の仲尼たる所以を知らんと欲せば、天地を知るの外なし。天地の天地たる所以を知らんと欲せば、動靜を知るの外なし。一動一靜は天地の至妙なるもの、一動一靜の間は、天地人の至妙至妙なるものなり。（觀物內篇之五）三皇の法は殺すなし、五伯の法は生すなし。伯一變せば王に至らん、王一變せば帝に至らん、帝一變せば皇に至らん。三皇の世は春の如く、五帝の世は夏の如く、三王の世は秋の如く、五伯の世は冬の如し。春夏秋冬は昊天の時なり、易書詩春秋は聖人の經なり。天時差はざれば歲功

成り、聖經忒はざれば君德成る。（觀物內篇之九）日を元となす、元は氣の始なり。其數一、月を會となす、會は數の交なり。其數十二、星を運となす、運は時の交なり。其數三百六十、辰を世となす、世は變の終なり。其數四千三百二十、一歲の數を觀るときは、一元の數觀はる。太運を以て一元を觀るときは、一元は一歲の大なる者なり。一元を以て一歲を觀るときは、一歲は一元の小なるものなり。一元は十二會、三百六十運、四千三百二十世、歲月日時各數あり。一歲は十二月、三百六十日、四千三百二十時を統ぶ。刻分毫釐絲忽眇沒亦數あり、皆元に統べて一を宗とす。終始往來して窮まらず。（邵伯温系述）日は天の元を經し、月は天の會を經し、星は天の運を經し、辰は天の世を經す。日月星辰を以て日月星辰を經すれば、元の元より世の世に至る十六變を盡くし、一より一千八百六十六萬二千四百に至るまでの數を窮むべし。元の元は春を以て春の時を行ふなり。世の世は冬を以て冬の時を行ふなり。此れ昊天の時を以て言ふなり。人を以て之を言へば、皇の皇は道を以て道の事を行ふなり、伯の伯は力を以て力の事を行ふなり。三皇は春なり、五帝は夏なり、三王は秋なり、五伯は冬なり。七國は冬の餘列なり、漢は王にして足らず、晉は伯にして餘あり、三國は伯の雄なるものなり、十六國は伯の叢なるものなり、南五代は伯の借乘なり、北五代は伯の傳舍なり。隋は晉の子なり、唐は漢の弟なり、隋季諸郡の伯は江漢の餘波なり、唐季諸鎭の伯は日月の餘光なり、後五代の伯は日未だ出でざるの星なり。（觀物內篇之十）陽の數十、陰の數十二、剛の數十、柔の數十二、太陽少陽太剛少剛の本數凡て四十、太陰少陰太柔少柔の本數凡て四十有八、四倍して一百有六十を得、是を太陽少陽太剛少剛の體數と謂ふ。一百

九十有二を得、是を太陰少陰太柔少柔の體數と謂ふ。陽剛の體數より陰柔の本數を減じ、陰柔の體數より陽剛の本數を減ず、是を太陽少陽太剛少剛太陰少陰太柔少柔の用數と謂ふ。太陽少陽太剛少剛の用數一百十二、太陰少陰太柔少柔の用數一百五十二、陰陽剛柔の用數を以て更唱迭和（相乘）して、各萬有七千二十四を得、是を日月星辰水火土石變化の數といふ。日月星辰の變數、水火土石の化數、是を動植の數といふ。日月星辰水火土石變化の數を以て、再相唱和して二萬八千九百八十一萬六千五百七十六を得、是を動植の通數といふ。（觀物內篇之十一）凡そ天地の間に在る、蠻夷華夏皆人なり、動植飛走皆物なり。人各品あり、物各類あり。品類の間理あり數ありて存す、之を天地に推して後萬物の理得らる、之を陰陽に蹟して萬物の數觀ゆ。天氣下降し地氣上騰して、陽前に唱へ陰後に和す、然る後物生ず。天地至美あり、陰陽至精あり、物の得るもの或は粹或は駁或は淳或は漓、故に萬物の類或は巨或は細或は惡或は良或は正或は邪或は柔或は剛咸な自ら之を取る。聲色形氣に至りては、各其類を以てして得、考へて知るべし、聲音を以て甚となす。聲は陽なり、而して天に生ず。音は陰なり、而して地に出づ。聲音の數を知りて、而して後萬物の數觀ふ。聲音の理を知りて、而る後萬物の理得らる。人の類ある亦物の類あるに由る、人類の數亦物類の數に由る。（邵伯温系述）道は物に形はるゝものなれば、道を知るには物に由らざるべからず。是に於てか觀物の要あり、物を觀る如何にかすべき。曰く

夫所以謂之觀物者、非以目觀之也。非觀之以目、而觀之以心也。非觀之以心、而觀之以理也。（觀物內篇之十二）

天下の物理あらざるなし、性あらざるなし、命あらざるなし。（觀物內篇之十二）命性理を解して曰く、

天使我有是、之謂命。命之在我、之謂性。性之在物、之謂理。（觀物外篇之上）

理は之を窮めて而る後知るべく、性は之を盡くして而る後知るべく、命は至りて而る後知るべし。此三知は天下の眞知なり。（觀物內篇之十二）鑑の能く明照する所以は、其能く萬物の形を隱くさざるに由る。鑑の能く萬物の形を隱くさゞるは、水の能く萬物の形を一にするに若かず。聖人の能く萬物の情を一にするに若かず。水の能く萬物の形を一にするは、聖人の能く萬物の情を一にする所以は、其聖人の能く反觀するを謂ふなり。之を反觀といふは、我を以て物を觀ざるなり。我を以て物を觀ざるは、物を以て物を觀るをいふ。物を以て物を觀るときは、其間に我あることなし。故に天下の目を用ひて己の目となして、其目觀ざるところなく、天下の耳を用ひて己の耳となして、其耳聽かざるところなく、天下の口を用ひて己の口となし、其口言はざるところなく、天下の心を用ひて己の心となし、其心謀らざるところなし。其見至廣、其聞至遠、其論至高、其樂至大なり。（觀物內篇之十二）

圖四部より成る。第一部、以元經會圖、第二部、以會經運圖、第三部、以運經世圖、第四部、聲音唱和圖、之なり。前三圖は、以て天を觀、地を觀、人を觀るの圖にして、以元經會圖は、一元十二會三百六十運四千三百二十世、即天地一始終の數を總ぶるものにして、第六己會第百八十、癸運第二千百五十六世より、第七午會第百九十、癸運第二千二百七十世に至るの間を以て、帝堯より宋仁宗に至るまでに當つ。以會經運圖は、第六

己會の三十運圖にして、世數と歳の甲子とを列し、下帝堯より五代に至るまでの歴年表を記し、以て天下離合治亂の迹を見はし、天時を以て人事を驗するものなり。以運經世圖は、第六己會の第百八十癸運第二千百五十五世より、第七午會の第百八十九壬運第二千二百六十六世に至る、百十二世三千三百六十年間の圖にして、世數と歳の甲子とを列し、下帝堯より五代に至るまで、書傳載するところの興廢治亂得失邪正の迹を紀し、人事を以て天時を驗するものなり。聲音唱和圖皇極經世易知黄氏の舊に從ひ、聲音唱和と曰ふ。蔡元定は其纂圖指要に、四象體用之數圖と曰ふ。今秘府の道藏を檢するに標題なし、は、唐人の韻部と等母とを採りて、聲音の字母二百六十四を定め、聲は平上去入に分ち、音は開發收閉に分ち、圖を爲くる三千八百四十、各十六聲十六音、總て三萬四千四十八音聲、天聲字百六十位、地音字百九十二位、聲の位不用の四十八を去りて、百十二に止る、唐韻の内外八轉を括して、平上去入を分つ所以なり。音の位不用の四十を去りて、百五十二に止る、切字音唇舌牙齒喉を括して、開發收閉を分つ所以なり。聲音字母二百六十四相交りて互に變じ、一萬七千二十四に始まり、二億八千九百八十一萬六千五百七十六に極まる。陰陽剛柔の數を以て、律呂聲音の數を窮め、律呂聲音の數を以て、動植飛走の數を窮む。此れ前三部の天地人を觀るに對して物を觀るものなり。

此れ皇極經世一書の要旨なり。

第二章　道德哲學

第一節　性理論

天に在りては之を命と謂ひ、人に在りては之を性と謂ひ、物に在りては之を理と謂ふ、其實は一なり。

天使我有是、之謂命。命之在我、之謂性。性之在物、之謂理。（觀物外篇上）

天地萬物の本源は太極にして、即ち道なり。

是知道爲天地之本、天地爲萬物之本。（觀物內篇之三）

（イ）道の我に在るもの是れ性にして、道は無形なれども、性は仁義禮智具りて體著はる。（ロ）仁義禮智の體は、感應の妙用となりて外に發す、是れ情なり。（ハ）性何處にか寓する、是れ心なり。心何處にか居る、是れ身なり。

（イ）性者道之形體也。道妙而無形。性則仁義禮智具而體著矣。（性理大全卷二十九性）

（ロ）發于性則見於情、發於情則見于色、以類而應也。（觀物外篇下）

（ハ）性者道之形體、心者性之郛郭、身者心之區宇、物者身之舟車。（朱子語類卷百所引邵子語）

故に道は太極にして、心も亦太極なり。

心爲太極。又曰、道爲太極。（觀物外篇上）

人は(イ)萬物の靈たり。(ロ)萬類を兼ね、(ハ)萬物の性を備ふ。

(イ)人爲萬物之靈。(觀物外篇下)

(ロ)人之貴兼乎萬類。自重而得其貴、所以能用萬類。(觀物外篇下)

(ハ)人之類、備乎萬物之性。(同上)

人の至れるもの、之を聖人とす。

第二節　爲學論

邵子以爲へらく、(イ)君子の學は身を潤すを以て本となす。身を潤すの道如何、天理を得るに在り。(ロ)天理を得るものは、獨身を潤すのみならず、心を潤し性命を潤すに至る。(ハ)萬物理性命あらざるなし、理は窮めて而る後知るべく、性は盡して而る後知るべく、命は至りて而る後知るべし。此三知を天下の眞知と謂ふ。(ニ)理窮めて而る後性を知り、性盡して而る後命を知り、命知りて而る後知至る。

(イ)君子之學、以潤身爲本。其治人應物、皆餘事也。(觀物外篇上)

(ロ)得天理者、不獨潤身、亦能潤心。不獨潤心、至於性命亦潤。(同上)

(ハ)天下之物、莫不有理焉、莫不有性焉、莫不有命焉。所以謂之理者、窮之而後可知也。所以謂之性者、盡

之而後可知也。所以謂之命者、至之而後可知也。此三知者、天下之眞知也。雖聖人無以過之也。（觀物內篇之十二）

（二）理窮而後知性、性盡而後知命、命知而後知至。（同上）

人資性のまゝに之を得るものあり、又學問して之を得るものあり、一は內より出で、一は外より入る、誠より明なるは性なり、明より誠なるは學なり。

資性得之天也、學問得之人也。資性由內出者也、學問由外入者也。自誠明性也、自明誠學也。（觀物外篇下）

先天の學至理の學の至誠を主とすべきを說きて曰く、

先天學主乎誠。至誠可以通神明、不誠則不可以得道。（觀物外篇下）

至理之學、非至誠則不至。（同上）

又爲學の要道として、直道に由り利欲を去るべきを說きて曰く、

爲學養心、患在不由直道去利欲。由直道任至誠、則無所不通。天地之道直而已、當以直求之。若用智數由逕以求之、是屈天理而徇人欲也、不亦難乎。（觀物外篇下）

又事大小となく、分に安んじ人理を盡すべきを說きて曰く、

事無大小、皆有道在其間。能安分則謂之道。不能安分、謂之非道。（觀物外篇下）

事無巨細、皆有天人之理。修身人也、遇不遇天也。得失不動心、所以順天也。行險僥倖、是逆天也、求之者人也、得之與否天也。得失不動心、所以順天也。强取必得、是逆天理也。逆天理者、患禍必至。（同上）

心一にして分れず、公にして明なるの要を説きて曰く、

心一而不分、則能應萬變。此君子所以虛心而不動也。（觀物外篇下）

以物觀物性也、以我觀物情也。性公而明、情偏而暗。（同上）

又以爲へらく、聖人は能く萬物の情を一にす。此れ我を以て物を觀ずして、物を以て物を觀るに由る。物を觀るとは、目を以てせず心を以てせずして、理を以てするなり。（觀物內篇之十二）我を以て物を觀るときは、偏にして暗く、物を以て物を觀るときは、公にして明なればなり。（觀物外篇下）聖人の及び難きは、仁義忠信を失はずして事業を成すに在り。何如にせば可なる、意必固我の四を絶つに在り。（觀物外篇下）意なく必なく固なく我なきは、合して言へば一、分つて言へば二なり、合して言へば二、分つて言へば四なり。意あるに始まり、我あるに成る。意ありて然る後必あり、必は意に生ず。固ありて然る後我あり、我は固に生ず。（同上）又獨を愼むの要と力を心上に用ふべきを説きて曰く、

是知言之于口、不若行之于身。行之于身、人得而見之、盡之于心、神得而知之、人之聰明猶不可欺、況神之聰明乎。是知無愧于口、不若無愧于身。無愧于身、不若無愧于心。無口過易、無身過難。無身過易、無心過難。既無心過、何難之有。吁安得無心過之人、而與之語心哉。是故知聖人所以能立于無過之地者、謂其善事于心者也。（觀物內篇之七）

凡人之善惡、形于言發于行、人始得而知之。但萌諸心發于慮、鬼神已得而知之矣。此君子所以愼獨也。（觀物外篇下）

人之神則天地之神、人之自欺、所以欺天地、可不愼哉。（同上）

以上說くところを約すれば、左圖の如し。

學（潤身・潤心・潤性命）
- 無心過—愼獨
- 知命—盡性—窮理（得天理）—觀物—誠—虛心—絕四—絕意

第三章　餘　論

周子が陳希夷より傳はれる道家の太極圖に原きて宇宙の開發を說き、且つ其本體論を立て具體一元論的哲學を唱へしに對し、邵子は同く陳希夷より傳はれる道家の先天圖を根柢とし、加一倍の原理と四數の範疇とを用ひて、天地の運化陰陽の消長萬物の變化を窮め、萬象を以て道の形體なりとし、物を觀道を明かにするを以て宗旨とし、汎神論的哲學を開けり。其學の淵源するところ、二子俱に陳希夷にありて、道家の易學たる圖學に原けり。又周子は無極を以て本體とし、邵子は道を以て本體とす、其名相異れるも俱に老子の本體論に原けるものなり。而して邵子は象數の一面に、周子は義理の一面に向へるものなり。唯だ夫の邵子の易學は、漢儒の象數に純らなるものと異りて、道理性命の哲學的一面を渾融せり。而して古今の星曆占筮象數百子の學を包羅して、其數學的自然哲學を組織するところに其特徵を有せり。

唯だ夫の邵子の學の根柢たる先天圖は、大傳を以て其證據となすも、他の經文と矛盾撞着するところあり

て、其正解を得たるものに非ることは、易學象數論卷一先天圖一、同二、天根月窟、八卦方位、卦氣二易學辨惑先天諸圖辨易圖明辨卷六、七先天古易上下に辨證せり。

其易學たる、所謂伏犧の易學に非ず、所謂文王の易學にも非ず、所謂周公孔子の易學にも非ず、漢儒の易學にも非ず、畢竟邵子一家の易學たり。唯だ後來朱元晦、蔡季通の發揮信奉するところとなり、朱子易學の骨髓たるを致せり。

第三篇　程顥の哲學

第一章　本體論

周子は、無極を以て天地萬物の本體となせしが、程明道は、無極の語を用ひずして、易大傳中に見ふる理字を取り來りて本體を說けり。明道曰く、聖人用意深處、全在繫辭（程氏遺書第二上）と。明道本體論の本づくところ亦全く繫辭にあり。

神无方而易无體、一陰一陽之謂道。（繫辭上第四章）

天地設位、而易行乎其中矣。（同第五章）

形而上者謂之道、形而下者謂之器。（同第十二章）

此等繫辭に見ふるところの思想は、明道本體論の骨子たるものなり。以爲へらく、(イ)天地間に流行するところのものは道なり。道は形而上なるものなり、而して道は一陰一陽に外ならず。陰陽は形而下なるものなれども、(ロ)其一陰一陽なる所以のもの之を道と曰ふ、すなはち易なり。(ハ)易は運動變化なり。陰陽往來消長して、運動變化の易道天地の間に行はれ、萬物生々化々して窮なし。此の運動變化の中に、秩然として亂れざる恒常不易の理あり。周子は實體の眞實无妄なるところを取りて、无極の眞を說きしが、明道は秩然として亂れざる恒常不變の理法を取りて本體となせり。明道曰く、吾學雖有所受、天理二字却是自家體貼出來（程氏外書卷十二）と。此れ如何に天理が明道學術の骨髓をなせるかを見るに足る。按ずるに理及天理の語、已に舊く經に見ゆ。(ニ)繫辭說卦孟子には、天下之理、性命之理、窮理理義等の語見へ、天理の二字は樂記に見ふ。されど、理及天理を以て宇宙元理として說き出したるは程子に始まる。程子に先つて、邵子已に道を以て天地萬物の本源本體なりとし、道の物に在るを理なりとし、其說程子と略ぼ相同ければ、程子の說邵子に出づるなきを保すべからざるも、程子は邵子の如く理を以て物に限らず、(ホ)天を以て理なりとし、宇宙の元理を理となせり。而して(ヘ)理の外に別に一天を立つるを本を二にすと云ひて、超絕的神を認めず。是の理たるや、アナキサゴラスの「ヌース」の如く物質的のものに非ずして、非物質的のものなり。されども又プラトーンの「イデア」の如く超絕的のものに非ずして、內在的のものなり。寧ろヘーラクライトスの「ロ

ゴス」之に近きか。ヘーラクライトスの生成轉化は、即ち程子の所謂易にして、生成轉化の根本に內在せる「ロゴス」は、程子の所謂理に外ならず。形而上の理と形而下の氣との前後關係、之を明說せずと雖も、理氣の二元を立つるものに非ずして、理氣の分離すべからざるを認むるもの、如し。天地設位、而易行其中より說きて、天地設位以前の事は、思議すべからざるものとして之を說かず、されば理氣を以て本體の兩面とせるものにして、不可知的一元論ともいふべきか。

(イ) 繫辭曰、形而上者謂之道、形而下者謂之器。又曰、立天之道、曰陰與陽。立地之道、曰柔與剛。立人之道、曰仁與義。又曰、一陰一陽之謂道。陰陽亦形而下者也、而曰道者、惟此語截得上下最分明。元來只此是道、要在人默而識之也。(程氏遺書卷十一)

(ロ) 天地只是設位、易行乎其中者神也。(同上)

(ロ) 天地設位、而易行其中。何不言人行其中、蓋人亦物也、若言神行乎其中、則人只於鬼神上求矣。若言理言誠亦可也、而特言易者、欲使人默識而自得之也。(同上)

(ハ) 冬寒夏暑陰陽也。所以運動變化者神也。神無方、故易無體。若如或者別立一天、謂人不可以包、天則有方矣。是二本也。(同上)

(ニ) 易簡而天下之理得矣。天下之理得、而成位乎其中矣。(繫辭上第一章)

(ニ) 窮理盡性、以至於命。(說卦)

(ニ) 聖人之作易也、將以順性命之理。(同上)

(ニ) 理義之悅我心、猶芻豢之悅我口。(孟子告子上)

(ニ) 人化物也者、滅天理而窮人欲也。(禮記樂記)

(ホ) 天者理也。神者妙萬物而爲言者也。(程氏遺書卷十一)

第二章　道德哲學

第一節　人性論

人性の本源を說くや、中庸に據る。曰く、

蓋上天之載、無聲無臭。其體則謂之易、其理則謂之道、其用則謂之神、其命於人、則謂之性。(程氏遺書卷一)

上文中に於ける其は天を指せるにて、天は絕對的實在なり。命は天を猶ほ人格的主宰者なるかの如くに考へて言ひ做せるものなるが、明道は理の外に主宰的天を認めざるものなれば、天命の性とは絕對的實在の人間に顯現せるものといはんがごとし。此の點に關しては汎神論的思想の傾向を見る。されば性は其の本源上より平等的に觀れば理なり。已に人間に賦與せられたる上に就きて差別的に觀れば、即ち理なりといふことあたはず。其說に云く、(イ)性とは何ぞ、生の謂なり。天地生ずるところのもの皆性あり。然れど

も性中分別あり、牛は牛の性あり、馬は馬の性あり、人は人の性あり、人は天地の中を稟けて生る、萬物と自から相異なり。釋家草木國土悉有佛性といひ、人も物も一樣に平等なる佛性を具有するを認むるは非なり。人と物と其性各相異れり。然れども(ロ)生は氣なれば、性即氣、氣即性なり。人生而靜已上は說くべからず、才かに性といへば已に天の性に非ず。氣稟の性自から善惡あり、水の流れて海に至るが如し。竟に濁らざるものあり、遠に至りて方めて濁るものあり、未だ遠からずして漸く濁るものあり、濁ること多きものあり、濁ること少きものあり、是に於てか澄治の功を加ふるの要あり。是れ修爲の工夫を說く所以なり。

(イ) 告子云、生之謂性、則可。凡天地所生之物、須是謂之性。皆謂之性則可、於中却須分別。牛之性、馬之性、是他便只道一般、如釋氏說蠢動含靈皆有佛性。如此則不可天命之謂性、率性之謂道者。天降是於下、萬物流行、各正性命者、是所謂性也。循其性而不失、是所謂道也。此亦通人物而言。循性者、馬則爲馬之性、又不做牛底性、牛則爲牛之性、又不爲馬底性、此所謂率性也。人在天地之間、與萬物同流、天幾時分別出是人是物。修道之謂敎、此則專在人事、以失其本性、故修而求復之、則入於學、若元不失、則何修之有。是由仁義行也、則是性已失、故修之。成性存存道義之門、亦是萬物各有成性存存、亦是生生不已之意、天只是以生爲道。(程氏遺書卷二上)

(ロ) 生之謂性。性即氣、氣即性、生之謂也。人生氣稟、理有善惡、然不是性中元有此兩物相對而生也。有自幼而善、有自幼而惡、是氣稟自然也。善固性也、然惡亦不可不謂之性也。蓋生之謂性、人生而靜以

上不容說、才說性、便已不是性也。凡人說性、只是說繼之者善也。孟子言人性善、是也。夫所謂繼之者善也、猶水流而就下也。皆水也、有流而至海、終無所汚、此何煩人力之爲也。有流而未遠、固已漸濁、有出而甚遠、方有所濁、有濁之多者、有濁之少者、清濁雖不同、然不可以濁者不爲水也。如此則人不可以不加澄治之功。故用力敏勇則疾清、用力緩怠則遲清。其清也則卻只是元初水也。亦不是將清來換卻濁、亦不是取出濁來置在一隅也。水之清則性善之謂也。故不是善與惡、在性中爲兩物相對、各自出來此理天命也。順而循之則道也、循此而修之、各得其分則敎也。自天命以至于敎、我無加損焉。此舜有天下而不與焉者也。（程氏遺書卷一）

孟子の性善說は、天性自然の傾向に據りて論を立つるものなれども、人間既に形氣を稟けて斯の世に生ずるときは、氣稟の厚薄清濁相齊しからず、是を以て皆天性自然の傾向に從ふことあたはず、故に自から善惡あり。善なるもの性なるも、惡なるものも亦性といはざるべからず。此れ孟子が專ら天性即ち理に據りて性を說くに對し、明道は氣稟に據りて性を說くものにして、理と氣とを合せて、生之謂性の說を立つるものなり。其の所謂氣稟の語の中には、後來朱子の所謂本然氣質の兩性を具ふるものといふべし。されば曰く、

(イ)天地の大德を生と曰ふ、斯れ所謂仁なり。又曰く、(ロ)人と天地と一物なり。又曰く、(ハ)滿腔子是れ惻隱の心と。此れ人性仁を本具すとなすものにして、氣稟中本然の性を具ふるものなり。

(イ)(ロ)天地之大德曰生。天地絪縕、萬物化醇、生之謂性、萬物之生意最可觀。此元者善之長也、斯所謂仁

也。人與天地一物也、而人特自小之、何哉。（程氏遺書卷十一）

（ハ）滿腔子是惻隱心。（程氏遺書卷三）

既に性中仁を具す、此れ天地の大德、即ち天地の性本然の性にして性の本なり。（イ）學は性の本に復るにあり。

（イ）人在天地之間、與萬物同流。天幾時分別出是人是物。修道之謂教、此則專在人事、以失其本性、故修而求復之、則入於學。（程氏遺書卷二上）

是れ李翺の唱へ出せし復性復初の思想なり。

第二節　爲學論

（イ）學は其有するところを知り、其の有するところを養ふにあり。此れ明道の學を說ける最も簡明直截なる語なり。

（イ）學在知其所有、又養其所有。（程氏外書卷一）

人有するところの最大なるものは、天地の大德即ち仁なり、故に學は仁を識りて之を存養するにあり、此を明道の識仁の說となす。曰く、（イ）學者須らく先づ仁を識るべし、仁は渾然物と體を同うす、義禮智信皆仁なり。仁は全體の如く、義禮智信は四支の如し。若し義禮智信を缺くときは、四支なき體の如く、仁の全體に非ず。渾然萬物と體を同うするの仁を缺くときは、義禮智信なきこと體なき四支の如し。何に依りてか四

支の用をなさんや、仁の理を識り得て、誠敬を以て之を存するのみ、(ロ)天地萬物同一體の意を體し、身に反うして誠あるときは樂む、樂むときは之を存し得るものなり。

(イ)學者須先識仁。仁者渾然與物同體、義禮智信皆仁也。識此理以誠敬存之而已。(識仁篇)

(ロ)此道與物無對、大不足以明之、天地之用、皆我之用。孟子言、萬物皆備于我。須反身而誠、乃爲大樂。若反身而未誠、則猶是二物有對、以己合彼、終未有之、又安得樂。訂頑意思、乃備言此體、以此意存之、更有何事。必有事焉、而勿正、心勿忘、勿助長、未嘗致纖毫之力、此其存之之道、若存得便合有得。(同上)

明道は仁を存するの工夫を以て、誠敬の二字に歸せり。(イ)誠(ロ)敬は易と中庸とより得來れるものなり。

(イ)誠者天之道也、誠之者人之道也。(中庸)

(ロ)君子敬以直內、義以方外。敬義立而德不孤。(易坤文言)

曰く、(イ)學は誠敬にあり。仁自から其中に存す。

(イ)學要在敬也誠也。中間便有箇仁、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣之意。(識仁篇)

誠敬は相離れたるものに非ず、(イ)敬すれば則ち誠なり。

(イ)誠者天之道、敬者人事之本、敬則誠。(程氏遺書卷十一)

(イ)敬すれば百邪に勝ちて(ロ)內自から直し。(ハ)內直しければ亭々當々直上直下の正理自から存して、(ニ)純一にして已まざることを得。純一にして已まざる、此れ誠なり。

(イ) 敬勝百邪。(程氏遺書卷十一)

(ロ) 孟子曰、仁也者人也。合而言之道也。中庸所謂率性之謂道、是也。仁者人此者也。敬以直內、義以方外、仁也。若以敬直內、則便不直矣。行仁義豈有直乎、必有事焉、而勿正則直也。夫能敬以直內、義以方外、則與物同矣。故曰、敬義立而德不孤、是以仁者無對。放之東海而準、放之西海而準、放之南海而準、放之北海而準。醫家言、四體不仁、最能體仁之名也。(同上)

(ハ) 中者天下之大本。天地之間、亭々當々、直上直下之正理出、則不是唯敬而無失最盡。(同上)

(ニ) 天地設位、而易行乎其中、只是敬也。敬則無間斷、體物而不可遺者、誠敬而已矣。不誠則無物也。詩曰、維天之命、於穆不已、於乎不顯文王之德之純、純亦不已。純則無間斷。(同上)

敬の工夫は、克己愼獨にあり。(イ)己に克つときは私心去るべく、獨を愼むときは內直きことを得、純亦不已の天德を具ふることを得。故に克己(ロ)愼獨の要を說けり。

(イ) 克己則私心去、自然能復禮。雖不學文、而禮意已得。(程氏遺書卷二上)

(ロ) 佛言、前後際斷、純亦不已也、彼安知此哉。子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜。自漢以來、儒者皆不識此義、此見聖人之心、純亦不已也。詩曰、維天之命、於穆不已。蓋曰天之所以爲天也。於乎不顯文王之德之純。蓋曰文王之所以爲文也、純亦不已。此乃天德也。有天德、便可語王道。其要只在愼獨。(同卷十四)

忠信亦誠に外ならず、故に忠信の要を說きて曰く、

聖人言忠信者多矣、人道只在忠信。不誠則無物、且出入無時、莫知其鄉者、人心也。若無忠信、豈復有物乎。（程氏遺書卷十一）

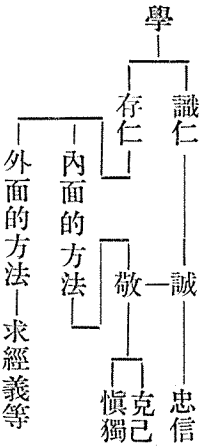
忠信爲基本、所以進德也。辭修誠意立、所以居業也。此乃乾道也。由此二句、可至聖人也。（程氏外書卷二）

知性善、以忠信爲本。此先立其大者。（同卷二）

敬は仁を存養する內面的工夫なり。程子は更に外面的工夫を說きて、(イ)經義を求むる等の事を以て之に當つ。

(イ) 學者識得仁體、實有諸己、只要義理栽培、如求經義、皆栽培之意。（程氏遺書卷二上）

程子の爲學論即ち修爲論を圖示すれば、左の如し、



張橫渠明道に問ふに、性を定めんとして未だ動かざる能はず、猶ほ外物に累はざる、如何かすべきを以てす。明道之に書を與へて答ふ。此れ所謂定性書にして、性を定むるの道を論ぜるものなり。曰く、性を定むる

の要は、廓然として大公、物來りて順應するにあり。自私することなく、智を用ふることなく、內を是とし外を非とすることなく、內外俱に忘れて、澄然として無事なるにあり。無事なれば定まる、定まれば明かに、明かなれば物に應ずるに累はさるゝことなし。明鏡の物の來去するに任せて、來れば照し去れば影を止めざるが如し。

明道識仁の說は、天台の觀行即ち所謂觀智を以て圓理を照すの思想を中心として、易、論語、中庸中の思想を取りて、之を混融せしものなり。程子以前求仁の說あるも識仁の說なし。定性の說は、佛敎の本有覺體淨明鏡の如きの說と、道家の虛靜無爲の說とを混融し、易、孟子の說を以て之を證せしものなり。而して

(イ) 易繫辭及(ロ)周子の思想之が骨子たり。

(イ) 易无思也、无爲也、寂然不動、感而遂通天下之故。非天下之至神、其孰能與於此。(周易繫辭上傳)

(ロ) 動而無靜、靜而無動、物也。動而無動、靜而無靜、神也。(通書動靜第十六)

第三章　定性書考

定性書の思想文字、各淵源するところあり。今之を明かにせんと欲し、定性書考を作る。

所謂定者、動亦定、靜亦定。無將迎、無內外。苟以外物爲外、牽己而從之、是以己性爲有內外也。且以己性爲隨物于外、則當其在外時、何者爲在內。是有意于絕外誘、而不知性之無內外也。旣以內外爲二本、則人烏可

遽語定哉。

至人之用心、若鏡不將不迎、應而不藏。（莊子應帝王）

水靜猶明、而況精神。聖人心靜乎、天地之鑑也、萬物之鏡也。夫虛靜恬淡、寂漠无爲者、天地之平而道德之至、故帝王聖人休焉。（莊子天道）

顏淵問乎仲尼曰、回嘗聞諸夫子、曰、无有所將、无有所迎。（莊子知北遊）

關尹曰、在己无居、形物自著、其動若水、其靜若鏡、其應如響。（莊子天下）

如佛所說、心垢、故衆生垢。心淨、故衆生淨。心亦不在內、不在外、不在中間、如其心然。罪垢亦然、諸法亦然、不出於如。（維摩經弟子品第三）

夫天地之常、以其心普萬物而無心。聖人之常、以其性順萬物而無情。故君子之學、莫若廓然而大公物來而順應。易曰、貞吉悔亡、憧々往來、朋從爾思。苟規々于外誘之除、將見滅于東、而生于西也。非惟日之不足、顧其端無窮不可得而除也。

性者天之命也、聖人得之而不惑者也。情者性之動也、百姓溺之、而不能知其本者也。聖人者豈其無情乎。聖人者寂然不動、不往而到、不言而神、不耀而光、制作參乎天地、變化合乎陰陽、雖有情也、未嘗有情也。然則百姓者、豈其無性者邪。百姓之性與聖人之性、弗差也。雖然情之所昏、交相攻伐、未始有窮。故雖終身、而不自覩其性焉。（李翺復性書上）

善男子一切有爲、皆是無常。虛空無爲、是故爲常。佛性無爲、是故爲常。虛空者即是佛性。佛性者即是如來。如來者即是無爲。無爲者即是常。常者即是法。法者即是僧。僧即無爲。無爲者即是常。（涅槃經聖行品）

人之情、各有所蔽、故不能適道。大率患在于自私而用智。自私則不能以有爲爲應迹。用智則不能以明覺爲自然。今以惡外物之心、而求照無物之地、是反鑑而索照也。易曰、艮其背、不獲其身、行其庭、不見其人。孟氏亦曰、所惡于智者、爲其鑿也。與其非外而是內、不若內外之兩忘也。兩忘則澄然無事矣。無事則定、定則明、明則何應物之爲累哉。

若一往判眞應多用。上地爲眞爲本。下地爲應爲迹。（釋智顗觀音玄義卷上）

汝常不聞如來宣說性覺妙明、本覺明妙。富樓那言、唯。然世尊我常聞佛宣說斯義。佛言、汝稱覺明爲復性、明稱名爲覺。爲覺不明稱爲明覺。（楞嚴經四）

心如淨明鏡、身如明鏡臺。（六祖偈）

定性書一篇の骨子、固より周易、孟子に本くところありと雖も、釋道二家の思想文字が著るしく混融せらるゝことは否むべからざるなり。殊に莊子の至人の心を用ふること鏡の如きの說、維摩經の心內に在らず外に在らず中間に在らざるの說、涅槃經の虛空爲すこと無し、是故に常なり、佛性爲すことなし、常なりの說、六祖の心淨明なる鏡の如きの說の如きは、明かに是篇の骨子を成せるものなり。

第四章　餘　論

樂記の天性情欲の說と、佛敎の性眞情妄の說と相合して、李翺復性の說となり、周子主靜無欲の說となる。李翺、周子俱に寂然として動かず感じて天下の故に通ずるを以て性の妙用とし、至誠を以て其本體とし、誠を以て聖の本となす。而して無思の思を以て、復性入聖の工夫となす。程子は性の妙用即神より去りて、性の大德即仁に着眼し、這の德を體驗識得するを以て聖功の本となせり。而して忠信克己愼獨を以て仁を識りて之を存するの工夫となし、之を誠敬の二字に歸せり。其本體論に於て、周子の無極を棄て、理を說き出し、爲學論に於て主靜無欲を棄て、敬を說き、忠信克己愼獨を說けるは、釋道の嫌を避くるの意を見るべし。然れども周子の所謂無欲及無思の思は、程子の所謂誠敬と何等異るところなきなり。學の目的を聖とし、聖の本を性に歸し、學の工夫最も重を心性上に注ぐは、程子の周子を繼げるところなり。殊に定性の說の如きは、周子主靜の說に其根柢を有するものと謂ふべし。周子は外面的工夫を說かざるに非るも、稍々內面的工夫を偏重するの傾向あり。程子理を以て事物の本體となせるが故に、窮理の一端、重要なる工夫となるは必然の勢なり。明道未だ之を詳說せざるも、經義を求むるを以て仁を栽培する工夫の一端となせるに於て之を察すべし。伊川に至りて窮理の論詳說せらるゝに至れり。要するに程子は周子を祖述することを明言せざるも、其學の骨髓たるところ、周子に本原するもの多しと謂ふべし。

第四篇　程頤の哲學

第一章　本體論

程伊川は、其の易傳に於て、乾萬物之始（乾象傳）と曰ひ、又天爲萬物之祖（乾象程傳）と曰へり。又

夫天專言之則道也、天且弗違是也。分而言之、則以形體謂之天、以主宰謂之帝、以功用謂之鬼神、以妙用謂之神、以性情謂之乾。（乾象傳）

以形體言之、謂之天。以主宰言之、謂之帝。以功用言之、謂之鬼神。以妙用言之、謂之神。以性情言之、謂之乾。（程氏遺書卷二十二上）

と曰へり。其の意天を以て萬物の本源となすものなり。天は則ち道なれば、道を以て萬物の本源となすものなり。故に又

道則自然生萬物。（程氏遺書卷十五）

とも曰へり。道とは何ぞや、道を說きて曰く、

道者一陰一陽也。（程氏易說）

一陰一陽之謂道。道非陰陽也、所以一陰一陽道也。如一闔一闢謂之變。（程氏遺書卷三）

離了陰陽更無道、所以陰陽者是道也。陰陽氣也、氣是形而下者、道是形而上者、形而上者則是密也。（程氏遺書卷十五）

と。されば道は一陰一陽なる所以にして、陰陽即ち氣の消長に外ならず。氣は形而下なるものにして、道は形而上なるものなり。されど陰陽を離れて道なければ、氣と道とは相離れざるものなり。故に形體的の天と非形體的の道とも、亦相離れざるものなり。故に又

道之外無物、物之外無道、是天地之間、無適而非道也。（程氏遺書卷四）

と曰へり。されば物と道、氣と道、天と道、皆一實體の兩面にして、相離れざるものなり。又曰く、

往來屈伸、只是理也。（程氏遺書卷十五）

と、往來屈伸は所以一陰一陽に外ならず。されば又道は即ち理なりと謂ふべし。又理を說きて曰く、

理也性也命也、三者未嘗有異。窮理則盡性、盡性則知天命矣。天命猶天道也。以其用而言則謂之命、命者造化之謂也。（程氏遺書卷二十一下）

性命を說きて曰く、

伯温又問、孟子言心性天、只是一理否。曰、然。自理言之謂之天、自稟受言之謂之性、自存諸人言之謂之心。在天曰命、在人曰性。（同卷二十四）（程氏遺書卷二十二上）

性之本謂之命、性之自然者謂之天、自性之有形者謂之心、自性之有動者謂之情、凡此數者皆一也。（同卷二十五）

と、されば理と曰ひ性と曰ひ情と曰ひ命と曰ひ心と曰ふ、其名相異れども、其實體に至りては一なり。故に又

一人之心、即天地之心、一物之理、即萬物之理。（程氏遺書卷二上）

と曰へり。其の

有理而後有象、有象而後有數。（伊川文集卷五答張閎中書）

有理則有氣、有氣則有數。行鬼神者數也、數氣之用也。（程氏易說）

と曰へるを見れば、理氣の先後を說くに似るも、必しも理が氣に先だつて獨存し、理より發展して氣を生ずることを意味せるものに非ずして、理氣を以て本體の兩面と認むるものなるべし。其形而上的方面より言へば、理は其實體なり。其形而下的方面より言へば、氣は其實體なり。故に程伊川の本體論は、理氣一體兩面論と謂ふべし。

第二章　道德哲學

第一節　性情論

性とは何ぞ、曰く、

天所賦爲命、物所受爲性。（乾彖傳程傳）

天之賦與之謂命、稟之在我之謂性、見於事業之謂理。（程氏遺書卷六）

性之本謂之命、性之自然者謂之天、性之有形者謂之心、性之有動者謂之情。（程氏遺書卷二十五）

天の萬物に賦與せるもの、之を名けて性と曰ふ。故に性は先天的なるものなり。性の本は天なれば、即ち是れ理なり。故に曰く、

性即是理。（程氏遺書卷十八）

と。然れども萬物其氣を稟くるところ相同からず、從つて其氣質の性に至りては相異る、惟だ人は五行の秀を稟け、天地の中を得て生る、故に最も靈なり。（イ）人々亦其氣を稟くること相同からず、從つて其個性相異る、此れ智愚賢不肖の別ある所以なり。是の箇性の差異は才にあり、（ロ）才は氣に稟くるものなり。性は天に出づ、萬人一樣にして皆善なり。（ハ）其の不善なるは才に由る、才の善不善は、氣の偏正に由る。

（イ）氣有善有不善、性則無不善也。人之所以不知善者、氣昏而塞之耳。孟子所以養氣者、養之至斯清明純全、而昏塞之患去矣。或曰養心、或曰養氣、何也。曰、養心則勿害而已、養氣則志有所帥也。（程氏遺書卷二十一下）

（ロ）性無不善、其所以不善者才也。受於天之謂性、稟於氣之謂才。才之善不善、由氣之有偏正也。乃若其情、則無不善。今夫木之曲直其性也。或以爲車、或可以爲輪、其才也。然而才之不善、亦可以變之、在養其氣、以復其善爾。故能持其志養其氣、亦可以爲善。故孟子曰、人皆可以爲堯舜。唯自棄自暴、則不可以爲善。（程氏外書卷七）

（ハ）性出於天、才出於氣。氣清則才清、氣濁則才濁。譬猶木焉、曲直者性也。可以爲棟梁、可以爲榱桷者、

才也。才則有善有不善、性則無不善。（程氏遺書卷十九）

（ハ）問、人性本明、因何有蔽。曰、此須索理會也。孟子所以獨出諸儒者、以能明性也。性無不善、而有不善者才也。性即是理、則自堯舜至於塗人一也。才稟於氣、氣有清濁。稟其清者爲賢、稟其濁者爲愚。（程氏遺書卷十八）

伊川は其の本體論に立脚して、性善の說を立し、性の平等なる所以を證し、氣を以て性の差別ある所以を明かにせり。故に曰く、

論性不論氣不備、論氣不論性不明。（程氏遺書卷六）

と。同く性と曰ふも、二種の別あることを說きて曰く、

生之謂性、與天命之謂性同乎。性字不可一槩論。生之謂性、正訓所稟受也。天命之謂性、此言性之理也。今人言天性柔緩、天性剛急、俗言天成、皆生來如此、此訓所稟受也。若性之理也、則無不善、曰天者自然之理也。（程氏遺書卷二十四）

性相近也、習相遠也、性一也、何以言相近。曰、此只言氣質之性、如俗性急性緩之類。性安有緩急、此言性者生之謂性也。（同卷十八）

性相近也、此言所稟之性、不是言性之本、孟子所言便正言性之本。（同卷十九）

即ち一は天命の性にして理性なり。孟子の性善と曰へるもの是なり。一は氣質の性にして、孔子の性相近と曰へるもの是なり。伊川は斯く氣質の性を說き出して、孔孟の性說を調和したり。情とは何ぞや、曰く、

性之有動者、謂之情。（程氏遺書卷二十五）

（イ）性は水の如く、情は波の如し。猶ほ水なければ波なきがごとく、性なければ情なし。性外物に感じて中より發するもの、此れ情なり。

（イ）問、喜怒出於性否。曰、固是纔有生識、便有性。有性便有情、無性安得情。又問、喜怒出於外如何。曰、非出於外、感於外而發於中也。問性之有喜怒、猶水之有波否。曰、然。湛然平靜如鏡者、水之性也。及遇沙石、或地勢不平、便有湍激。或風行其上、便爲波濤洶湧。此豈水之性也哉。人性中只有四端、又豈有許多不善底事。然無水安得情也。（程氏遺書卷十八）

情は性の動くところ、即ち心の發するところなれば、單に喜怒哀樂の如き狹義なる感情をのみ指すものに非ずして、廣く心の作用を指せるものなり。故に曰く、

問、心有善惡否。曰、在天爲命、在義爲理、在人爲性、主於身爲心、其實一也。心本善、發於思慮、則有善有不善。若既發則可謂之情、不可謂之心。譬如水、只謂之水。至於流而爲派、或行於東、或行於西、却謂之流也。（程氏遺書卷十八）

（イ）性は即ち理にして、喜怒哀樂の未だ發せざる前に當りては、理性なれば不善なし。其の發すること節に中れば、往くとして善ならざるなし。發して節に中らざれば、不善となる。

（イ）性即理也、所謂理性是也。天下之理、原其所自、未有不善。喜怒哀樂未發、何嘗不善。發而中節、則無往

而不善。凡言善惡、皆先善而後惡。言吉凶、皆先吉而後凶。言是非、皆先是而後非。（程氏遺書卷二十二上）

仁義禮智信を以て五性と曰ひ、性中具するところの天理となす。曰く、

天地儲精、得五行之秀者爲人。其本也眞而靜、其未發也五性具焉、曰仁義禮智信。（顏子所好何學論）

仁是性也、孝弟是用也、性中只有仁義禮智四者、幾曾有孝弟來。（程氏遺書卷十八）

四端不言信者、既有誠心爲四端、則信在其中矣。（同卷二十四）

明道は性を說くに、專ら氣稟の上に於てし、生之謂性の說をなせしが、伊川は其の本體論に本きて、性の實體を天理なりとし、孟子の性善說を本體論的に論證し、又氣質の性を說き出して、孔子の性相近の說を說明し、性の兩義を區別して、孔孟性說の矛盾を調和せるは、橫渠の說の明白詳密なるに及ばざるも、已に其意を道破せるものと謂ふべし。伊川は性論に於て、天命之性、氣質之性を說き出して、巧みに孔孟性說の矛盾を調和せしも、其本體論に於ける理氣一體兩面論は、爰に稍々二元論的破綻を見はすに至れり。道心即天理、人心即人欲を說くに至りて、全く二元論に陷れり。曰く、

人心人欲、道心天理。（程氏外書卷二）

人心惟危、人欲也。道心惟微、天理也。（同卷三）

人心私欲、故危殆。道心天理、故精微。滅私欲則天理明矣。（程氏遺書卷二十四）

此れ天理人欲は相兩立せざるものにして、全く其根源を異にせるものと謂はざるべからず。否らずんば相

反する天理人欲が、同一本源より出で來るの說なかるべからず。是の困難は善惡を論ずる上に於ても、亦相一致せざる二重の說となりて現はるゝを見る。即ち其一元的說明は、性情體用の說に立脚し、水波の譬喩を以て兩者の關係を說き、情の發して節に中るを善とし、否るを不善とせり。情の發するは外物に感ずるに在り、感應の實體は性即天理なれども、氣形を通じて行はるゝものなれば、氣の淸濁、形の偏正に由りて發の中不中を來たすものとなしゝもの、如し。其二元的說明は人欲說にして、惡の根源を慾に歸せり。曰く、

人之爲不善、慾誘之也。誘之而弗知、則至於天理滅而不知反。故目則欲色、耳則欲聲、以至鼻則欲香臭、口則欲味、體則欲安、此皆有以使之也。（程氏遺書卷二十五）

是に於て爲學論に於て修爲の工夫として、一は其情を約して中に合はしむることゝなり、一は窒慾となれり。

伊川に至り、仁を說くに公字を以てせり。公字を重く說けるは、已に周子に於て之を見る。明道公溥を以て聖に庶しとなし、（通書聖學第二十）又天地聖人の道を至公而已矣と曰へり。（同公第三十七）然れども公字を以て直ちに仁を說けるは、伊川に始まる。

仁之道、要之只消道一公字。公即是仁之理、不可將公便喚做仁。公而以人體之、故爲仁。只爲公則物我兼照、故仁所以能恕、所以能愛。恕則仁之施、愛則仁之用也。（程氏遺書卷十五）

仁者公也、人此者也。（同卷九）

孔子曰、仁者己欲立而立人、己欲達而達人。能近取譬、可謂仁之方也已。嘗謂孔子之語仁以敎人者、唯此爲盡。要之不出於公也。（同上）

仁者天下之公、善之本也。（易復六二象傳程氏傳）

第二節　爲學論

伊川は顏子所好何學論に於て曰へらく、

顏子獨所好者何學也、學以至聖人之道也。

又曰く、

凡學之道、正其心養其性而已、中正而誠則聖矣。君子之學、必先明諸心知所養、然後力行以求至、所謂自明而誠也。故學必盡其心、盡其心則知其性、知其性反而誠之、聖人也。

と。伊川の爲學論の大體は此に盡くせり。是論は伊川早年の作に係ると雖も、生涯を通じて堅說橫說するところ、之が敷衍詳說に過ぎざるなり。

人皆可以至聖人。而君子之學、必至於聖人而後已。不至於聖人而已者、皆自棄也。孝其所當孝、弟其所爲弟、自是而推之、則亦聖人而已矣。（程氏遺書卷二十五）

二程之學、以聖人爲必可學而至而已。必欲學而至於聖人。（程氏外書卷十二　呂氏發明義理）

學莫大於平心、平莫大於正、正莫大於誠。（程氏遺書　卷二十五）

君子之學、在于意必固我既忘之後、而復于喜怒哀樂未發之前、則學之至也。（同上）

哀樂未發之前、則學之至也。（同上）

此等の言に據れば、伊川の學聖人を標的として此に至るの道なること明かなり。而して誠を以て學の最も大なるものとなし、喜怒哀樂未發の前なる中に復するを以て學の至れるものとなす。此れ李翱及び周子の學統を繼承せるところなり。彼以爲らく、(イ)才は進歩に局限あるも、理は進むべく、學を積むこと久ければ、能く氣質を變化して、聖人たることを得べしと。此れ彼の氣質變化論なり。

(イ)問、人有日誦萬言、或妙絶技藝、此可學否。曰、不可。大凡所受之才、雖加勉强止可少進、而鈍者不可使利也、惟理可進。除是積學既久、能變得氣質、則愚必明、柔必强。（程氏遺書　卷十八）

彼は其本体論並に性情論に立脚して、爲學論を立つ。以爲らく、人々本と五性を具す。其實體は天理なり。形既に生じ外物其形に觸れて中を動かす、其中動いて七情出づ、情既に熾にして益々其性を蕩して鑿す、故に其情を約して中に合はしめ、其心を正うし其性を養ふ、此れ爲學の方なり。

中とは何ぞ、(イ)易に所謂寂然不動なるもの是なり。性の實體即天理に外ならず。(ロ)惟だ其過不及なき形象を取りて中と曰ふのみ。

(イ) 喜怒哀樂之未發、謂之中。中也者言寂然不動者也。故曰、天下之大本。發而皆中節、謂之和。和也者言感而遂通者也。故曰天下之達道。(程氏遺書卷二十五)

(ロ) 聖人與理爲一、故無過不及、中而已矣。其他皆以心處這箇道理、故賢者常失之過、不肖者常失之不及。(同卷二十三)

喜怒哀樂未發の時に於て中を得、發して節に中るの和を得んには如何にかすべき、平日涵養するにあり。

門人蘇季明名昞との問答に於て、中と存養の方とを詳說せり。

季明曰、中莫無形體、只是箇言道之題目否。曰、非也。中有甚形體、然既謂之中也、須有個形象。曰、當中之時、耳無聞、目無見否。曰、雖耳無聞、目無見、然見聞之理在始得。曰、中是有時而中否。曰、何時而不中、以事言之、則有時而中、以道言之、何時而不中。曰、固是所爲皆中、然而觀於四者未發之時靜時、自有一般氣象、及至接事時、又自別何也。曰、善觀者不如此、都於喜怒哀樂已發之際觀之。(程氏遺書卷十八)

蘇季明問、中之道、與喜怒哀樂未發謂之中同否。曰、非也。喜怒哀樂未發、是言在中之義。只一箇中字、但用不同。或曰、喜怒哀樂未發之前、求中可否。曰、不可。既思于喜怒哀樂未發之前求之、又卻是思也。既思即是已發、纔發便謂之和、不可謂之中也。又問、呂學士言、當求于喜怒哀樂未發之前、信斯言也、恐無著換、如之何而可。曰、看此語如何地下、若言存養於喜怒哀樂未發之時則可、若言求中於喜怒哀樂未發之前、則不可。又問、學者於喜怒哀樂發時、固當勉强裁抑於未發之前、當如何用功。曰、于喜怒哀樂未發之時、更怎生求、只平日涵養、便是涵養久、則喜怒哀樂發自中節。或曰、有未發之中、有既發之中。曰、非也。既發

時便是和矣。發而中節、固是得中。只爲將中和來分說、便是和也。（同上）

涵養如何にかすべき、伯子が仁を存するの工夫を說くに敬を以てせしと同く、叔子も亦敬を以て涵養の工夫となせり。二程爲學の工夫、俱に敬を以て第一義となせるを見るべし。曰く、

敬而無失、便是喜怒哀樂未發之謂中也。敬不可謂之中、但敬而無失、即所以中也。（程氏遺書卷二上）

中は畢竟心體に外ならず、惟だ其過不及なきの形象を形容するに過ぎざるものなれば、敬は亦心を操る所以の道に外ならず、故に敬の工夫を說きて主一無適と曰へり。

或曰、先生于喜怒哀樂未發之前、下動字下靜字。曰、謂之靜則可、然靜中須有物、始得這裏便是難處、學者莫若且先理會得敬、敬自知此矣。或曰敬何以用功。曰、莫若主一。（程氏遺書卷二十一）

主一者、謂之敬。一者謂之誠、主則有意在。（同卷二十四）

有言未感時知如何所寓。曰、操則存、舍則亡、出入無時、莫知其鄉、更怎生尋所寓、只是有操而已。操之之道、敬以直內也。（二程遺書卷十五）

心の體は天理にして靈智を本具す、猶ほ明鏡の萬物來るに隨ふて畢く照すが如く、事物と交るに隨ふて感ぜざるなし。感ずるときは思慮せざるなし、思慮の紛擾を免れんと欲せば、心に主あるに如くはなし。心に主あるの道は、敬を主とするにあり。敬を主とするときは、心虛にして思慮紛擾の患なし。主敬の工夫を累ねて涵養すること、之を久うすれば、自然に天理明かなり。

大凡人心不可二用。用于一事、則他事便不能入者、事爲之主也。事爲之主、尙無思慮紛擾之患。若主于敬又焉有此患乎、所謂敬者主一之謂敬、所謂一者無適之謂一。且欲涵泳主一之義、一則無二三矣。言敬無如聖人之言、易所謂敬以直內、義以方外。須是直內、乃是主一之義。至于不敢欺不敢慢、尙不愧于屋漏、是皆敬之事也。但存此涵養久之、自然天理明。（程氏遺書卷十五）

聖人之心、如鏡如止水。（同卷十八）

敬則自虛靜、不可把虛靜喚做敬。（同卷十五）

敬以直內、有主於內則虛、自然無非僻之心、如是則安得不虛。必有事焉、須把敬來做件事、著此道最是簡最是易、又省工夫。爲此語雖近似常人所論、然持之必別。（同上）

主一無適の工夫、嚴威儼恪より入るべきを言ひて曰く、

嚴威儼恪、非敬之道、但致敬須自此入。（程氏遺書卷十五）

閑邪則固一矣。然主一則不消言閑邪有以一爲難見、不可下工夫如何。一者無他、只是整齊嚴肅則心便一、一則自是無非僻之好此意、但涵養久則天理自然明。（同上）

主敬の工夫、無意に偏すべからず、又有意に偏すべからず、非無意非有意なるべきを云へり。以爲らく、(イ)無意に偏するときは忘れて全く無事なるに至る、有意に偏するときは孟子の所謂正心助長に至る。されば忘るゝことなく心に正てゝすることなく、又助け長ずることなきを要す。此れ伯子が亦識仁篇中工夫として

說けるところなり。且つ周子の靜を去て、敬を提唱する所以を說きて、纔に靜を說けば便ち釋氏の說に入るとなせり。

(イ)問、敬還用意否。曰、其始安不用意、若能不用意、却是都無事了。又問、敬莫是靜否。曰、纔說靜便入於釋氏之說也。不用靜字、只用敬字、纔說著靜字、便是忘也。孟子曰、必有事焉、而勿正、心勿忘、勿助長也。必有事焉便是心、勿忘勿正便是勿助長。(程氏遺書卷十八)

(イ)人々人心あり道心あり。(ロ)人心は人欲なり、道心は天理なり。されば人欲に克ちて天理に復せざるべからず、此れ孔子の所謂克己復禮なり。而して其工夫は四勿なり、易に所謂窒慾なり、遷善改過なり、(ハ)窒慾の工夫を思に歸せり。

(イ)人心惟危、道心惟微、心道之所在、微道之體也。心與道渾然一也。對放其良心者言之、則謂之道心、放其良心則危矣、惟精惟一、所以行道也。(程氏遺書卷二十一)

(ロ)人心人欲、道心天理。(程氏外書卷二)

(ロ)人心私欲故危殆、道心天理故精微、滅私欲則天理明矣。(程氏遺書卷二十四)

(ハ)人之爲不善、慾誘之也。誘之而弗知、則至於天理滅而不知反。故目則欲色、耳則欲聲、以至鼻則欲香臭、口則欲味、體則欲安、此皆有以使之也。然則何以窒其慾。曰、思而已矣。學莫貴於思、唯思爲能窒慾。曾子之三省、窒慾之道也。(程氏遺書卷二十五)

又曰く、

學問之道无他也、唯其知不善、則速改以從善而已。（易復初九象傳程氏傳）

損之義、損人欲以復天理而已。（易損彖程氏傳）

復者復於禮也、復禮則爲仁。（易復六二象程氏傳）

復者反於道也、既復於道、則合正理而无妄。（易无妄卦下程氏傳）

養心莫善於寡欲。不欲則不惑、所欲不必沈溺、只有所向便是欲。（程氏遺書卷十五）

程子以爲へらく、人々形氣即ち肉體を有するが故に、之に屬する意欲即ち人心あり、同時に先天的に本具する良心即ち道心あり、此れ理性なり。理性が意欲を支配するときは、人心即ち道心なり。理性の力弱くして意欲の向ふところに任すときは、孟子の所謂放心の狀態に在るものなり。人欲と云ひ、意欲といひ、私欲と云ひ、己私と云ひ、人心と云ふ、皆同一なり。天理と云ひ、道と云ひ、正理と云ひ、禮と云ふ、亦皆同一なり。是に於てか克己復禮の功夫を要す。其條目四あり、曰く、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動、（論語顏淵第十二）是れなり。此れ孔子の顏子に語ぐるところ、顏子の事とするところにして、亦伊川の修爲の目とするところなり。故に四箴（伊川文集卷四）を作りて自ら警む。此れ之を外に制して內を直くするの工夫にして、主敬の工夫と同く內を直くするに歸す。養氣養志の工夫も亦內を直うするに歸することを說いて曰く、

率氣者在志、養志者在直內。（程氏遺書卷十五）

持其志無暴其氣、內外交相養也。（同卷十八）

志順者氣不逆、氣順志將自正、志順而氣正、浩然之氣也。然則養浩然之氣也、乃在於持其志無暴其氣耳。（同卷二十五）

主一無適、敬以直內、便有浩然之氣。浩然須要實識得他剛大直不習無不利。（同卷十五）

然れども浩然の氣を養ひ得んには、義以方外の工夫、即ち集義の工夫なかるべからざるを說けり。曰く、

問、人敬以直內、氣便能充塞天地否。曰、氣須是養集義所生。積集既久、方能生浩然氣象。人但看所養如何、養得一分便有一分、養得二分便有二分、只將敬安能便到充塞天地處。且氣自是氣、體所充自是一件事、敬自是敬、怎生便合得、如曰其爲氣、配義與道。若說氣與義時自別、怎生便能使氣與義合。（程氏遺書卷十八）

（イ）敬以て內を直うし、（ロ）義以て外を方にして邪を閑ぐときは、誠自ら存す。（ハ）誠は無妄なり。

（イ）閑邪則誠自存。不是外面捉一箇誠將來存養、今人外面役役于不善、于不善中尋箇善來存著、如此則豈有入善之理、只是閑邪則誠自存。故孟子言性善、皆由內出、只爲誠便存。閑邪更著甚工夫、但唯動容貌整思慮、則自然生敬。敬只是主一也。主一則既不之東、又不之西。如是則只是中、既不之此、又不之彼。如是則只是內存此、則自然天理明白、學者須是將敬以直內、涵養此意、直內是本。（程氏遺書卷十五）

（ロ）能盡飲食言語之道、則可以盡去就之道。能盡去就之道、則可以盡死生之道。飲食言語去就死生小大之勢一也。故君子之學、自微而顯、自小而章。易曰、閑邪存其誠。閑邪則誠自存、而閑其邪者、乃在於言語飲食進退、與人交接之際而已矣。（同卷二十五）

（ハ）眞近誠、誠者無妄之謂。（同卷二十一下）

誠の物に於ける、往くとして其志を得ざるなく、其效至大なるを說いて曰く、

誠之於物、无不能動。以之修身則身正、以之治事則事得其理、以之臨人則人感而化、无所往而不得其志也。（易无妄初九象傳程氏傳）

无を妄說いて曰く、

无妄者至誠也、至誠者天之道也、天之化育萬物、生生不窮、各正其性命、乃无妄也。人能合无妄之道、則所謂與天地合其德也。无妄有大亨之理、君子行无妄之道、則可以致大亨矣。无妄天之道也、卦言人由无妄之道利貞、法无妄之道利在貞正、失貞正則妄也、雖無邪心、苟不合正理則妄也、乃邪心也。（易无妄彖傳程氏傳）

无妄は至誠にして天の道なり。天の萬物を化育して生々窮まらず、各其性命を正さしむるは无妄なり。人能く是の造化の大作用の眞實にして、寸毫の僞妄なき天の道に合へば、天地と其德を合するものなり。（イ）凡そ天理の必然なるものは妄に非るなり、妄は人の意欲に由りて生ず。されば、（ロ）天理に從うて動くときは无妄なり、人欲に從うて動くときは妄なり。

（イ）凡理之所然者非妄也、人所欲爲者乃妄也。（易无妄六二象程氏傳）

（ロ）動以天爲無妄、以人欲則妄矣。（易无妄卦下程氏傳）

（ロ）易无妄曰、天下雷行物與無妄、動以天理故也。（程氏遺書卷二十四）

敬義は爲學の二大綱なり。伊川は之が別を說きて曰く、

問、敬義何別。曰、敬只是持己之道義、便知有是有非、順理而行、是爲義也。若只守一箇敬、不知集義、卻是都無事也。且如欲爲孝不成、只守著一箇孝字、須是知所以爲孝之道、所以侍奉當如何、温凊當如何、然後能盡孝道也。又問、義只在事上如何。曰、內外一理、豈特事上求合義也。（程氏遺書卷十八）

敬は內面的工夫に屬し、義は外面的工夫に屬すと雖も、外的行爲の規矩準繩たる義は、內的心性に根するものなれば、內外一理なるなり。集義の工夫に先だちて、義を知るの要あり。是に於てか涵養と相並べて致知の要を說けり。

涵養須用敬、進學則在致知。（程氏遺書卷十八）

須是識在所行之先、譬如行路須得光照。（同卷三）

然らば致知の方法如何、伊川は大學の致知在格物に原きて、之を格物に歸せり。而して格字の義を解して窮至となせり。

致知在格物、格物之理、不若察之於身、其得尤切。（程氏遺書卷十七）

致知在格物、格至也、物事也、事皆有理、至其理乃格物也。然致知在所養、養知莫過於寡欲二字。（程氏外書卷二）

致知在格物、格至也、窮理而至於物、則物理盡。（程氏遺書卷二上）

又問、如何是格物。先生曰格至也、言窮至物理也。又問、如何可以格物。曰、但立誠意去格物、其遲速却在人明暗也。明者格物速、暗者格物遲。（同卷二十二）

隨事觀理、而天下之理得矣。天下之理得、然後可以至于聖人。君子之學、將以反躬而已矣。反躬在致知、致知在格物。（同卷二十五）

格猶窮也、物猶理也、猶曰窮其理而已矣。窮其理然後足以致知、不窮則不能致也。物格者適道之始與、欲思格物則固已近道矣。是何也、以收其心而不放也。（程氏遺書卷二十五）

今人欲致知、須要格物。物不必謂事物、然後謂之物也。自一身之中、至萬物之理、但理會得多相次、自然豁然有覺處。（同卷十七）

未說到持守、持守甚事、須先在致知。致知盡知也、窮理格物、便是致知。（同卷十五）

伊川以爲へらく、誠意正心修身皆格物より來るものなれば、格物は所謂大學の八條目中最根本的なるものなり。

大學論誠意已下、皆窮其意而明之。獨格物則曰物格而後知至。蓋可以意得、而不可以言傳也。自格物充之、然後可以至聖人。不知格物、而先欲意誠心正身修者、未有能中於理者。（程氏遺書卷二十五）

或問、進修之術何先。曰、莫先於正心誠意。誠意在致知、致知在格物。格至也、如祖考來格之格、凡一物上有一理、須是窮致其理。（同卷十八）

格物は物理を窮至するの謂なり。物とは事物に限らず、一身の中より萬物の理に至るまで皆此れ物なり。

（イ）されば之を身に察し性情を求むるは、其得るところ尤切なれども、一草一木も亦皆理あれば、須らく察す

となし、又物我一理なれば、纔に彼を明むれば便ち此を曉る、內外を合すの道なりと曰ひ、(ロ)纔に理を窮むれば便ち性を盡し、纔に性を盡せば便ち命に至るとも曰へり。此れ頗る釋家の草木國土悉有佛性といへる汎神論に似れるところなり。

(イ)(イ)觀物理以察己、既能燭理、則無往而不識。(程氏遺書卷十八)

(イ)問觀物察己、還因見物、反求諸身否。曰、不必如此說物我一理、纔明彼即曉此、合內外之道也。語其大、至天地之高厚、語其小、至一物之所以然、學者皆當理會。又問、致知先求之四端如何。曰、求之性情、固是切于身。然一草一木皆有理、須是察。(同上)

(ロ)窮理盡性至命、只是一事。纔窮理便盡性、纔盡性便至命。(同上)

窮理の方法如何。伊川以爲へらく、(イ)窮理の方多端なり、讀書處事接物皆窮理の存するところなり。書を讀みて義理を講明し、或は古今の人物を論じて其是非を分つが如き、或は事に應じ物に接して其當に處するが如き、皆窮理なり。天下の事物限なし、如何してか之を窮め盡さん。伊川以爲へらく、(ロ)天下の事物を窮盡せずと雖も、今日一件に格り、明日一件に格り、積むこと之を久うして衆理を集むるときは、一旦豁然として貫通するあらん。又以爲へらく、(ハ)萬物皆一理なれば、一事上に於て窮盡すれば、其他は類を以て推すべし。故に又(ニ)一身に反うして天地を觀るべしとなす。

(イ)窮理亦多端、或讀書講明義理、或論古今人物別其是非、或應事接物而處其當、皆窮理也。

(ロ)或問、格物須物々格之、還是格一物而萬理皆知。曰、怎生便會該通、若只格一物、便通衆理、雖顏子亦不敢如此道。須是今日格一件、明日格一件、積習既多、然後脫然自有貫通處。(程氏遺書卷十八)

(ロ)所務于窮理者、非道須盡窮了天地萬物之理、又不道窮得一理便到、只是要積累多後自然見去。(同卷二上)

(ロ)人要明理、若止一物上明之、亦未濟事須是集衆理、然後脫然自有悟處、於物上理會也得、不理會也得。(同卷十七)

(ハ)格物窮理、非是要窮天下之物、但於一事上窮盡、其他可以類推。至如言孝、其所以爲孝者、如何窮理、如一事上窮不得、且別窮一事、或先其易者、或先其難者、各隨人深淺。如千蹊万徑皆可適國、但得一道入得便可、所以能窮者、只爲萬物皆是一理、至如一物一事、雖小皆有是理。(程氏遺書卷十五)

(ニ)世之人務窮天地萬物之理、不知反之一身、五臟六腑毛髮筋骨之所存、鮮或知之。善學者取諸身而已、自一身以觀天地。(程氏外書卷十一)

讀書窮理の方法を說きて、(イ)一向に書冊に靠り(ロ)文字に拘泥すべからざるをいひ、(ハ)或は文を主とし、或は詳略を攷へ、同異を採るが如きは、外なり末なり、(ニ)義理を識るを以て主眼とせざるべからざるをいへり。

(イ)解義理、若一向靠書冊、何由得居之安資之深、不惟自失、兼亦誤人。(程氏遺書卷十五)

(イ)(ロ)學者多蔽於解釋注疏、不須用功深。(程氏外書卷一)

(ロ)善學者要不爲文字所拘、故文義雖解錯、而道理可通行者不害也。(同卷六)

(ロ)文字上無間暇、終是少工夫。然思慮則儘不廢于外、事雖奔迫、然思慮儘悠々。(程氏遺書卷十五)

(ハ)學也者使人求於內也。不求於內而求於外、非聖人之學也。何謂不求於內而求於外、以文爲主者是也。學也者使人求於本也。不求於本而求於末、非聖人之學也。何爲不求於本而求於末、攷詳略採同異者是也。是二者皆無益於身、君子弗學。(程氏遺書卷二十五)

(ニ)古之學者、先由經以識義理。蓋始學時盡是傳授、後之學者、卻先須識義理、方始看得經。如易繫辭所以解易、今人須看了易、方始看得繫辭。(程氏遺書卷十五)

(イ)知に聞見の知あり、德性の知あり。德性の知は聞見を假らず。(ロ)程氏の所謂致知の知は、即ち德性の知にして、聞見の知に非ず。致知は至善に止るを知るにあり、(ハ)善を明らかにするにあり、(ニ)是の德性の知は人々之を固有するものにして、(ニ)(ホ)外より我を鑠すものに非ず。

(イ)聞見之知、非德性之知、物交物則知之、非內也、今之所謂博物多能者是也。德性之知、不假見聞。(程氏遺書卷二十五)

(ロ)致知、但知止于至善。如爲人子止于孝、爲人父止于慈之類、不須外面、只務觀物理泛然、正如遊騎無所歸也。(程氏遺書卷七)

(ハ)人患事繫累思慮蔽固、只是不得其要、要在明善、明善在乎格物窮理、窮至於物理、則漸久後天下之物皆能窮、只是一理。(同卷十五)

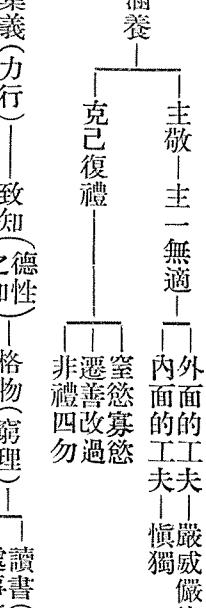
(ニ)知者吾之所固有、然不致則不能得之、而致知必有道、故曰致知在格物。(同卷二十五)

(ホ)致知在格物、非由外鑠我也、我固有之也。因物有遷、迷而不悟、則天理滅矣、故聖人欲格之。(同上)

至善とは義理の精微、得て名くべきなきものなりとす。

止於至善、不明乎善、此言善者義理之精微、無可得名。且以至善目之、繼之者善、此言善却言得輕、但謂繼斯道者、莫非善也、不可謂惡。（程氏遺書卷十五）

程伊川爲學の論、之を約すれば左圖の如し。



伊川は知行の關係を說きて、知は行の本なりとなし、且つ眞の知は、必ず行を伴ふべきものとなせり。故に致知の要を力說すると同時に、知行合一的の思想を認むることを得べし。

問、忠信進德之事、固可勉强、然致知甚難。曰、子以誠敬爲可勉强、且恁地說、到底須是知了方行得。若不知、只是覷却堯學他行事、無堯許多聰明容知、怎生得如他動容周旋中禮、有諸中必形諸外、德容安可妄學、如子所言是篤信而固守之、非固有之也、且如中庸九經修身也尊賢也親親也、堯典克明峻德以親九族、親親本合在尊賢上、何故却在下、須是知所以親親之道方得、未致知便欲誠意、是臘等也。學者固當勉强、然不致知怎

生行得、勉強行者安能持久、除非燭理明自然樂循理、性本善循理而行、是循理事本亦不難。但爲人不知旋安排著便道難也。（程氏遺書卷十八）

知至則當至之、知終則當遂終之、須以知爲本。知之深則行之必至、無有知之而不能行者、知而不能行、只是知得淺、飢而不食烏喙。人不蹈水火、只是知。人爲不善、只爲不知、知至而至之、知幾之事、故可與幾、知終而終之、故可與存義、知至是致知。博學明辨審問愼思皆致知知至之事、篤行便是終之、如始條理終條理、因其始條理、故能終條理、猶知至即能終之。（程氏遺書卷十五）

問、學何以有至覺悟處。曰、莫先致知。能致知則思一日而愈明一日、久而後有覺也。學而無覺則何益矣、又奚學爲。思曰容、容作聖、纔思便容、以至作聖、亦是一箇思、故曰勉強。學問則聞見博而知益明。又問、莫致知與力行兼否。曰、爲常人言、纔知得非禮不可爲須用勉強、至於知穿窬不可爲、則不待勉強、是知亦有深淺也。古人言、樂循理之謂君子。若勉強只是知循理、非是樂也、纔到樂時、便是循理爲樂、不循理爲不樂、何苦而不循理、自不須勉強也。若夫聖人不勉而中、不思而得、此又上一等事。（同卷十八）

人謂要力行、亦只是淺近語。人既能知見、豈有不能行、一切事皆所當爲、不待着意做、便有箇私心、這一點意氣能得幾時了。（同卷十七）

伊川以爲へらく、(イ)心や性や天や異なるあるに非ず、其の實體は皆理なり。故に孟子は其心を盡すものは其性を知る、其性を知れば天を知ると曰へりとなし、(ロ)己の心を盡すを以て天地と參となり、其の化育を贊

する所以なりとす。又(ハ)性を盡くし命に至る所以を孝弟に本くとせり。

(イ)孟子、曰盡其心者知其性也、知其性則知天矣。心也性也天也非有異也。(程氏遺書卷二十五)

(ロ)心具天德、心有不盡處、是天德處未能盡。何緣知性知天、盡己心則能盡人盡物、與天地參贊化育、贊則直養之而已。(同卷五)

(ハ)問、行狀云、盡性知命、必本於孝弟、不識孝弟何以能盡性至命也。曰、後人便將性別作一般事說了。性命孝弟只是一統底事、就孝弟中便可盡性至命。至如洒掃應對與盡性至命、亦是一統底事、無有本末、無有精粗、却被後來人言性命者、別作一般高遠說、故學孝弟是於人切近者言之。然近時非無孝弟之人、而不能盡性至命者、由之而不知也。(同卷十八)

第三章　顏子所好何學論考

一篇の思想文字の淵源するところを明かにせんと欲し、顏子所好何學論考を作る。

聖人之門其徒三千、獨稱顏子爲好學。夫詩書六藝、三千子非不習而通也、然則顏子所獨好者何學也、學以至聖人之道也、聖人可學而至歟。曰、然。

聖可學乎。曰、可。(通書聖學第二十)

顏子一簞食一瓢飲在陋巷、人不堪其憂、而不改其樂。夫富貴人所愛也、顏子不愛不求而樂乎貧者、獨何心哉。天地間有至貴至富可愛可求、而異乎彼者、見其大而忘其小焉爾。見其大則心泰、心泰則無不足、無不足則富貴貧賤處之一也、處之一則能化而齊、故顏子亞聖。（同顏子第二十三）

天地間至尊者道、至貴者德而已矣。至難得者人、人而至難得者、道德有于身而已矣。（同師友第二十四）

學之道如何。曰、天地儲精、得五行之秀者爲人。其本也眞而靜、其未發也五性具焉。曰、仁義禮智信形既生矣、外物觸其形而動于中矣、其中動而七情出焉。曰、喜怒哀懼愛惡欲情既熾而益蕩其性鑿矣。

五行之生也、各一其性。無極之眞、二五之精、妙合而凝。乾道成男、坤道成女、二氣交感、化生萬物、萬物生生、而變化無窮焉。惟人也得其秀而最靈、形既生矣、神發知、五性感動而善惡分、萬事出矣。聖人定之以中正仁義而主靜、立人極焉。（太極圖說）

是故覺者約其情始合於中、正其心養其性、故曰性其情。愚者則不知制之、縱其情而至於邪僻、梏其性而亡之、故曰情其性。

欲修其身者、先正其心。（大學）

存其心養其性、所以事天也。（孟子盡心上）

不爲乾元、何能通物之始。不性其情、何能久行其正。（周易乾文言利貞者性情也王弼注）

言垂天眞以性情者、禮記云、人生而靜、天之性也、感物而動、性之欲也。欲即情欲、若以情情於性、性則妄動

爲情。若以性性於情、情則眞靜爲性。（唐釋宗密華嚴行願品疏鈔卷一）

凡學之道、正其心養其性而已。中正而誠則聖矣。君子之學、必先明諸心知所養、然後力行以求至、所謂自明而誠也。

聖人之道、仁義中正而已矣。（通書道第六）

誠者聖人之本。（同誠上第一）

聖誠而已矣。（同誠下第二）

自誠明、謂之性。自明誠、謂之敎。誠則明矣、明則誠矣。（中庸）

故學必盡其心、盡其心則知其性、知其性反而誠之、聖人也。故洪範曰、思曰睿、睿作聖。

盡其心者、知其性也、知其性則知天矣。（孟子盡心上）

堯舜性者也、湯武反之也。（同盡心下）

思曰睿、睿作聖。（尙書洪範）

誠之之道、在乎信道篤。信道篤則行之果、行之果則守之固、仁義忠信不離乎心、造次必於是、顚沛必於是、出處語默必於是。久而弗失則居之安、動容周旋中禮、而邪僻之心無自生矣。

誠之者、擇善而固執之者也。（中庸）

仁義忠信、樂善不倦、此天爵也。（孟子告子上）

君子去仁、惡乎成名。君子無終食之間違仁、造次必於是、顚沛必於是。（論語里仁）

故顏子所事則曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。仲尼稱之則曰、得一善則拳拳服膺、而弗失之矣。又曰、不遷怒、不貳過。有不善未嘗不知、知之未嘗復行也、此其好之篤學之之道也。

視聽言動皆禮矣。所異於聖人者、蓋聖人則不思而得、不勉而中、從容中道。顏子則必待思而後得、必勉而後中。故曰、顏子之與聖人相去一息。

誠者天之道也、誠之者人之道也、誠者不勉而中、不思而得、從容中道聖人也。（中庸）

孟子曰、充實而有光輝之謂大、大而化之之謂聖、聖而不可知之謂神。顏子之德可謂充實而有光輝矣。所未至者守之也、非化之也。

以其好學之心、假之以年、則不日而化矣。故仲尼曰、不幸短命死矣、蓋傷其不得至於聖人也。所謂化之者、入於神而自然、不思而得、不勉而中之謂也。孔子曰、七十而從心所欲不踰矩、是也。

或曰、聖人生而知之者也。今謂可學而至、其有稽乎。曰、然。孟子曰、堯舜性之也、湯武反之也。性之者生而知之者也、反之者學而知之者也。又曰、孔子則生而知也、孟子則學而知也。後人不達、以謂聖本生知、非學可至、而爲學之道遂失。不求諸己而求諸外、以博聞强記巧文麗辭爲工、榮華其言、鮮有至於道者、則今之學與顏子所好異也。

顏子所好何學論一篇、其の前半は通書及太極圖說に本原するところある、歷々徵すべし。學を以て聖人に

至るの道なりとし、聖人を以て學ぶべしとなし、誠を以て聖人の本となす等、爲學論の大綱は之を周子に本けり。其學の周子に淵源するや顯然たり。情性を蕩するの說、情を性にするの論、此等の思想は、遠く李翱の復性書に出づといふべく、情を性にするの語は、王弼の易注に出づ。其の後半に至りては、中庸孟子に原くところ最大なり。洪範の思と孟子の盡心とを融合し、思を以て聖に至るの要となし、孟子の湯武反之を以て中庸學知の事となし、聖學んで至るべきを證せり。

第四章　餘　論

伊川は明道と同く、其本體論に於て周子の無極の語に代ふるに理字を以てし、天即道即理なりとし、形而上下道器の說に原きて、道氣即理氣を說く、其論の根柢、伯子と同く易に在り。其性情論に於て、伯子が專ら氣稟に依りて性を說けるより、更に一步を進めて、天命之性、氣質之性を並說して、孔孟の性說を調和し、以て孟子性善の說を論證し、性情の別を說きて、性の動を以て情となし、性は善にして不善なく、情に善不善ありとなす。善なる性より發して、情の不善となる所以に至りては、之を明說せずと雖も、彼の說に據りて之を推せば、氣の偏濁に由るものなり。氣に偏正清濁ある所以に至りては、之を說かず。二程殊に伊川に至りて、性上更に氣を說き出して、善く其差別的方面を說明せしと雖も、天理人欲を說きて善惡の起原を說明

するに及びて、理氣二元論に陷ゐるの破綻を免るゝこと能はざりき。其爲學論に於て、李翺の復性、周子の誠を骨髓となし、易に本きて敬以直內、義以方外を以て爲學の二大綱となし、直內なる涵養の工夫は、伯子と同く、主敬を以て其要となし、方外なる集義の工夫は、之を致知に本づけ、致知は之を格物窮理に本づけ、周子の主靜無欲なる靜的工夫以外に、更に動的工夫の一面を說き出せり。伊川の說は、伯子に比して詳密を加へ、所謂文理密察なるものと謂ふべきも、其說二元論に陷るを免れず。此の破綻を脫せんには、一元論を以てせざるべからず、是れ張子の太虛論ある所以なり。

第五篇　張載の哲學

第一章　本體論

周子は老子の本體論に原きて、古來の太極一元論より更に一步を進め、無極を說き出して具體一元論を立てしも、無極と太極との干係に至りては未だ之を詳說せず、竟に理氣二元論に陷るを免れざりき。二程子は形而上の理を說き出して、理氣一體兩面論を立てしも、形而上の理と形而下の氣との關係に至りては未だ之を詳說せず、亦竟に理氣二元論に陷ゐるを免れざりき。張子は這の破綻に向つて、深思苦索するとこ

ろあり。理氣有無を混一して、二元論的困難を調和し、理氣有無の關係を說きて、其不可知的困難を免るゝ、太虛一元の說を立てたり。張子の說は固より周子二程子に淵源すと雖も、大に自家の創見を加へたるものなり。

張子以爲へらく、宇宙の本體は太虛にして、(イ)太虛無形是れ氣の本體なり。至靜無感是れ性の淵源なり。

(イ)太虛無形、氣之本體、其聚其散、變化之客形爾。至靜無感、性之淵源、有識有知、物交之客感爾。客感客形與無感無形、惟盡性者一之。(正蒙太和篇第一)

氣は單に靜止せる實在に非ず、活動變化窮なきものなり、(ロ)氣の活動即ち流行變化、之を道と曰ふ。

(ロ)由氣化有道之名。(正蒙太和篇第一)

(イ)道中に本具的に浮沈升降動靜相感の性を涵す、之を太和と曰ふ。氣の絪縕相盪勝負屈伸、皆這の太和より生ず、太虛氣なきこと能はず、(ロ)太虛に坱然たる游氣升降飛揚未だ嘗て止息せず、陽の輕淸なるもの浮上して天となり、陰の重濁なるもの降下して地となり、感遇聚散或は風雨となり、或は霜雪となり、山川融結し萬品形を流き、人物の萬殊を生ず。

(イ)太和所謂道中涵浮沈升降動靜相感之性、是生絪縕相盪勝負屈伸之始、其來也幾微易簡、其究也廣大堅固起知於易者乾乎、效法於簡者坤乎、散殊而可象爲氣、淸通而不可象爲神、不如野馬絪縕、不足謂之太和。(正蒙太和篇)

(ロ)氣坱然太虛、升降飛揚、未嘗止息。易所謂絪縕、莊生所謂生物以息相吹野馬者與。此虛實動靜之機、陰

陽剛柔之始、浮而上者陽之清、降而下者陰之濁、其感遇聚散、爲風雨爲雪霜、萬品之流形、山川之融結、糟粕煨燼、無非教也。（同上）

（イ）氣の太虛に聚散する狀、猶ほ氷の水中に凝釋するが如し。水と氷とは二にして一なるが如く、太虛と氣とは二にして一なり。（イ）太虛即氣なり。（ロ）氣の清くして礙なきもの太虛なり、氣の濁にして礙あるもの有形となる。（ハ）有形は氣の聚りたるものにして、氣聚らざれば形なし。

（イ）氣之聚散於太虛、猶氷凝釋於水。知太虛即氣、則無無。故聖人語性與天道之極、盡於參伍之神、變易而已、諸子淺妄、有有無之分、非窮理之學也。（正蒙太和篇）

（ロ）太虛爲清、清則無礙、無礙故神。反清爲濁、濁則礙、礙則形。（同上）

（ハ）氣聚則離明得施、而有形、氣不聚則離明不得施、而無形。方其聚也、安得不謂之客、方其散也、安得遽謂之無。（同上）

形なしと雖も氣の本體は在り、太虛是なり。太虛は無形なれども、尙透明なる氣の肉眼にて觀得ざるが如きものにして、氣たるを失はず、されば張子の本體論は、具體的一元論といふべし。

周程三子は、無極の眞又は理を實體と看しを、張子に至りては、太虛即氣の屬性と看做して、理氣有無を混一する太虛一元論を以て、三子の哲學的困難を脫せんと試みしなり。且つ（イ）老氏の無より有を生ずといふ自然發生論、及釋氏の有象を以て假妄と看做す唯心論を斥破せり。

（イ）知虛空即氣、則有無隱顯、神化性命、通一無二。顧聚散出入形不形、能推本所從來、則深於易者也。若謂虛能生氣、則虛無窮、氣有限、體用殊絕、入老氏有生於無自然之論、不識所謂有無混一之常。若謂萬象爲太虛中所見之物、則物與虛不相資、形自形、性自性、形性天人不相待、而有陷於浮屠以山河大地爲見病之說。（正蒙太和篇）

周子は陰陽の動靜を以て宇宙の發展を說き、二程は陰陽の往來屈伸を以て造化の作用を說きしも、未だ動靜往來屈伸の由て起る所以を明かにせざりしが、張子は之を二氣の良能なりとし、氣本有の性能に歸したり。

鬼神者、二氣之良能也。（正蒙太和篇）

天道不窮、寒暑已、衆動不窮、屈伸已、鬼神之實、不越二端而已矣。（同上）

氣は一物兩體なり。一なるが故に神なり、兩なるが故に化す、神化の妙用一にして兩なるに因る。兩體とは虛實なり動靜なり聚散なり淸濁なりと云ふ。此れ動靜往來屈伸を以て、氣の必然的性能となすものなり。

一物兩體氣也。一故神、兩故化。（正蒙參兩篇第二）

兩不立則一不可見、一不可見則兩之用息。兩體者虛實也、動靜也、聚散也、淸濁也、其究一而已。（周太和篇第一）

其太虛不能無氣、氣不能不聚而爲萬物、萬物不能不散而爲太虛、循是出入、是皆不得已而然也。（同上）

と云へるは、動靜聚散往來屈伸は、必然的なることを明言せるものなり。

明道が天地萬物之理、無獨必有對、皆自然而然、非有安排也（二程遺書卷十一）と云ひ、又萬物無不有對（二程遺書卷十一）道無無對、有陰則有陽、有善則有惡、有是則有非（二程遺書卷十五）と云へるもの、此れヘーゲルの辨證法に措定反措定を說けると相似るものあり。張子の兩不立則一不可見、一不可見則兩之用息と云へるもの、一即ち綜合は、措定反措定の兩に因りて成るものなることを云へるにて、程子よりも更に一歩を進めて、ヘーゲルと相近きものあり。

第二章　道德哲學

第一節　性情論

游氣紛擾太虛に凝聚して、質を成し萬物となる。

太虛不能無氣、氣不能不聚而爲萬物。（正蒙太和篇）

游氣紛擾、合而成質者、生人物之萬殊。（同上）

萬物性を有せざるなし。性に通蔽開塞の異なるありて、人物の別を生じ、蔽に厚薄ありて、賢愚の別を生ず。

凡物莫不有是性、由通蔽開塞。所以有人物之別、由蔽有厚薄。故有智愚之別。（性理大全卷二十九人物之性）

天の人に授くるより名けて之を命と曰ひ、人の天に受くるより名けて之を性と曰ふ。

天授於人則爲命、人受於天則爲性。（語錄抄）

太虛は宇宙萬物の本源にして、氣化自から其間に行はれ、萬物其形體を成し、其性命を稟く。故に虛と氣とを合せて性の名あり。

由太虛有天之名、由氣化有道之名、合虛與氣、有性之名、合性與知覺、有心之名。（正蒙太和篇）

性其總合兩也、命其受有則也。（同上）

虛と氣とを合せて性の名ありと云ふ。一面より之を見れば、萬物の性皆平等なるが如しと雖も、氣に開蔽通塞の異なるあれば、人と物と其性全く相同じといふべからず。されば張子は告子の生を以て性となすの說を駁して曰く、

以生爲性、既不通。晝夜之道、且人與物等。故告子之妄不可不詆。（正蒙太和篇）

と、之を明道の生之謂性、性即氣、氣即性、生之謂也と謂へるに比すれば、張子は氣即性と云はずして、虛と氣とを合せて性の名ありと云へる點に於て相異れり。又明道は、人生氣稟、理有善惡、然不是性中元有此兩物相對而生也。有自幼而善、有自幼而惡、是氣稟自然也、善固性也、然惡亦不可不謂之性也と云ひて、氣稟を說きて人性の差別的方面を說明せんことを試みしも、人生而靜以上不容說、才說性、便已不是性也と云ひて、其說未だ詳かならず。伊川に至りて、生之謂性、與天命之謂性同乎、性字不可一槩論。生之謂性、正訓所稟受也、天命之謂性、此言性之理也と云ひて、稟受するところと性の理とを區別して、人生を論ずるに至りし

が、張子に至りて、始めて天地の性、氣質の性を說き出して、後世宋明諸儒性說の定說たるを致せり。

形而後有氣質之性、善反之則天地之性存焉。故氣質之性、君子有弗性者焉。（正蒙誠明篇第六）

古來或は性善と云ひ、或は性惡と云ひ、或は善惡混ずと云ひ、或は性三品ありと云ふもの、張子の氣質の性天地の性に依りて、其矛盾を除き去ることを得たり。即ち性善といふは、天地の性を云ふなり。性惡といふは、氣質の性の善反せざるものを云ふなり。善惡混ずといふは、天地氣質の兩面を云ふなり。三品ありといふも亦然り。是に於て古來の性說、張子に至りて定まる、其說二程に本くと雖も、最も明確に之を言明し、其說を大成せしものは張子なり。

性情の關係を說きて曰く、

有形則有體、有性則有情。（性理拾遺）

發于性則見于情、發于情則見于色、以類而應也。（同上）

按ずるに、此語邵子皇極經世觀物外篇下に見ゆ。

此れ伊川の性之有動者謂之情と云へると相同じ。然れども伊川の水波の喩を以て其干係を明かにせるが如き詳說なし。

性情と心との干係を說きて曰く、

合虛與氣、有性之名。合性與知覺、有心之名。（正蒙太和篇）

心統性情者也。（性理拾遺）

伊川の性之有形者謂之心と云へるに比して、更に明切なるを覺ゆ。

第二節　爲學論

西銘一篇は、張子爲學論の縮寫圖ともいふべく、其の道德修爲の論に於て、其要を盡くせるものといふべし。其骨髓たり中心たる思想は、明道の識仁說の骨子を成せる天地萬物一體の仁なり。而して天地萬物一體觀は、亦彼の太虛說より自然に演繹せらるべき歸結なり。西銘に曰く、

乾稱父、坤稱母、予茲藐焉、乃混然中處。故天地之塞吾其體、天地之帥吾其性、民吾同胞、物吾與也。

此れ天地は大父母にして、人物は皆其子なり。其體其性は、虛と氣とを稟けて成る。されば人も物も天地に對して平等に其子にして、何等の差別なし。此れ程子の所謂理一即ち平等なる方面なり。されど平等の中に差別あり。故に曰く、

大君者吾父母宗子。其大臣宗子之家相也。尊高年、所以長其長、慈孤弱、所以幼其幼、聖其合德、賢其秀也。凡天下疲癃殘疾、惸獨鰥寡、皆吾兄弟之顚連而無告者也。

貴賤貧富、長幼賢愚、安樂困窮等の差別あり。隨つて之に對する道亦自から異ならざるべからず。天地萬

物一體の仁中、自から愛敬を施すに差等あるの義なかるべからず、此れ所謂分殊即ち差別的方面をいへるなり。更に進みて父母に事ふるの孝を移して、天地の大父母に事ふべきを說き、其工夫を示して曰く、

於時保之、子之翼也。樂且不憂、純乎孝者也。違曰悖德、害仁曰賊、濟惡者不才、其踐形惟肖者也。知化則善述其中、窮神則善繼其志。不愧屋漏、爲無忝。存心養性、爲匪懈。惡旨酒、崇伯子之顧養。育英才、潁封人之錫類。不弛勞而底豫、舜其功也。無所逃而待烹、申生其恭也。體其受而歸全者、參乎。勇於從而順令者、伯奇也。

戒愼恐懼、盡性踐形、存心養性、知化窮神、樂天知命、克己循理等、凡そ古人が道德修爲の工夫を說くところの要を盡して餘蘊なしといふべし。朱子が張子此篇大抵皆古人說話集來と云へるが如く、事天の工夫を說くところ經傳に原本せざるはなし。自餘の部分と雖も、其字を用ふる多くは來處あり。然れども其太虛哲學に根柢を有する天地大父母の思想を經とし、古人說話の粹を緯として、道德論の一體系を形成せるところ、此れ張子の大力量大創見と稱すべきなり。又天地萬物一體の平等を說きて、墨家兼愛の惡平等に流れず、親疎遠近の差別を說きて、楊子爲我の惡差別に陷らざるところ、其說の中正にして偏せざるを見るに足るべし。

呂大臨の張子行狀に、學者有問、多告以知禮成性、變化氣質之道と云へる如く、彼の修爲の工夫を說くや、知禮成性と氣質變化とは、其の最も重を措くところなり。

形而後有氣質之性、善反之則天地之性存焉。（正蒙誠明篇第六）

性於人無不善、繫其善反不善反而已。過天地之化、不善反者也。（同上）

されば天地の性を存せんには、善く氣質の性を反さゞるべからず。又曰く

人之剛柔緩急、有才與不才、氣之偏也。天本參和不偏、養其氣、反之本而不偏、則盡性而天矣。性未成則善惡混、故亹々而繼善者斯爲善矣、惡盡去則善因以亡。故舍曰善、而曰成、之者性。（正蒙誠明篇）

氣質の性、多くは氣の偏あり、故に其氣を養ふて之を本に反へすを要す。此れ即ち氣質變化の事なり。故に氣質變化の要を說きて曰く、

爲學大益、在自能變化氣質。不爾卒無所發明、不得見聖人之奧。故學者先須變化氣質。變化氣質、與虛心相表裏。（經學理窟三義理）

氣質の惡なるもの、學を以て能く之を變ずることを得。氣の變ずべからざるもの、獨死生壽夭のみなることを說きて曰く。

德不勝氣性命於氣、德勝其氣性命於德、窮理盡性、則性天德命天理。氣之不可變者、獨死生修夭而已。（正蒙誠明篇）

人之氣質美惡、與貴賤夭壽之理、皆是所受定分。如氣質惡者、學即能移。今人所以多爲氣所使、而不得爲賢者。蓋爲不知學。古之人在鄉閭之中、其師長朋友日相敎訓、則自然賢者多。但學至於成性、則氣無由勝。

孟子謂、氣壹則動志。動猶言移易。若志壹亦能動氣、必學至於如天、則能成性。（經學理窟二氣質）

氣質變化の法を細說して曰く、

變化氣質、孟子曰、居移氣、養移體、況居天下之大居者乎。居仁由義、自然心和而體正。更要約時、但拂去舊日所爲、使動作皆中禮、則氣質自然全好。禮曰、心大體胖、心既弘大、則自然舒大而樂也。若心但能弘大不謹敬、則不立。若但能謹敬而心不弘大、則入於隘。須寬而敬。大抵有諸中者、必形諸外。故君子心和則氣和、心正則氣正。其始也固亦須矜持。古之爲冠者、以重其首、爲履以重其足、至於盤盂几杖爲銘、皆所以愼戒之。（經學理窟二氣質）

此れ氣質を變化するの要法は、寬と敬とに在り。而して其始は須らく矜持勉强して、其氣を正うすべきを說けるなり。寬は大心なり、敬は謹敬なり。謹敬は禮に由りて習ふべきを說きて曰く、

多聞見、適足以長小人之氣。君子莊敬日强、始則須拳拳服膺、出於牽勉、至於中禮、卻從容如此、方是爲己之學。鄉黨說九子之形色之謹、亦是敬、此皆變化氣質之道也。（經學理窟二氣質）

一概に氣質といふも、更に細說すれば氣と習とより成ることを知らざるべからず。氣質を變化するの學は、自覺したる後の學なり。

氣者自萬物散殊時、各有所得之氣習者。自胎胞中以至於嬰孩時、皆是習也。及其長而有所立自所學者、方謂之學。性則分明在外、故曰氣其一物爾。氣者在性習之間、性猶有氣之惡者爲病、氣又有習以害之、此所以要鞭辟至於齊强學、以勝其氣習。（語錄抄）

性は先天的なるものにして、萬物形を成すの前に在りて存す。習は後天的なるものにして、萬物形を成すの後に在り。氣は是れ萬物の形を成すものなり。故に氣は性習の間に在りと曰ふ。性は氣の惡なるものゝために病を受く、氣は又惡習のために害せらる、此れ學に依りて其氣習に勝たんことを要する所以なり。氣禀褊なるものも、未だ性を成すに至らざる時は、暫く暴發することありとも、學ぶところ却て正當なるときは、漸くに寛容となる。苟し學に志すときは、以て其氣習に勝つことを得べし。

雖則氣之禀褊者、未至於成性時、則暫或有暴發、然而所學則卻是正當、其如此則漸寛容。苟志于學、則可以勝其氣與習。此所以褊不害於明也。（語錄抄）

誠なるより明なるものと、明なるより誠なるものとの異なるを說きて曰く、自誠明は先づ性を盡して理を窮むるに至るなり。先づ其性より理會し來りて、理を行ふに至るを謂ふ。自明誠は先づ理を窮めて性を盡すに至るなり。先づ學問窮理より天性に推達するを謂ふなりと。

須知自誠明與明誠者有異。自誠明者、先盡性以至於窮理也。謂先自其性理會來、以至行理。自明誠者、先窮理以至於盡性也。謂先從學問、理以推達於天性也。（語錄抄）

明なるより誠ならんとするものは、須らく理を窮むべし。窮むること即ち是れ學なり、觀るところ求むるところ、皆學なりと曰へり。

就自明誠者須是要窮理。窮即是學也、所觀所求皆學也。（語錄抄）

窮理盡性の論は、易說卦傳より出で、窮理を以て爲學の要となせるは、程子に本けるものなり。

學者をして先づ禮を學ばしむる所以を說きて、俗習を脫して守るところあらしむるに在るを云へり。

某所以使學者先學禮者、只爲學禮、則便除去了一副當世習、便自然脫灑也。又學禮則可以守得定、所謂長而學謂之學者、謂有所立自能知向學。如孔子十五而志於學、是學也。（語錄抄）

又禮の效と要とを說きて曰く、禮は人の德性を養ひ、人をして常業あらしめ、義を集め得て浩然の氣を養ふべからしむと。又僞慢を免れて誠莊ならしめ、是に由りて性を盡し理を窮めしむるを云へり。

學者且須觀禮。蓋禮者滋養人德性、又使人有常業守得定。又可學便可行、又可集得義、養浩然之氣、須是集義。集義然後可以得。（浩然之氣、嚴正剛大、必須得禮、上下達義者克己也、經學理窟三、學大原上）

不誠不莊、謂可之盡性窮理乎。性之德也、未嘗僞且慢。故知不免乎僞慢者、未嘗知其性也。（正蒙誠明篇第六）

氣質變化の要法は、寬と敬とにあり。敬は禮を習ふに由りて之を學ぶべく、寬は其心を大にするにあり。

大心の要を說きて曰く、

大其心則能體天下之物。物有未體、則心爲有外。世人之心、止於聞見之狹。聖人盡性、不以見聞梏其心。其視天下、無一物非我。孟子謂、盡心則知性知天。以此天大無外。故有外之心、不足以合天心。見聞之知、乃物交而知、非德性所知。德性所知、不蔀於聞見。（正蒙大心篇第七）

張子以爲へらく、天地萬物一體の仁は、其心を大にするに由りて得べし。見聞の知は狹隘にして限あり、以て其心を大にし、天心に合するに足らず。唯だ德性の知に由りて、性を知り天を知り、天地萬物を體することを得と。又曰く、

天之明、莫大於日。故有目接之、不知其幾萬里之高也。天之聲、莫大於雷霆。故有耳屬之、莫知其幾萬里之遠也。天之不禦、莫大於太虛。故心知廓之、莫究其極也。人病其以耳目見聞累其心、而不務盡其心。故思盡其心者、必知心所從來而後能。（正蒙大心篇第七）

耳目見聞の知を以て其心を累すものは、其心を盡すことあたはず。其心を盡さゞれば其心を大にすることあたはず。其心を盡さんには、心の從來するところを知らざるべからず。心の從來するところ、太虛に非ずして何ぞ。故に虛心の要を說きて曰く、

虛心然後能盡心。又曰、虛心則無外以爲累。（語錄抄）

心既虛則公平。公平則是非較然易見、當爲不當爲之事自知。（經學理窟三學大原上）

大心は虛心に由りて得べきなり。此れ變化氣質、與虛心相表裏（經學理窟三義理）と云へる所以なり。

虛心なるの道は、意必固我を絕つに在り。故に四者の絕つべきを說きて曰く、

意有思也、必有待也、固不化也、我有方也、四者有一焉、則與天地爲不相似。（正蒙中正篇第八）

天理一貫。則無意必固我之鑿。意必固我一物存焉非誠也。四者盡去、則直養而無害矣。（同上）

不得已當爲而爲之、雖殺人皆義也。有心爲之、雖善皆意也。正己而物正大人也。正己而正物、猶不免有意之累也、有意爲善、利之也假之也、無意爲善、性之也由之也、有意在善。且爲不盡、況有意於未善耶。仲尼絶四、自始學至成德、竭兩端之敎也。（同上）

知禮性を成す所以を說きて曰く、

知及之而不以禮、性之非己有也。故知禮成性而道義出、如天地位而易行。（正蒙至當篇第九）

知之に及ばざれば、天下の理に循うて其の天下の理たるを知らず。猶ほ飲食するものゝ能く味を知らざるが如し。知之に及べども、禮に循うて氣習を變じて從容理に中るに至らざれば、己の有たる德を成さゞるなり。されば知禮性を成して、天下の理を得て德を成すことを得。

又知を說きて曰く、

誠明所知、乃天德良知、非聞見小知而已。（正蒙誠明篇第六）

知德以大中爲極、可謂知至矣。揮中庸而固執之、乃至之之漸也。惟知學然後能勉、能勉然後日進而不息可期矣。（正蒙中正篇第八）

中庸を擇んで固く之を執るは、知の德の極たる大中に至るの道なり。惟だ夫れ學を知りて能く勉むるに在り。而して知は聞見の小知を務めずして、天德良知を得んことを要す。又學の要を說きて曰く、

莫非天也、陽明勝則德性用、陰濁勝則物欲行。領惡而全好者、其必由學乎。（正蒙誠明篇第六）

燭天理、如向明、萬象無所隱。窮人欲如專顧影、間區區於一物之中爾。（正蒙大心篇第七）

天理を燭すは、陽明勝つて德性用ひらるゝなり。人欲を窮むるは、陰濁勝つて物欲行はるゝなり。陽明勝つて德性用ひらるゝは、學に由るのみ。張子學者をして先づ禮を學ばしむと雖も、學は一端に非ず、窮理盡性は學の極効にして、又學の事なり、博文集義亦學なり。故に曰く、

道理須義、從理生集義。又須是博文、博文則利用。（經學理窟四學大原下）

浩然之氣、本來是集義所生。故下頭卻說義氣須是集義以生、義不集如何得生、行有不慊於心、則餒矣。集義須是博文、博文則用利、用利即身安、到身安處、卻要得資養此。（同上）

此れ博文集義の學を說けるなり。又曰く、

學不長者無他術、惟是與朋友講治、多識前言往行、以畜其德。非禮勿言、非禮勿動、即是養心之術也。

此れ朋友と講治し、多く前言往行を識りて、其德を蓄ふを以て學となすなり。

之を要するに、張子學問修爲の工夫を說くこと多端にして一ならずと雖も、氣質變化と知禮成性とを以て其要となし、虛心と禮とを以て着力用功の楔子となす。

其の道德を定義するや、天下の理に循ふを以て道となし、天下の理を得るを以て德となす。

循天下之理之謂道、得天下之理之謂德。故曰易簡之善配至德。（正蒙至當篇第九）

天下の理に循ふは、大中至正の道にして、中正は道德の準極なり。中正の觀念は易に原くと雖も、已に周子

の提唱せるところなり。其の中正を說くや曰く、

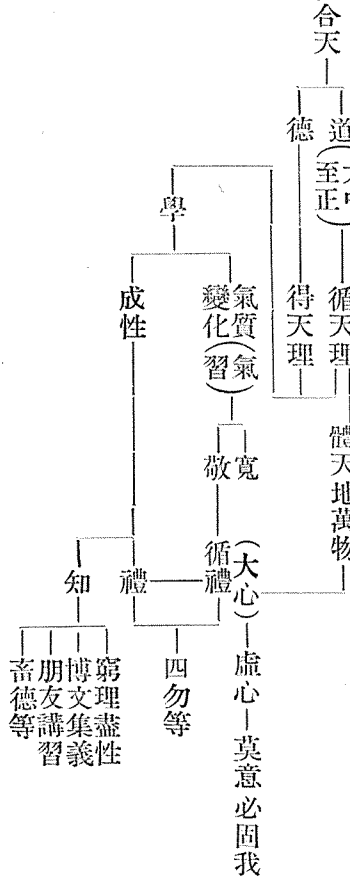
中正然後貫天下之道、此君子之所以大居正也。蓋得正則得所止、得所止則可以弘而致於大。樂正子、顏淵知欲仁矣。樂正子不致其學、足以爲善人信人、志於仁無惡而已。顏子好學不倦、合仁與知具體聖人、獨未至聖人之止爾。（正蒙中正篇第八）

大中至止之極、文必能致其用、約必感其通、未至於此、其視聖人恍惚前後不可爲像、此顏子之嘆乎。（同上）

極其大而後中可求、止其中而後大可有。（同上）

體正則不待矯而弘、未正必矯、矯而得中、然後可大。故致曲於誠者、必變而後化。（同上）

張子爲學論の要を約すれば、左圖の如し。



第三章　自然論

地は純陰にして中に凝集し、天は浮陽にして外に運旋するを以て、天地の常體なりとし、天動說を執る。恒星は純ら天に繫りて、浮陽と俱に運旋して窮まらざるものとし、日月五星は天に逆行し、地を包みて一體系を成すものとす。地は氣中に在りて天に順ふて左旋するものとし、地動說を執る。天に繫る辰象、地球に比して其の旋轉すること稍遲きを以て、反て右に移行するの觀を成すものとし、其緩速相齊しからざるものあるは、七政の性疎なるの致すところなりとす。月は陰精にして陽に反するものなるが故に、其の右行すること緩なれども、亦純ら天に繫りて動かざる恒星の如くならず。金水兩星は日に附して前後進退して行く。土星は地類なれども五行の根本たり、其の運行最も緩なれども亦純ら地に繫らず。火星亦陰質にして陽の萃まるところなれども、其氣日に比して微なるが故に、其遲きこと日に倍す。木星は歲に一盛衰あり、故に歲に一辰を歷るなり。換言すれば歲に天に遲くるゝこと一辰なるなり。凡そ圜轉の物の動く、必內に機ありとし、諸天體各自旋轉するものとし、古今天の左旋を說くものを以て至粗の論となす。而して天は太虛にして體なければ、其外に遷動するを驗するなしとす。冬夏の寒暑、晝夜の長短は、地に升降あるに因る。潮汐の干滿も亦此に係るとす。此れ皆舊說を襲用せるものなり。以爲へらく地は凝集不散の物なれども、二氣其間に升降して已まざるなり、陽日に上り地日に降下するものは虛なり、陽日に降り地日に進上

するものは盈なり、此れ一歳夜暑の候なり。一晝夜の盈虛升降は、海水の潮汐を以て驗すべしとす、潮汐に小大の差あるは、日月朔望其精相感ずるに繫るとなす。

日の質本と陰にして、月の質本と陽なるが故に、朔望の際に於て精魄反交すれば食生ずとなす。又月の虧盈は、日遠く月近く月日光を受くるに由るとなす。日月の萬古其形を變せざるは、陰陽の精互に其宅に藏し、各々其安んずるところを得るに由るとなし、其運行息まざるは、陰陽の氣循環迭至し、聚散相盪し升降相求め、絪縕相揉するに由るとなす。

閏餘は朔周天の二十四氣を盡さゞるより生ずとなす。

風雲雨雪霜露雷霆等の自然現象を說明して曰く、陰性は凝集し、陽性は發散す。陽陰に累はさるゝときは、相持して雨となる。陰陽に得らるゝときは、飄揚して雲となる。陰風に驅られ歛聚して未だ散せざるもの、雲物となりて太虛に斑布す。陰氣凝集して陽の內に在るもの出づるを得ざれば、奮擊して雷霆となる。陽の外に在るもの入るを得ざれば、周旋舍かずして風となる。暴かに暖和して散ずれば雪霜雨露となり、和せずして散ずれば戾氣曀霾となる。陰常に散じ緩かに陽に受交すれば、風雨調ひ寒暑正し。

火日は外光能く直にして施し、金水は內光能く闢いて受く、受くるものは材に隨ふて各得、施すものは應ずるところ窮なし。外光內光の說は、淮南子天文訓火外景水內景の說に本く。

五行の性を說いて曰く、水火は氣なり、故に炎上潤下す、陰陽と升降し上得て制せず。木金は土の華實なり、

其性水火の雜はるあり、木は土の浮華を水火の交に得るものなり、金は火の性を土の燥に得、水の精を土の濡に得、土の精實を水火の際に得るものなり。土は物の終始を成す所以にして、地の質化の終なり。水は陰凝りて陽未だ勝たざるなり。火は陽麗りて陰未だ盡きざるなり。火の炎する水の蒸する影ありて形なし、能く散じて光を受くる能はざるもの、其氣陽なるなり、陽陰に陷るを水となす、陰に附するを火となす。

以上は張子が正蒙參兩篇第二に論ずるところにして、彼の自然論と謂ふて可なり。斯くの如く汎く自然界の現象を論じて、自家の哲學中に包羅するもの、周子二程子に於て未だ見ざるところなり。古來の星曆の學に本きて說を爲すもの多しと雖も、間々深思苦索の餘に出づる創見あり。其中に卓見の存するもの鮮からず、地動說の如き天體各自旋轉說の如き是れなり。

第四章　餘　論

周子二程子が各一元論を立てしも、竟に理氣二元論に陷れり。張子は是の哲學的破綻を救はんがために、太虛說を立てたり。其性を說くや、天地之性氣質之性を立てゝ、二元論的なるが如くに見ゆるも、虛と氣とを合せて性の名ありとし、虛を以て氣の本體となして、之を二元とせず、天地の性を以て太虛の必然的性能

なりとす。氣は太虛を以て本體となすものなれば、氣質の性は天地の性の變態たるに過ぎずして、二元なるものに非ずとなす。

其爲學論に於て、大心虛心を說きて天地萬物一體の仁を體するを以て目的とし、又西銘を作りて天地萬物一體觀を以て一篇の骨子となせるは、邵子の虛心說及明道の識仁說に原けるものと謂ふべく、敬を以て氣質變化の要法となせるは、二程主敬の說に本き、其理を重んじ天理に循ふを道とし、天理を得るを德とし、窮理盡性を學の極效となせるも、亦邵子及二程の理に本けるものといふべし。唯だ氣質變化を以て爲學の要となせるより、其敬を說くや、程子の如く主一無適の敬を說かずして、外面より氣習を矯正する禮に重を措けるは、其相異れるところなり。

約結

五子の哲學が、支那學術史上に一新紀元を劃する所以は、從來儒家の說くところ、政治道德に關する實際的敎說の圈內に囿せしを、五子に至り始めて或は无極或は太極或は理或は太虛等を以て、宇宙元理とする一元的哲學を唱へ出して、深く性命道德の淵源を窮め、自家の敎說に一貫的說明と組織的體系とを與へ、從來の儒學を哲學化せしところにあり。此れ釋道二家の哲學的本體論的敎義の影響と刺激とに由ると雖も、其

教說の根據とするところは、易大傳學庸語孟樂記等儒家の經典に在り。而して其學漢唐一千有餘年間の學者が、徒らに經義訓詁に沒頭して、道德踐履の實を務めず、先聖の眞意を闡明せざるを陋とし、直ちに聖人を以て標的とし、其功力を用ふるところ文字に在らずして心性に在り。其爲學の工夫、最も敬義と窮理とを重しとするに至りては、五子皆俱に相同じ。五子に其端を發したる宋學は、一は朱子の手に因りて程朱學の一大派を成し、一は陸王二子の手に因りて陸王學の一大派を成せり。這の二大流派は、宋元明三代を通じて支那の學術思想の二大分野を領し、支那近古に發現したる新哲學を代表するものなり。朱子は周程二子の本體論を合致して、太極即理の說を立て、程張二子の性說を取りて本然氣質の性を說き、程子の居敬涵養致知窮理を取りて爲學の工夫となし、以て程朱學の大綱を定む。陸子は謝上蔡、王震澤、張横浦等に傳はりたる明道の學脈を承け、讀書窮理の工夫より去りて、直ちに心性の源頭に向つて手を下すを以て爲學の要となし、中庸の尊德性、孟子の立其大者を以て標的とす。明王陽明に至り、知行合一致良知の說を唱へ出し、遠く陸子の學を承けて之を宣揚し、茲に陸王學の一大流派成る。されば五子の哲學は、啻に宋元明三代哲學の先路を開くのみならず、之が基礎を築き之が規模を定めたるものと謂ふべきなり。

朱子晚年定論辯證

文學博士　松山直藏著

紫陽金溪兩派之徒。自宋代即如氷炭。各尊所聞。互相詬屬。及至有明。執學問之異同。以爭門戶負勝之風漸興。於是始有朱陸早異晚同之論。其說萌芽於趙東山對江右六君子策。成於程篁墩道一之編。王陽明亦因之。輯朱子晚年定論。引朱以合陸。其說遂熾然盛行乎天下焉。然其中有安排矯誣之迹歷歷可指摘者。故羅整庵已辯之於當時。陳晴瀾尋著學蔀通辯。以立早同晚異之說。自是朱陸同異之論紛紛囂囂焉。及至清朝。有孫承澤考正朱子晚年定論、王懋竑朱子年譜、李紱陸子學譜、朱子晚年全論之出。或尊朱而攻陸。或揚陸而抑朱。此爲其最表表者。至於自餘以下不可勝數也。於今雖晚年定論之是非已漸明。而公論亦略定。然定論之書其行也已久矣。人多觀是書即信其說。不復深究兩家之全書。且夫整庵辯年月顚倒之處。

僅止於何叔京四書。至晴瀾白田雖辯證益加廣博詳密。然未見有篇篇考定之歲月論辯之同異者。是以晚年定論之是非當否未易遽辨也。今平心論之。朱子之學凡三變焉。始之從李延平而一變。中之見張南軒而再變。終之至於乾道庚寅而三變。初頗喜釋氏之儱侗。及見延平。反求之於六經。而未脫好章句訓詁之習。因程門諸儒以求程子。因程子以求聖人。有所謂隔幾重公案者。而於延平求未發中之旨未達。及見南軒。始聞胡氏先察識後涵養之說而從之。至於庚寅。去胡氏之說。而始拈提程子涵養進學兩語。以爲爲學之大法尤重主敬涵養。於是深自悟向來支離之病。有自誑誑人之悔。自是爲學之大綱一定。而終身不復變焉。及淳熙乙未見象山。益加痛懲勇革。矯其支離。至丙午答象山云。無復向來支離之病。此朱子學變之大端也。朱陸二子俱說涵養求心。雖然朱子則於讀書講學上。力涵養求放心。陸子則否。以六經爲我註脚。於讀書講學之外。別求放心力涵養。此二子學術異同之所存也。金溪姚江之派以朱子說涵養求心。卽爲廢讀書講學。以專力心學。紫陽之派以朱子支離之語自悔之言爲自謙誨人之辭。此俱門戶之見。而非平允至當之論也。今乃作朱

子晚年定論辯證。每篇先考定歲月之早晚。後論辯朱陸之同異。王氏以集註或問爲中年未定之說。二書之成實在於朱子四十八歲之時。王氏雖不明言晚年始於何年。然以五十歲以後指爲晚年可以察也已。或問論語或問。朱子曰。是五十歲前文字。與今說不類。則朱子亦自以五十歲爲前後別。故今五十歲以前之書。止考定歲月而不論辯同異云。

辯證中所引朱子文集葉頁。據和刊大全集。

同　南軒文集葉頁。據綿邑南軒祠重刊本。

答黃直卿書朱子文集卷四十六第三十三葉、續集卷一第四葉

爲學直是先要立本。文義卻可且與說出正意。令其寬心玩味。未可便令考校同異研究纖密。恐其意思促迫難得長進。將來見得大意。略舉一二節目漸次理會。蓋未晚也。此是向來定本之誤。今幸見得卻煩勇革。不可苟避譏笑卻誤人也。

是書蓋在淳熙九年壬寅後。朱子五十三歲以後。

案。是書見文集卷四十六并續集卷一。文少有異同。正集首多有子春聞時相過甚善一句。許景陽字子春。同安人。與黃直卿同初游于劉靜春之門。後從學朱子者。淳熙九年朱子答劉子澄書文集卷三十五第十八葉裏云。許生初意其飄然無累。方欲約之來此教小兒。今聞其既授室。此事又差池矣。塊坐窮山。無嚴師畏友之益。其不爲小人之歸也鮮矣。則知淳熙壬寅子春之既歸里授室。直卿閩縣福州人。與同安泉州居不相遠。時相過不亦難也。以是推之。是書當在直卿歸閩之時矣。朱子答黃直卿書續集卷一第十三葉表云。居廬讀禮。學者自來。甚善甚善。直卿丁父艱。在未受業朱子之前。而其丁母憂。在始釋褐監台州酒務之時。正是係直卿强仕之時。朱子答黃書所云居廬讀

禮。指其丁母憂也明矣。且是書所言乃是敎學者之法。與學者自來語相照。以知是書當在直卿丁憂時也。直卿淳熙壬寅赴試長沙。朱子文集卷三十五第十八葉裏則其丁母憂在壬寅後也。

又案。是書說敎人先要立本。未可便令考校經文同異研究纖密。朱子見向來學者偏于致知窮理一邊。少主敬涵養之工夫。是以其本不立。無由得力。自以爲向來差誤。卽告直卿以是說。令無復誤人。其意非專力涵養以廢讀書講學之謂也。若夫向來定本之誤。續集作向來差誤。王氏乃以爲舊本之誤。遂以集註或問之類卽所謂中年未定之說擬之。是未解朱子所謂定本之義者也。朱子答呂伯恭書文集卷三十四第三十七葉云。統論爲學規模。亦豈容無定本。但隨人材質病痛而救藥之。卽不可有定本耳。又云。敎人恐須先立定本。却就上面整頓。方始說得無定本底道理。今如此一槩揮斥。其不爲禪學者幾希矣」。孔子以四敎。文行忠信。此孔門之定本也。博學審問愼思明辨篤行。乃是朱子之定本。王氏乃誤解定本之義。矯假以證己說。可謂杜撰矣。當時羅整庵已與書指摘之。後年陳晴瀾亦辯之於學部通辯。

答呂子約朱子文集卷四十七第三十三葉

日用功夫比復何如。文字雖不可廢。然涵養本原而察於天理人欲之判。此是日用動靜之間。不可頃刻間斷底事。若於此處見得分明。自然不到得流入世俗功利權謀裏去矣。熹亦近日方實見得向日支離之病。雖與彼中證候不同。然其忘己逐物貪外虛內之失則一而已。程子說不得以天下萬物撓己。己立後自能了得天下萬物。今自家一箇身心不知安頓去處。而談王說霸。將經世事業別作一箇伎倆商量講究。不亦誤乎。相去遠。不得面論。書問間終說不盡。臨風歎息而已。

是書疑在淳熙乙巳丁未間。朱子五十六歲至五十八歲間。

案。是書文集編次在淳熙乙巳丁未兩書間。各篇大抵論爲學方。年次先後似不錯序。故是書自當在乙巳丁未間。

又案。是書爲子約砭病救弊者。淳熙乙巳與劉子澄書文集卷三十五第二十六葉裏云。伯恭無恙時。愛說史學。身後爲後生輩糊塗。說出一般惡口小家議論。賤王尊霸謀利計功。更

不可聽。子約立脚不住。亦曰。吾兄蓋嘗言之云爾。中間不免極力排之。今幸少定。然其彊不可令者。猶未肯竪降幡也」。與是書相照。足以觀子約病弊之所存矣。且夫朱子之拈出程子涵養須用敬進學。則在致知兩語。在於乾道六年庚寅。朱子時四十一歲。終身守之不易。則涵養本源之說。已定於所謂中年以前。決非晚年定論也。若夫近日見得向日支離之病云云。適可以觀其終身不以自足。反省進修。文莫匪懈也已。

答何叔京 朱子文集卷四十第二十八葉

前此僭易。拜稟博觀之敝。誠不自揆。乃蒙見是。何幸如此。然觀來喻。似有未能遽舍之意。何邪。此理甚明。何疑之有。若使道可以多聞博觀而得。則世之知道者爲不少矣。熹近日因事方有少省發處。如鳶飛魚躍。明道以爲與必有事焉勿正之意同者。乃今曉然無疑。日用之間。觀此流行之體。初無間斷處。有下工夫處。乃知日前自誑誑人之罪。蓋不可勝贖也。此與守書册泥言語。全無交涉。幸於日用間察

之。知此則知仁矣。

是書在乾道四年戊子。朱子時年三十有九。

案。是書首云。今年不謂饑歉至此。夏初所至洶洶。遂爲縣中委以賑糶之役。中間又爲隣境群盜竊發。百方區處、僅得無事。乾道四年四月崇安饑。請粟于府以賑之、此其事也。事詳于建寧府崇安縣五夫社倉記。朱子文集卷七十七第二十五葉裏 記云。乾道戊子春夏之交。建人大饑。予居崇安之開耀鄉。知縣事諸葛侯珽瑞以書來屬予及其鄉之耆艾左朝奉郎劉侯如愚曰。民饑矣。蓋爲勸豪民發藏粟。下其直以振之。劉侯與予奉書從事。里人方幸以不饑。俄而盜發浦城。距境不二十里。人情大震。藏粟亦且竭。劉侯與予憂之。不知所出。則以書請于縣于府。時敷文閣待制信安徐公嘉知府事。卽日命有司。以船粟六百斛。泝溪以來。劉侯與予、率鄉人行四十里。受之黃亭。步下歸籍。民口大小、仰食者若干人。以率受粟。民得遂無饑亂以死。無不悅喜歡呼。聲動旁邑。於是浦城之盜無復隨和。而束手就擒矣」。此是書係乾道四年之明證也。

答潘叔昌朱子文集卷四十六第二十三葉

示喻天上無不識字底神仙。此論甚中一偏之弊。然亦恐只學得識字。却不曾學得上天。卽不如且學上天耳。上得天了。却旋學上天人。亦不妨也。中年以後。氣血精神。能有幾何。不是記故事時節。熹以目昏不敢著力讀書。閒中靜坐。收歛身心。頗覺得力。閒起看書。聊復遮眼。遇有會心處。時一喟然耳。

是書蓋在淳熙十一年甲辰後。朱子五十五歲後。

案。朱子行狀云。至若求道而過者。病傳注誦習之煩。以爲不立文字、可以識心見性。中略立論愈下者。則又崇奬漢唐。比附三代。以便其計功謀利之私。二說並立。高者陷於空無。下者溺於卑陋。其害豈淺淺哉」。此指江西頓悟之學與永康事功之說也。是書云。近年異論蠭起。高者溺於虛無。下者淪於卑陋」。勉齋所云者卽是。朱子之辨浙學在甲辰。則是書蓋在其後矣。白田王氏以爲甲辰後者是。

又案。潘叔昌名景愈。金華人。與其兄叔度同學于東萊之門。東萊稱其有意務實。

宋元學案卷七十三麗澤諸儒學案朱子乃以爲其學博雜卑陋。是書亦爲叔昌砭其病處。故云亦恐只學得識字。却不曾學得上天。即不如且學上天耳」。又云。不是記故事時節」。此皆誡其博雜多讀耳。答叔昌一書云。文集卷四十六第三十二葉大抵近世儒者。於聖賢之言。未嘗深求其義理之極致。而惟以多求劇讀爲功。故往往遂以吾學爲容易之空言。而求所以進實功除實病者。皆必求之於彼。殊不知將適千里。而迷於所向。吾恐其進步之日遠。而稅駕之日賒也。今若未能決意自拔得。且姑置其說。而專意於吾學。捐去雜博專讀一書。虛心游意。以求夫義理之所在。如此三年。不得而後改圖。則朋友之心無所復恨。而於其所以進功除病之實。亦未爲晚也」。言得叔昌之病、與所以救藥之意極明白。即知是書爲叔昌言。其下段言靜坐收斂。頗覺得力者。亦勸涵養之意。非輕棄讀書講學之謂也。

答潘叔度朱子文集卷四十六第二十一葉

熹衰病。今歲幸不至劇。但精力益衰。目力全短。看文字不得。瞑目坐閒。却得收

拾放心。覺得日前外面走作不少。頗恨盲廢之不早也。看書鮮識之喻誠然。然嚴霜大凍之中。豈無些小風和日暖意思。要是多者勝耳。

是書在淳熙十年癸卯後。紹熙元年庚戌前。朱子五十四歲後、六十一歲前。

案。朱子之始識潘叔度。在乾道九年淳熙六年己亥。答呂伯恭書文集卷三十四第十八葉表云。叔度比日爲況如何。中略昨得其書。自言於佛學有得。未諭是否」。是書在叔度爲佛學之後。何以知之。朱子文集所收答潘叔度書凡八篇。是書乃是第八書。其第六書云。上略幸參考而互評之。則其辨益明。而儒釋之殊。亦可因以判矣」。八篇序次從年次先後。則是書自在叔度爲佛學之後。是書又云。吾人無用於世。則其在奉祠家居時也明矣。朱子淳熙十年癸卯差主管台州崇道觀。叔度以紹熙元年庚戌歿。故知是書在癸卯庚戌間也。

又案。是書云。瞑目閒坐。却得收拾放心。覺得日前外面走作不少」。是似痛自悔日前工夫之失者。然其實是亶語病目昏廢讀書時之功耳。非以靜坐收歛、爲爲學唯一功夫之謂也。淳熙乙巳答劉子澄書文集卷三十五第二十六葉云。子靜寄得對語來。語意圓

轉渾浩。無凝滯處。亦是渠所得效驗。但不免些禪底意思。昨答書戲之云。這些子恐是葱嶺帶來」。又葉賀孫錄朱子語類卷一百二十四第十八葉云。今不欲窮理則已。若欲窮理。如何不在讀書講論」。此賀孫紹熙辛亥以後所聞。朱子係六十二歲以後。此足以證朱子之不合陸子。而尤重讀書講論矣。

答呂子約朱子文集卷四十七第三十一葉

孟子言。學問之道。惟在求其放心。而程子亦言。心要在腔子裏。今一向耽著文字。令此心全體、都奔在册子上。更不知有己。便是箇無知覺不識痛癢之人。雖讀得書。亦何益於吾事邪。

是書疑在淳熙十二年乙巳。朱子時五十六歲。

案。是書朱子文集編次次乙巳書。以前書推之。是書亦自當在乙巳。學蔀通辯係乙未。恐誤。

又案。子約受業於兄東萊。故其學宗太史公。有汎濫博雜病。故告以求放心。是書

云。諸朋友書亦云。讀書過苦使然。不知是讀何書。若是聖賢之遺言。無非存心養性之事。決不應反至生病。恐又只是太史公作祟耳」。即知是書爲子約砭其病處。所謂應病與藥者。王氏採以爲晚年定論者。誤矣。陳晴瀾之辨學蔀通辯前編卷中得當。

答周叔謹朱子文集卷五十四第十三葉

應之甚恨未得相見。其爲學規模次第如何。近來呂陸門人互相排斥。此由各徇所見之偏、而不能公。天下之心以觀天下之理。甚覺不滿人意。應之蓋嘗學於兩家。不知其於此看得果如何。因話扣之。因書喻及爲幸也。熹近日亦覺向來說話、有太支離處。反身以求。正坐自己用功亦未切耳。因此減去文字功夫。覺得閑中氣象甚適。每勸學者。亦且看孟子道性善、求放心兩章。著實體察收拾爲要。其餘文字且大槩諷誦涵養。未須大段著力考索也。

是書在淳熙十二年乙巳四月、十四年丁未七月間。朱子五十六歲至五十八歲間。

案。朱子答石應之書文集卷五十四、三葉裏云。熹衰朽殊甚。春間一病狼狽。公謹見之。繼此

將理一兩月。方稍能自支。然竟不能復舊。幸且復得祠祿休養云云。朱子淳熙十年癸卯春正月。差主管台州崇道觀。十二年乙巳春二月祠秩滿復請祠。夏四月差主管華州雲臺觀。是書所云幸且復得祠祿者。自當指雲臺之差。又云。上略雖無新得。然亦愈覺聖賢之不我欺。而近時所謂喙喙爭鳴者之亂道而誤人也。無由面論。臨風耿耿。公謹想已到彼矣」。朱子辨浙學在甲辰。辨陸陳二學之非在乙巳。則所謂喙喙爭鳴者。指呂陸陳三子之徒也明矣。是書答周叔謹書云。應之甚恨未得相見。其爲學規模次第如何」。此公謹葉公謹改姓字曰周叔謹已到應之之後。朱子與書所答。蓋係同時之事。朱子丁未秋七月。除江南西路提點刑獄公事待次。則是書自在丁未七月前也。

又案。石應之名宗昭。與兄斗文同問學于朱呂陸三氏之門。初爲象山所喜。復感于異說。而祭東萊之文。以爲石火電光。是區區者之不足恃。象山見之駭其迷繆。宋元學案卷七十七槐堂諸儒學案東萊以淳熙八年歿。則是時應之已入浙學。叔謹名介。從東萊晦翁遊宋元學案卷七十三麗澤諸儒學案亦爲浙學之徒。浙學之弊。在博與雜。是書後半自言其意。實在

以救石周二子之弊。此亦有爲之言。不足以爲晚年定論也。答呂子約書文集卷四十七第廿六葉云。大抵此學以尊德性求放心爲本」。學問之要。雖固不外于此。其意在於救子約輕內重外、棄經求史之病。與是書同一意。且夫勸看孟子。非全廢讀書講學也明矣。

答陸象山朱子文集卷三十六第七葉

熹衰病日侵。去年災患亦不少。此數日來病軀方似略可支吾。然精神耗減。日甚一日。恐終非能久於世者。所幸邇來日用功夫。頗覺有力。無復向來支離之病。甚恨未得從容面論。未知異時相見。尚復有異同否耳。

是書係淳熙十三年丙午。朱子時五十七歲。

案。陸象山年譜。繫是書于淳熙十三年。蓋有所據也。朱子文集所載答陸書凡六篇。不錯年次先後。是書前書係淳熙十一年甲辰。次書十四年丁未。則年譜所繫。定非臆度也。

又案。陸子之難朱子在支離。朱子之排陸子在禪學。淳熙乙未會鵝湖之後。朱子

則深省反求。痛矯支離之病。故至此云無復向來支離之病。陸子則終身不改其說。朱子以乙巳始辨陸學之非。自是之後。終始攻排不已。丙午答程正思書文集卷五十第三十二葉云。祝汀州見責之意。敢不敬承。蓋緣舊日會學禪宗。故於彼說雖知其非。而不免有私嗜之意。亦是被渠說得。遮前掩後。未盡見其底蘊。譬如楊墨。但知其爲我兼愛。而不知其至於無父無君。亦不知其便是禽獸也。去冬因其徒來此。狂妄凶狠。手足盡露。自此乃始顯然鳴鼓攻之。不復爲前日之唯阿矣」。所云彼指象山。其徒即傅子淵也。謂朱子晚年合陸子者。誤矣。

答符復仲朱子文集卷五十五第二十三葉

聞向道之意甚勤。向所喻義利之間。誠有難擇者。但意所疑以爲近利者。卽便舍去可也。向後見得親切。却看舊事。只有見未盡、舍未盡者。不解有過當也。見陸丈回書。其言明當。且就此持守自見功効。不須多疑多問。却轉迷惑也。

是書疑在淳熙八年辛丑。朱子時五十二歲。

案。符復仲建昌人。李穆堂點次象山全集云、符復仲諱初疑、舜功從兄弟同師事、蓋初從遊陸象山。後請教朱子者。是書云。向所喻義利之間。誠有難擇者」。淳熙八年辛丑。象山訪朱子于南康。朱子乃請登白鹿洞書院講席。象山講君子喻於義喻於利一章。是書蓋在復仲聽象山義利說之後。

又云。見陸丈回書。其言明當」。象山全集卷四有與符復仲書一篇、恐即是、十二年乙巳。朱子辨陸學之非。是書蓋在乙巳前。白田王氏云。壬寅後多稱其官。此只云陸丈。當是庚子辛丑間也。愚以爲當是辛丑。王氏以是書爲在淳熙戊申者。恐誤。象山年譜淳熙戊申條下。舉朱子與劉仲復書符復仲誤劉仲復、云。陸丈回書。其言明當。且就此持守自見功效。不須多疑多問。却轉迷惑」。此不必以是書爲在戊申也。王氏豈誤認以爲在其年歟』。又案。是書云。見陸丈回書。其言明當。且就此自守自見功効」。此朱子於陸子。不過與其是當者耳。以是一事不可謂朱全合陸也。答復中一書云。且讀易傳甚佳。但此書明白而精深。易讀而難曉。須兼論孟及詩書明白處讀之。乃有味耳」。此勸讀書窮理者。乃是與陸自相異處。

日用功夫。不敢以老病而自懈。覺得此心操存舍亡。只在反掌之間。向來誠是太涉支離。蓋無本以自立。則事事皆病耳。又聞講授亦頗勤勞。此恐或有未便。今日正要清源正本。以察事變之幾微。豈可一向汨溺於故紙堆中。使精神昏弊。失後忘前。而可以謂之學乎。

是書在淳熙十四年丁未。朱子時五十八歲。

案。是書文集編次在丁未五月十三日、七月三日兩書。後題下有九月十三日小記。而無甲子以前書。推之自當在丁未。

又案。是書前半自悔之言。亦自言以救子約博雜而本不立之病耳。後半正是痛砭子約功利之病。戒其汎濫多讀者。非自言其學也。是書又云。讀古人書。直是要虛著心、大著肚、高著眼。方有少分相應。若左遮右攔。前拖後拽。隨語生解。節上生枝。則更讀萬卷書。亦無用處也。」卽知朱子非肯廢讀書窮理之功者也。

與吳茂實朱子文集卷四十四第三十三葉

近來自覺向時工夫。止是講論文義。以爲積集義理。久當自有得力處。却於日用功夫。全少點檢。諸朋友往往亦只如此做工夫。所以多不得力。今方深省而痛懲之。亦願與諸同志勉焉。幸老兄徧以告之也。

是書在淳熙六年己亥。朱子時五十歲。

案。是書云。陸子壽兄弟。近日議論、與前大不同。却方要理會講學。其徒有曹立之、萬正淳者。來相見。氣象皆儘好」。淳熙六年、答呂伯恭書云。子靜近得書。其徒曹立之者來訪。氣質儘佳。亦似知其師說之誤」。與是書所云事相合。乃知是書在己亥也。

又案。鵝湖會後。朱子痛懲向來支離之病。於日用功夫。深用點檢之功。是書明語其消息者。然至于涵養致知並進之宗旨。則自初無毫所變也。

答張敬夫朱子文集卷三十一第十五葉

熹窮居如昨。無足言者。但遠去師友之益。兀兀度日。讀書反己。固不無警省處。終是旁無彊輔。因循汨沒。尋復失之。近日一種向外走作。心悅之而不能自已者。皆準止酒例戒而絕之。似覺省事。此前輩所謂下士晚聞道。聊以拙自修者。若充擴不已。補復前非。庶其有日。舊讀中庸愼獨、大學誠意。毋自欺處。常苦求之太過。措詞煩猥。近日乃覺其非。此正是最切近處。最分明處。乃舍之而談空於冥漠之間。其亦悞矣。方竊以此意痛自檢勒。懍然度日。惟恐有怠而失之也。至於文字之間。亦覺向來病痛不少。蓋平日解經。最爲守章句者。然亦多是推衍文義。自做一片文字。非惟屋下架屋。說得意味淡薄。且是使人看者、將注與經作兩項功夫。做了下。稍看得支離。至於本旨。全不相照。以此方知漢儒可謂善說經者。不過只說訓詁。使人以此訓詁玩索經文。訓詁經文不相離異。只做一道看了。直是意味深長也。

是書在淳熙二年乙未。朱子時四十六歲。

案。是書云。傷急不容耐之病。固亦自知其然。深以爲苦而未能革」。敬夫答元晦書（南軒文集卷二十二、七葉裏）云。伯恭今次講論如何。得渠書云。兄猶有傷急不容耐處。某又恐

伯恭卻有太容耐處」。則知是書爲答敬夫答書者。張書首云。某守藩倏八閱朔矣」。又云。靜江氣象開廓。風氣疎通。覺得無瘴癘寒暄之候。殊不異湘中。環城諸山奇變。柳子厚所謂拔地峭堅。林立四野。此語足以盡其大概」。南軒之除知靜江府。經略安撫廣南西路。實在淳熙元年甲午。三先生祠記南軒文集卷十、十三葉裏云。淳熙二年靜江府臣張某。卽學宮明倫堂之旁。立三先生祠」。張書又云。三先生祠甚設有小記納去」。則張書之在乙未可知也。朱書在十二月。其係乙未也亦明矣。白田王氏亦繫之乙未者是。

答呂伯恭朱子文集卷三十三第三十六葉

道間與季通講論。因悟向來涵養功夫全少。而講說又多。彊探必取。尋流逐末之弊。推類以求。衆病非一。而其源皆在此。恍然自失。似有頓進之功。若保此不懈。庶有望於將來。然非如近日諸賢所謂頓悟之機也。向來所聞誨諭諸說之未契者。今日細思脗合無疑。大抵前日之病。皆是氣質躁妄之偏。不曾涵養克治。任意直前之弊

耳。

是書在淳熙三年丙申。朱子時四十七歲。

案。是書云。昨承遠訪。幸數日欵誨論開警良多。別忽五六日。雖在道途。不忘向仰。乍晴漸熱。伏惟尊候萬福。熹十二日早達婺源。乍到一番人事冗擾所不能免。更一兩日遍走山間墳墓歸。亦不能久留也」。是如婺源復遠祖墓之事。而事在淳熙三年丙申。

答周純仁 朱子文集卷六十第一葉

閒中無事。固宜謹出。然想亦不能一併讀得許多。似此專人來往勞費。亦是未能省事隨寓而安之病。又如多服燥熱藥。亦使人血氣偏勝。不得和平。不但非所以衞生。亦非所以養心。竊恐更須深自思省收拾身心。漸令向裏。令寧靜閒退之意勝。而飛揚躁擾之氣消。則治心養氣。處世接物。自然安穩。一時長進。無復前日內外之患矣。

是書當在淳熙九年壬寅。朱子時五十三歲。

案。是書云。偶小兒赴銓未歸」。淳熙七年庚子。朱塾應鄉舉。文集卷三十四、三十葉裏答呂伯恭 其赴銓自在庚子後。又云。昨日又聞廟堂一番除拜。固不足爲吾道之重輕。然於故舊或略能垂意。但在自己分上。只合閉門堅坐。聽其所爲。切不可因此便起妄念。徒爾紛紜有損無益也」。朱子以淳熙八年八月。除提舉兩浙東路常平茶鹽公事。九年正月。巡歷紹興府屬縣婺州衢州。奏劾贓吏。七月入台州。奏劾前知台州唐仲友不法。丞相王淮與仲友同里。且爲姻家。匿其章不以聞。朱子力章前後六上。淮不得已。奪仲友江西新令。以授朱子。是書所云廟堂一番除拜者卽是。時陳賈爲監察御史。賈面對。首論近日薦紳有所謂道學者。大率假名以濟僞。願考察其人。擯棄勿用。蓋指朱子也。是書云只合閉門堅坐聽其所爲者。爲是也。乃知是書自在淳熙九年。

又案。是書說收拾向裏。其意在救純仁躁擾之病也明矣。不須復辯。

答竇文卿朱子文集卷五十九第十四葉

爲學之要。只在著實操存、密切體認、自己身心上理會。切忌輕自表襮。引惹外人辨論。枉費酬應。分卻向裏工夫。

是書在淳熙十三年丙午以後。朱子五十七歲以後。

案。宋元學案卷六十九云。竇從周字文卿。丹陽人也。生長田里。衣食自給。其爲人醇朴。深居簡出。足不及城市。年過五十。從游默齋學。後聞朱子講席之盛。卽裹糧從之」。以朱子語類序目參之。從朱子學。始自淳熙丙午。則是書自在丙午以後。

又案。答竇文卿一書文集卷五十九第十三葉云。公謹未及附書。相見煩致意。渠從呂東萊讀左傳。宜其於人情物態。見得曲折。今乃如此不解事何耶」。周公謹旣有浙學之弊。文卿與之友交。故朱子說之以向裏工夫。亦出于矯偏救病。又一書文集卷五十九第十四葉云。吾黨但當日加持守省察之功。而不廢講誦討論之業。專以古人之爲己者爲師。而深以今人之爲人者爲戒。則庶乎其無負平生之志矣」。朱子雖說向裏工夫。然不肯廢講

誦討論之業。可以觀也。

答呂子約朱子文集卷四十八第二葉

聞欲與二友俱來。而復不果。深以爲恨。年來覺得日前爲學、不得要領。自做身主不起。反爲文字奪却精神。不是小病。每一念之。惕然自懼。且爲朋友憂之。而每得子約書。輒復恍然。尤不知所以爲賢者謀也。且如臨事遲回。瞻前顧後。只此亦可見得心術影子。當時若得相聚一番。彼此極論。庶幾或有判決之助。今又失此幾會。極令人悵恨也。訓導後生。若說得是當。極有可自警省處。不會減人氣力。若只如此支離、漫無統紀。則雖不敎後生。亦只見得展轉迷惑。無出頭處也。

是書在淳熙十四年丁未。朱子時五十八歲。

案。是書文集編次。在九月十三日、十一月二十七日兩書間。九月十三日書云。又聞講授亦頗勤勞」。是書云。訓導後生。若說得是當。極有可自警省處」。十一月二十七日書亦云。子合到此亦略能言彼中相聚曲折」。乃知三書俱係子約集徒講授

之時。而前後不大隔時。而九月十三日書係丁未。則是書亦自在丁未也。

又案。是書雖有自悔之言。然其意在假自言以救子約博雜支離之病。朱子四十六歲、與象山會鵝湖之後。於爲學工夫見一轉進。自是於向來支離之病。痛懲勇革。頗用力於日用點檢之功。故淳熙丙午答陸象山書已見前云。所幸邇來日用功夫頗覺有力。無復向來支離之病」。雖然生平學問大指。已定於乾道庚寅。以涵養致知並進、爲爲學大法者。終始不易也。

答林擇之朱子文集卷四十三第二十二葉

熹哀苦之餘、無他外誘。日用之間痛自斂飭。乃知敬字之功、親切要妙乃如此。而前日不知於此用力。徒以口耳浪費光陰。人欲橫流。天理幾滅。今而思之。怛然震悚。蓋不知所以措其躬也。

是書在乾道七年辛卯。朱子時四十一歲。

案。朱子正集、載答林擇之書三十三篇、自首篇至第十四篇。年次先後具有次第。

是書係第十篇。以前後推之。自當在乾道七年。第八篇文集卷四十三第二十二葉云。欽夫春來未得書。聞歲前屢對上意甚向之」。欽夫以乾道六年召還。爲尚書吏部員外郎兼左右司侍立。官未朞歲而召對至六七。則第八篇係乾道七年也明矣。朱子以乾道五年九月丁母憂。是書首云哀苦之餘。則在七年十月祥除之後。

答林擇之朱子文集卷四十三第三十四葉

此中見有朋友數人講學。其間亦難得朴實頭負荷得者。因思日前講論。只是口說。不曾實體於身。故在己在人。都不得力。今方欲與朋友說。日用之間。常切點檢意欲萌處。與平日所講。相似與不相似。就此痛着工夫。庶幾有益。陸子壽兄弟。近日議論。却肯向講學上理會。其門人有相訪者。氣象皆好。但其間亦有舊病。此間學者却是與渠相反。初謂只如此講學漸涵。自能入德。不謂末流之弊。只成說話。至於人倫日用最切近處。亦都不得毫毛氣力。此不可不深懲而痛警也。

是書在淳熙六年己亥。朱子時五十歲。

案。淳熙六年己亥。朱子答呂伯恭書（朱子文集卷三十四第十八葉裏）云。子壽相見其說如何。子靜近得書其徒曹立之者來訪。氣質儘佳。亦似知其師說之誤。持得子靜近答渠書與劉淳叟書。却說人須是讀書講論。然則自覺其前說之誤矣。但不肯翻然說破今是昨非之意。依舊遮前掩後。巧爲詞說。只此氣象却似不佳耳」。此與是書所云陸子壽兄弟。近日議論却肯向講學上理會。其門人有相訪者氣象皆好相合。且朱子文集三十三、三十四兩卷所載。答呂伯恭書凡九十四篇。排次一從年月先後。（卷三十三第十七書前半似失序次）是書係卷三十四第二十八書。次書則淳熙六年十一月七日書也。以是觀之。是書自當屬淳熙六年也。白田王氏繫之七年庚子。未知何所據。

答梁文叔（朱子文集卷四十四第三十一葉）

近看孟子。見人卽道性善、稱堯舜。此是第一義。若於此看得透、信得及。直下便是聖賢。更無一毫人欲之私、做得病痛。若信不及。孟子又說箇第二節工夫。又只引成覿顏淵公明儀三段說話。教人如此發憤勇猛向前。日用之間。不得存留一毫人欲

之私在這裏。此外更無別法。若於此有箇奮迅興起處。方有田地可下功夫。不然卽是畫脂鏤冰。無眞實得力處也。近日見得如此。自覺頗得力與前日不同。故此奉報。

是書蓋在淳熙四五年以後。朱子四十八九歲以後。

案。是書首云。示喻所處甚善。不知幾道相聚。作何工夫」。幾道趙師淵字也。文叔邵武人。幾道乾道八年進士。歷官衢南劍。寧海軍推官趙丞相汝愚。以從班薦與職事官。宋元學案卷六十九 邵武與南劍相近。則幾道相聚。蓋在其官南劍時矣。但雖不可確指其在何年。大約當在淳熙丁酉戊戌以後。

答潘恭叔朱子文集卷五十第十六葉

學問根本。在日用間持敬集義工夫。直是要得念念省察。讀書求義。乃其間之一事耳。舊來雖知此意。然於緩急先後之間。終是不覺有倒置處。誤人不少。今方自悔耳。

是書在淳熙十三年丙午。朱子時五十七歲。

案。文集所收答潘恭叔書凡九。是書與前後四書。其中所云事相聯絡。足以見先後不錯。前書云。修得大學中庸語孟諸書。頗勝舊本」。又云。禮記須與儀禮相參通。修作一書。中略恭叔暇日能爲成之。亦一段有利益事」。淳熙十二年七月九日與劉子澄書文集卷三十五第二十五葉云。諸書今歲都修得一過。比舊儘覺簡易條暢矣」。十四年九月十三日答呂子約書文集卷四十八第二葉云。聞子約教學者。讀禮甚善。中略近日潘恭叔討去整頓。未知做得如何」。以是二書攷之。前書在十二年七月後、十四年九月前也明矣。後書云。小學未成。而爲子澄所刻。見此刊修旦夕可就。當送書市別刊」。淳熙十三年與劉子澄書文集卷三十五第二十九葉云。小學能爲刊行亦佳。但須更爲稍加損益乃善」。則後書在十三年。是書亦自當在同年。

又案。潘恭叔名友恭。金華人。與兄端叔友端並學于朱子。宋元學案卷六十九滄州諸儒學案端叔年十七。卽從張呂。同卷七十一嶽麓諸儒學案潘氏居與呂氏相近。東萊曾薦潘氏兄弟於朱子。呂太史集與朱侍講第十七書恭叔亦自應有浙學之風。是書雖有朱子自悔之言。其意在救浙學之弊。故以持敬省察爲言。亦有爲之言也。故是書又云。大抵近日學者之弊。苦其說之太

高與太多耳。如此只見意緒叢雜。都無玩味功夫。不惟失却聖賢本意。亦分却日用實功。不可不戒也」。太高卽指陸學。太多卽指浙學。其意可以知也。

答林充之朱子文集卷四十三第三十六葉

充之近讀何書。恐更當於日用之間爲仁之本者。深加省察。而去其有害於此者爲佳。不然誦說雖精。而不踐其實。君子蓋深恥之。此固充之平日所講聞也。

是書在乾道三年丁亥後。朱子三十八歲以後。

案。朱子文集答林充之二篇。次答林擇之。擇之名用中。弟允中字擴之。朱子有字序。文集卷七十五充之擴之蓋同一人。字序云。明年乾道三年擴之亦來。視其志與其才。信乎其如擇之之言也。自是從予遊。今四五年矣。中略今年乾道八年還自吳中。過予潭溪之上。留語三日。則聞見益廣。而將有以充其才矣」。又云。擴之誠自病其才之未充。而欲卒大之耶。則亦反其本務其實而已矣」。與是書所言。其旨一也。是書蓋在丁亥三年壬辰八年之間歟。

答何叔京朱子文集卷四十第八葉

李先生教人。大抵令於靜中體認大本。未發時氣象分明。卽處事應物。自然中節。此乃龜山門下相傳指訣。然當時親炙之時。貪聽講論。又方竊好章句訓詁之習。不得盡心於此。至今若存若亾。無一的實見處。孤負教育之意。每一念此。未嘗不愧汗沾衣也。

是書在乾道二年丙戌。朱子時三十七歲。

案。答許順之書朱子文集卷三十九第十六葉裏云。此間窮陋。夏秋間伯崇來。相聚得數十日講論。稍有所契。自其去此間幾絕講矣。幸秋來老人粗健。中略湖南之行。勸止者多。然其說不一。獨吾友之言爲當。然亦有未盡處。後來劉帥遣到人時已熟。遂輟行」。劉珙乾道元年拜知潭州荆湖南路安撫使。三年召還。同年八月。朱子有湖南之行。則是書所云夏秋間伯崇來相聚者。自當在乾道二年。是書答何叔京書首云。熹孤陋如昨。近得伯崇過此。講論踰月。甚覺有益」。此言夏秋間伯崇來之事也明矣。此是書係乾道二年之一證也。朱子正集所載、答何叔京書凡三十三篇。序次從年次

先後。間有可疑序次顚倒者是書以序次言之第二書也。第三書云。雜學辨出於妄作。乃蒙品題過當。深懼上累知言之明。伏讀恐悚不自勝」。叔京跋雜學辨。在于乾道二年孟冬。第五書云。歲前報葉魏登庸、蔣參預政、陳應求同樞密知院事」。乾道二年十二月。以葉顒魏杞爲尙書左右僕射同平章事兼樞密使。蔣芾參知政事。陳俊卿同知樞密院事。則知是書第五書係乾道三年。以是推之。第二書之係乾道二年也明矣。此二證也。

答何叔京朱子文集卷四十第二十四葉

熹近來尤覺昏憒。無進步處。蓋緣日前嬾墮苟簡。無深探力行之志。凡所論說。皆出入口耳之餘。以故全不得力。今方覺悟。欲勇革舊習。而血氣已衰。心志亦不復彊。不知終能有所濟否。

是書在乾道二年丙戌。

案。是書云。今年有古田林君擇之者。在此相與講學。大有所益。」林用中字序朱

子文集卷七第十四葉表 云。古田林子用中過予于屏山之下。以道學爲問甚勤。予不能有以告也中略 一日語予。求所以易其名與字者。中略予因稍次序其語。書以贈之。乾道二年三月癸亥」。乃知所謂今年者乾道二年也。

答何叔京朱子文集卷四十第二十五葉

向來妄論持敬之說。亦不自記其云何。但因其良心發見之微。猛省提撕。使心不昧。則是做工夫底本領。本領既立。自然下學而上達矣。若不察於良心發見處。卽渺渺茫茫。恐無下手處也。中間一書。論必有事焉之說。却儘有病。殊不蒙辨詰何耶。所喻多識前言往行。固君子之所急。熹向來所見亦是如此。近因反求未得箇安穩處。却始知此未免支離。如所謂因諸公以求程氏。因程氏以求聖人。是隔幾重公案。曷若默會諸心。以立其本。而其言之得失。自不能逃吾之鑒耶。欽夫之學。所以超脫自在見得分明。不爲言句所桎梏。只爲合下入處親切。今日說話雖未能絕無滲漏。終是本領。是當非吾輩所及。但詳觀所論。自可見矣。

是書在乾道四年戊子。朱子時三十九歲。

案。是書云。近日狐鼠雖去。主人未知窒其穴。繼來者數倍於前。已去者未必容其復來」。此指出龍大淵爲浙東總管。曹覿爲福建總管之事也。事在乾道三年。又云。上近者損八十萬緡。築揚州之城」。此爲乾道四年主管殿前同公事王琪奉詔按視兩淮城堡。擅令增築揚州新城之事。可知是書在乾道四年也。

答林擇之朱子文集卷四十三第二十三葉

所論顏孟不同處。極善極善。正要見此曲折。始無窒礙耳。比來想亦只如此用功。熹近只就此處見得向來所未見底意思。乃知存久自明。何待窮索之語。是眞實不誑語。今未能久。已有此驗。況眞能久邪。但當益加勉勵。不敢少弛其勞耳。

是書蓋在乾道七年辛卯。朱子時四十二歲。

案。朱子正集所收答林擇之書凡三十三篇。自首篇至第十四篇。年次先後具有次第。是書係第十一篇。前四篇皆在乾道七年。首段云。所論顏孟不同處極善。後

段論呂正獻公家傳言及蘇氏。今觀朱 朱文公文集卷三十三答呂伯恭第五書 呂 呂太史集與朱侍講第三書 兩家集。論此等事。在乾道六年庚寅。則是書當在七年辛卯。

答楊子直 朱子文集卷四十五第十五葉

學者墮在語言。心實無得。固爲大病。然於語言中、罕見有究竟得徹頭徹尾者。蓋資質已是不及古人。而工夫又草草。所以終身於此若存若亾。未有卓然可恃之實。近因病後不敢極力讀書。閑中却覺有進步處。大抵孟子所論求其放心。是要訣爾。

是書在紹熙壬子癸丑交。朱子時六十三四歲。

案。朱子文集所收答楊子直書凡五篇。是書爲第三。前書云。且如向來出川時。所予書。無非怨懟之語」。又云。且如今書四子之說。極荷見教」。趙忠定汝愚帥蜀時。子直辟機宜。紹熙三年壬子。忠定召還薦子直于朝。召對擢宗正寺簿。其出川自在壬子。紹熙元年庚戌。朱子刊四經四子書于臨漳。所云今書四子卽是。以是推之。前書自在壬子。是書云。近因病後。不敢極力讀書」。紹熙庚戌冬十一月。

與留丞相劄子　文集卷二十八第十五葉「云。上略　舊疾發動。遍傳兩足。痛楚呻吟。不可堪忍」。辛亥十二月。辭免湖南運使狀文集卷五十三第十葉　云。舊苦脚氣。今春發動。腫痛寒熱。倍於常年。目今困重未能步履」。壬子十二月。辭免知靜江府狀文集卷二十三第十一葉　云。加以所患脚氣之疾。作止不常。春夏二時。尤難將攝」。癸丑正月狀文集卷二十三第十二葉　云。至於憂悴蚤衰。足疾時作。目昏耳重。心氣短乏。凡此種種於熹私計有不便者。則皆不敢言矣」。由此等諸狀觀之。則是書自壬子癸丑交矣。

又案。是書云。於語言中罕見有究竟得徹頭徹尾者」。此與陸學太高者自別處。又云。不敢極力讀書」。此因病後耳。非謂讀書講學可廢也。

與田侍郎子眞　朱子文集續集卷五第三葉

吾輩今日事事做不得。只有向裏存心窮理。外人無交涉。然亦不免違條礙貫。看來無著力處。只有更攢近裏面、安身立命耳。不審比日何所用心。因書及之。深所欲聞也。

是書在紹熙五年甲寅、慶元三年丁巳間。朱子六十五歲至六十八歲間。

案。朱子文集收與田侍郎書九八。是書云。吾輩今日事事做不得」。次書云。天下事既有所不得爲」。又次書云。某一病兩月。將行未果。所上告老之章。近聞亦已見卻」。又云。道學鉤黨已有名籍。而拙者辱在其間。頗居前列」。朱子乞致仕。在慶元乙卯五月。籍僞學事。在丁巳十二月。而紹熙甲寅八月。除煥章閣待制兼侍讀。十月除宮觀。則是書自在甲寅丁巳間。

又案。當時僞學之禁愈急。不能集徒講學。六經語孟中庸大學之書。爲世大禁。故云。只有向裏存心窮理。又云。只有更攢近裏面安心立命耳。以是證朱陸之同異者。誤矣。

答陳才卿朱子文集卷五十九第三十三葉

詳來示。知日用功夫精進如此。尤以爲喜。若知此心此理端的在我。則參前倚衡。自有不容捨者。亦不待求而得。不待操而存矣。格物致知。亦是因其所已知者推之。

以及其所未知。只是一本。元無兩樣工夫也。

是書在紹熙五年甲寅後。慶元三年丁巳前。朱子六十五歲後。六十八歲前。

案。朱子文集所收答陳才卿書九十六篇。是書爲第五書。第二書云。玉山所說當已見之」。紹熙五年甲寅十一月戊戌。朱子至玉山。講學于縣庠。第八書云。緣此禮書不得整頓」。慶元二年丙辰。朱子始修禮書。以兩書推之。是書自在紹熙甲寅後、慶元丁巳前。

又案。陳才卿名文蔚。其學以求誠爲本。以躬行實踐爲事。故是書亦說操存工夫。

又一書 朱子文集卷五十九第三十三葉 云。來書所喻。大率少寬裕之氣。有勁急之心。如此不已。恐轉入棒喝禪宗矣。切宜省覺」。此誡陷于陸學之弊也。雖欲引朱以合陸、不可得也。

與劉子澄朱子文集卷三十五第二十八葉

居官無修業之益。若以俗學言之。誠是如此。若論聖門所謂德業者。卻初不在日用

之外。以押文字。便是進德修業。地頭不必編綴異聞。乃爲修業也。近覺向來爲學。實有向外浮泛之弊。不惟自誤。而誤人亦不少。方別尋得一頭緒。似差簡約端的。始知文字言語之外。眞別有用心處。恨未得面論也。浙中後來事體大段支離乖僻。恐不止似正似邪而已。極令人難說。只得皇恐痛自警省。恐未可專執舊說、以爲取舍也。

是書在淳熙十二年乙巳後、十五年戊申前。朱子五十六歲後、五十九歲前。

案。朱子正集所收與劉子澄書凡十六篇。排次一從年月先後。是書係第十四書。次書在淳熙十五年戊申。第十一書在十二年乙巳。則是書當在於乙巳戊申間。

又案。是書有自悔之言。子澄素喜編綴異聞。有向外浮泛之弊。故朱子假自道之辭。以砭其病處耳。故後書文集卷三十五第二十九葉云。且省雜看。向裏做些功夫爲善」。白田王氏亦以爲謙己敎人之辭。然鵝湖會後。朱子痛懲向來支離之弊。且自悔誤己誤人之事。不可復掩矣。惟夫如欲以此說朱陸之早同晚異。是知其一而未知其二者也。

熹近覺向來乖繆處不可縷數。方惕然思所以自新者。而日用之間。悔吝潛積。又已甚多。朝夕惴懼。不知所以爲計。若擇之能一來。輔此不逮。幸甚。然講學之功。比舊卻覺稍有寸進。以此知初學得些靜中功夫。亦爲助不小。

是書在乾道六年庚寅。朱子時年四十有一。

案。是書云。某憂苦如昨。至節復不遠。又云。擴之來此相聚極有益。元履適過此云。得其子九月來書。南軒求去不獲。數日甚撓。此極知其必然。不知渠又何以處之。乾道七年辛卯。呂伯恭與朱元晦書云。某以六月八日離輦下。既去五日。而張丈去國云云。又張敬夫答朱元晦書云。某十三日被命出守云云。則南軒之去國。在辛卯六月十三日。此叙魏元履子九月來書求去不獲云云。又云。憂苦如昨。至節復不遠。而朱子之丁母憂。在己丑九月。其云節。蓋指冬至節。則是書爲庚寅十一二月之交。又林允中字序云。明年擴之亦來。視其志與其才。信乎其如擇之之言也。自是從予遊。今四五年矣。則庚寅係擴之從遊之時。云擴之來此相聚

者。卽是。

答呂子約 朱子文集卷四十八第五葉

示喩日用功夫。如此甚善。然亦且要見得一大頭腦分明。便於操舍之間。有用力處。如實有一物把住放行在自家手裏。不是謾說求其放心。實却茫茫無把捉處也。

子約復書云。某蓋嘗深體之。此箇大頭腦。本非外面物事。是我元初本有底。其曰人生而靜。其曰喜怒哀樂之未發。其曰寂然不動。人汩汩地過了日月。不曾存息。不曾實見。此體段如何會有用力處。程子謂。這箇義理。仁者又看做仁了。智者又看做智了。百姓日用而不知。此所以君子之道鮮。此箇亦不少亦不剩。只是人看他不見。不大段信得此話。及其言於勿忘勿助長間認取者。認乎此也。認得此。則一動一靜皆不昧矣。惻隱羞惡辭讓是非。四端之著也。操存久則發見多。忿懥憂患好樂恐懼。不得其正也。放舍甚則日滋長。記得南軒先生謂。驗厥操舍。乃知出入。乃是見得主腦於操舍間。有用力處之實話。蓋苟知主腦不放下。雖是未能常常操存。

然語默應酬間。歷歷能自省驗。雖非實有一物在我手裏。然可欲者是我底物。不可放失。不可欲者非是我物。不可留藏。雖謂之實有一物在我手裏亦可也。若是漫說。既無歸宿。亦無依據。縱使彊把捉得住、亦止是襲取。夫豈是我元有底邪。愚見如是。敢望指教。朱子答書云。此段大概甚正當親切。

是書疑在淳熙十四年丁未。朱子時五十八歲。

案。淳熙丁未九月十三日。答呂子約書云。日用功夫。不敢以老病而自懈。覺得此心操存舍亡。只在反掌之間云云。是書云。示喻日用功夫。如此甚善。然亦且要見得一大頭腦分明。便於操舍之間。有用力處云云。此俱說日用功夫操存舍亡。可觀兩書隔時不遠。而是書朱子文集接丁未十一月二十七日書。則亦當在丁未矣。』又案。朱子答子約書（文集卷四十八第五葉）云。舊讀胡子知言答或人以放心求放心之問。怪其觀縷散漫不切。嘗代之下語云。知其放而欲求之。則不放矣。嘗恨學者不領此意。今觀來論。庶幾得之矣。中略知得如此已是不易。更且虛心寬意。不要回頭轉腦計較論量。却向外面博觀衆理。益自培殖。則根本愈固。而枝葉愈茂矣。若只

於此靜坐處尋討。却恐不免正心助長之病。或又失之。則一蹴而墮於釋子之見矣。亦可戒也」。此朱陸雖同說求放心。至於其工夫。則有自相異處。又云。讀書如論孟。是直說日用眼前事。文理無可疑。先儒說得雖淺。却別無穿鑿壞了處。如詩易之類。則爲先儒穿鑿所壞。使人不見當來立言本意。此又是一種功夫。直是要人虛心平氣。本文之下。打疊交空蕩蕩地。不要留一字先儒舊說。莫問他是何人所說。所尊所親。所憎所惡。一切莫問。而唯本文本意是求。則聖賢之指得矣」。此其意在救子約穿鑿之病。然讀書窮理。竟是紫陽爲學之一大法。與夫金溪之以六經爲我註腳者。夐然相異矣。

答吳德夫 朱子文集卷四十五第十一葉

承諭仁字之說。足見用力之深。熹意不欲如此坐談。但直以孔子程子所示求仁之方。擇其一二切於吾身者。篤志而力行之。於動靜語默間、勿令間斷。則久久自當知味矣。去人欲、存天理。且據所見去之存之。功夫既深。則所謂似天理而實人欲者。

次第可見。今大體未正。而便欲察及細微。恐有放飯流啜而問無齒決之譏也。如何如何。

是書蓋在乾道八年壬辰前。朱子四十三歲前。

案。乾道七年答張敬夫書（朱子文集卷三十一、五葉表）云。類聚孔孟言仁處。以求夫仁之說。程子爲人之意。可謂深切。然專一如此用功。却恐不免長欲速好徑之心。滋入耳出口之弊。亦不可不察也。（中略）熹竊嘗謂。若實欲求仁。固莫若力行之近」。與是書所云相合。德夫醴陵人。年二十三見張南軒。謂聖賢教人。莫先于求仁。乃以孔門問答、及周程以來諸儒凡言仁者。萃類疏析。以請正南軒是之。（宋元學案卷七十一嶽麓諸儒學案）是書所謂仁字之說。亦不外于此。乾道八年壬辰。朱子答張敬夫書（朱子文集卷三十一、八葉）云。至謂類聚言仁。亦恐有病者。正爲近日學者厭煩就簡、避迂求捷。此風已盛。方且日趨於險薄。若又更爲此以導之。恐益長其計獲欲速之心。方寸愈見促紛迫擾。而反陷於不仁耳。然却不思所類諸說。其中下學上達之方。蓋已無所不具。苟能深玩而力行之。則又安有此弊。今蒙來喻。始悟前說之非。敢不承命」。是書蓋在於壬

辰改說之前也。白田王氏以爲癸巳後者。恐誤。

答或人朱子文集卷四十三第三十一葉

中和二字。皆道之體用。舊聞李先生論此最詳。後來所見不同。遂不復致思。今乃知其爲人深切。然恨已不能盡記其曲折矣。如云人固有無所喜怒哀樂之時。然謂之未發。則不可言無主也。又如先言愼獨。然後及中和。此亦嘗言之。但當時既不領畧。後來又不深思。遂成蹉過。孤負此翁耳。

是書未詳何時。疑在乾道五年至八年之間。

案。是書約朱子正集所載、答林擇之書三十三篇之第二十一書者。是書而下三書。皆改中和舊說之後所答。中和舊說序（文集卷七十五第二十四葉裏）云。乾道己丑之春。爲友人蔡季通言之。問辨之際。予忽自疑。斯理也。雖吾之所默識。然亦未有不可以告人者。今析之如此其紛糾而難明也。中略而前日讀之不詳。妄生穿穴。凡所辛苦而僅得之者。適足以自誤而已。至於推類究極反求諸身。則又見其爲害之大。蓋不但

名言之失而已也。於是又竊自懼。以亟書報欽夫及嘗同爲此論者。惟欽夫復書深以爲然。其餘則或信或疑。或至于今累年而未定也」。則知是書在乾道五年己丑之後。又第二十三書（文集卷四十三第三十三葉表）云。近看南軒文字。大抵都無前面一截工夫也。大抵心體通有無該動靜。故工夫亦通有無該動靜。方無透漏」。以是觀之。在欽夫未以書報之前。（中和舊說序、作於乾道八年壬辰）則知是書在乾道八年壬辰前也。

答劉子澄朱子文集卷三十五第十八葉

日前爲學緩於反己。追思凡百多可悔者。所論著文字。亦坐此病。多無著實處。回首茫然。計非歲月功夫所能救治。以此愈不自快。前時猶得敬夫伯恭時惠規益。得以警省。二友云亡。耳中絕不聞此等語。今乃深有望於吾子澄。自此惠書痛加鐫誨。乃君子愛人之意也。

是書在淳熙九年壬寅。朱子時五十三歲。

案。是書云「二友云亡」。敬夫之亡。在淳熙七年。翌年伯恭亡。又云。去冬奏對。

猶蒙上記憶。宣喻以爲善也」。此言淳熙八年辛丑冬十一月己亥。奏事延和殿。是書之係淳熙九年壬寅也明矣。白田王氏以爲癸卯者恐誤。

又案。是書云。日前爲學緩於反己。追思凡百多可悔者」。此係鵝湖會後加悟。向來支離之病。尤用功於操存涵養之時。然是事不足以證朱陸之一致。朱子則於讀書窮理上操存涵養。自與陸子相異。故後書文集卷三十五第二十六葉云。子靜寄得對語來。語意圓轉渾浩。無凝滯處。亦是渠所得效驗。但不免些禪底意思。昨答書戲之云。這些子恐是葱嶺帶來。渠定不伏。然實是如此諱不得也。近日建昌說得動地。撐眉努眼。百怪俱出。甚可憂懼。渠亦本是好意。但不合只以私意爲主。更不講學涵養。直做得如此狂妄。世俗滔滔無話可說。有志於學者。又爲此說引去。眞吾道之不幸也」。又云。文集卷三十五第二十葉到泉南宗司。教官有陳葵者。處州人頗佳。其學似陸子靜。而溫厚簡直過之。但亦傷不讀書講學。不免有杜撰處」。云不讀書講學。云不講學涵養。是彼我不相同之處。朱陸之不相合。尤爲明白。

（完）

昭和六年三月二十日印刷
昭和六年三月廿五日發行

版權所有

北宋五子哲學與付

非賣品

著者　故　松山直藏

發行者　大阪府三島郡高槻町上田部二六九　松山堯

發行所　大阪市東區豐後町十九番地　財團法人　懷德堂記念會

印刷所　大阪市此花區上福島中二丁目　株式會社　三誠舍